－文 芸－

草の丘

第８号

2015 年 6 月 印旛文学の会

文芸

草の丘 第八号（二〇一五年 六月）

目次　草の丘 第八号

《詩》
あきらめないで 他一遍　中川 とら ……一
《短編》
蛙（かわず）　土方 杳 ……三
《連載》
青い実り（第四話・決闘）　唐瀬 光 ……八
《短編》
幻滅　畑中 康郎 ……三九
《連載》
アプとズコ（第七回）　香取 淳 ……五四
初初しい季節（冬の抄）　中川 とら ……八三
《短編》
サクランボが実ったら　いんば 華子 ……九九
《評論》
私見「ミッドウェー海戦」　畑中 康郎 ……一二二
《カット》
高橋 より

（中川とら・唐瀬 光のカットは著者による）

詩

中川とら

あきらめないで

今が　どんなに生きづらくとも
明日の君を　一年後のあなたを
悲観することなどない

一筋の光も差し込まない
一輪の花も咲かない人生は
どんな人にも あり得ないのだから

運勢は
試練の先に開かれていくもの
幸運は
不運の後からやってくるのだ

どうか　未来をあきらめないで

◇

未来の予言

これは 偶然？ と君が言う
いいえ 奇跡よ！ と私は はしゃぐ

幸運と思える出来事には
しかし
日常を懸命に生きる中で
気付かずにたくわえた原因が
あったりするものだ

ならば
未来の予言や提言は
今のわたし達の生き方から
見えてくるものに違いない

◇

蛙（かわず）

土方　杳

一気に空の高みに連れていかれて蛙の太郎は生まれて初めて自分の住処の池を上から眺めることになった。グイと引き上げられる感覚で、太郎は気を失いそうになった。叫び声を出したつもりが「げこ」という小さな一言で終わった。池は人里から離れているので林があるだけで他に建物もない。林の中には大きな木があるから彼は、池の外の景色を始めてみた。だけど、鳥のくちばしが背中に食い込み彼には景色を堪能する余裕はなかった。鳥のくちばしから逃れようと身体を踏ん張ろうとしても、蛙には地面に足をつけてしか何も出来ない。そのように出来ていた。彼は、もう自分は食べられるしかないとあきらめようとした。

太郎を捕まえた鳥は、バタバタと耳障りな羽音を立てて、さらに上昇して行き、彼の池は見えなくなった。傍から見れば鳥の姿の一部が緑色になったように見えるだろう。蛙の存在はとても小さいから。鳥は人家の方から離れて山の方へと急いでいた。鳥の巣が山の方にあるのだろう。彼が抵抗することをやめると鳥は飛ぶ速度を遅くした。彼は背中の痛みに耐え、頭をひねって自分が死なないですむ方法はないかと考えた。彼は必死だ。しかし、鳥に背を向けてくちばしからぶら下がっている状態では鳥を攻撃することは出来ない。また、地面から離れた場所では、くちばしから落ちたらそのまま死んでしまう。水

の上なら何とかなるだろう。鳥も自分をくわえたままだと水も飲めない。どこかで休憩を取るかもしれない。その時に必死に抵抗してみようと考えた。

そう決心した時、山の近くの神社の側で竜巻のような風が吹いて、鳥は、大きく煽られて太郎がくちばしからはずれてしまった。

あっという間に地上が近づく、太郎は恐ろしさの余り目を閉じた。大きな水音ともに彼は井戸に落ちた。あわてた鳥が追い掛けたけれど、彼に追いつくことは出来なかった。井戸の木製の蓋には蛙が通れる穴が開いていたが、鳥が通るには穴は小さすぎた。蓋に降りた鳥はしばらく穴を覗きこんだが、日の光の入らない井戸は真っ暗で何も見えないので、あきらめて去って行った。

井戸の深い闇の中で、太郎は一息をついた。井戸の中は、彼が周りを見回しても壁しか見ることが出来ない。井戸の壁には石が積まれていて、緑色の苔がびっしり生えていた。水は少し濁っていて井戸の底がどうなっているかわからない。彼は壁に寄って行った。太郎は壁がよじ登れるかどうか確かめたくて、苔をさわってみた。滑っとした手触りがした。力を込めて苔をつかむとはがれてしまった。どうやら、壁はよじ登ることが難しそうだ。

太郎は、ぐるぐる井戸の中を泳いだ。そのうち背中の傷がズキズキと痛みだした。太郎はため息をついた。自分の生まれ住んでいた池を思い出して。

目をつぶるとはっきり見える。彼の生まれた池は周りが林に囲まれているせいか、水が澄んでいて魚も多く住んでいる。人が近づかないせいか雑草も深く生えていて太郎の好物の虫たちがいっぱいいるから蛙たちが生活しやすい環境だ。ただひとつ蛙や魚を狙った鳥から身を隠しにくいところが難点だ。太郎達も魚たちも鳥の陰には敏感だ。

今日太郎が捕まってしまったのは、おひるごはんに狙った蠅が中々捕まらず空腹で油断してしまったことが原因だった。蠅にばかりに気を取られ、鳥の気配に気付かなかった。

池に帰りたい気持ちが溢れ涙を流した。彼の中は、絶望感でいっぱいだった。

ふと気付くと目の前に、蠅が降って来た。急いで彼は舌をのばし蠅を飲み込んだ。何か気配を感じて振り返ると蝶がバタバタと必死に羽ばたいている。よくよく見回すと周りには多くの虫たちがバタバタしたり、動けなくなったりしていた。ここには風に流されて井戸に落ちた者たちが集まってくるようだ。太郎は、虫たちを腹いっぱい食べた。翌日もその翌日も虫たちがいっぱい降ってきた。彼は食料を探しに行く必要がない。毎日食べきれないほど虫たちが降ってくる。彼が感じ

た絶望感はどんどん薄れていった。

おまけに彼の天敵である鳥や蛇がいない。ここは蛙の天国だ。彼は井戸の中をぐるぐる回り虫たちを食べて暮らした。

彼がその井戸で暮らし始めて十日程経った日、雨が降った。その日は虫が降ってこなかった。彼は食べ残した虫を食べて過ごした。翌日雨が止むとまた虫たちが降って来た。何日か雨が降ると虫は降ってこなかったが、雨が止むと必ず虫たちが風に流されて来る。だから、食べ物がなくなるという不安は太郎にはなくなっていった。そんな日々が一カ月、二カ月と続き、やがて秋が過ぎた頃。すっかり彼は井戸の暮らしに馴染んでいた。彼は冬眠する準備を始めた。蛙の冬眠は土中に穴を掘ってすることが多いのだが、井戸の中にはそんな場所がないから、水につからないところを彼は探し始めた。井戸の壁を丹念に探した。すると、彼のねぐらから石一つ分上がったところに横穴を見つけることが出来た。彼は安心して秋の終りに食料を腹いっぱい詰め込んで冬眠した。

冬眠から目覚めた時には、太郎はすっかりここの暮らしが気に入って池の事を思い出さなくなっていた。

二年がたった頃井戸には小さな変化があった。井戸の蓋に開いた穴が広がってきた。日の光が広がって昼間は明るくなった。彼はそこから空を眺めるようになった。時々鳥の影が穴の上を横切ると自分の姿が鳥に見えるはずがないのに彼は急いで水に潜った。影が行き過ぎると再び空を見つめるようになっていた。

そして夜になると井戸の中には小さな月が映るようになった。太郎の住んでいた池は月がとても美しく、いい気分になって他の蛙が歌い出すので彼も一緒によく歌っていた。

ある夜、彼はあまりにも月がきれいなので、歌い出していた。久しぶりに歌ったので、最初は声がうまく出せなかった。しかし、何度も繰り返すうちに昔のように歌えた。でも自分の歌以外は聞こえない。妙な寂しさが彼の中で広がった。

それから、彼は月が出たら歌った。けれど彼の歌に合わせてくれる蛙はいなようだった。何日も何日も月に合わせて歌っていた。彼は自分が出せる精一杯の声で歌ったけれど、彼のいた池は余程井戸が遠いのだろう。誰も答えてくれなかった。

井戸に彼が落ちてから、虫たちは毎日のように降って来て一度もひもじさを味わったことがないのに、一匹で暮らす孤独に彼の心はひもじい状態のままだ。次第に太郎は食欲を失い、何もせずにぼんやり過ごすことが多くなった。このまま一匹で死んでいくのだろうかとも考えた。だが、本当に身体がからっぽになる程空腹になると無意識に虫

たちを食べていた。

ある日太郎は、壁をよじ登って井戸から出て池に帰ろうと決心した。まず、夜が明けるとすぐに腹いっぱい虫を食べて、井戸の壁を調べ始める。空腹で具合が悪くなるとまた虫を食べる。苔は強くつかむとはがれてしまうので苔の生えていないところを毎日毎日探した。中々苔のないところは見つからず、段々彼もあきらめようかと考えた頃。ようやく西側の壁の一部に苔の生えていないところを見つけた。彼は踊りだしたい気持ちを抑えて登った。

もちろん上に進むことは容易ではなかった。苔をつかんで落ちそうになったことも何度もあった。上に向かうことが出来ずに横にばかり進んだこともあった。毎日上を目指す道を少し見つけては水に戻り虫を食べた。

ようやく蓋まで近づけそうなルートをみつけた。彼は冬眠前のように一週間ずっと食べることしかせずに過ごした。身体は重みを増して動くにも億劫になり彼は食べることをやめた。丸二日壁を這いあがり続けて、自分の落ちた穴のそばまで辿り着くことが出来た。今度はもっと大きな問題があることに気付いた。壁から穴まで三十センチ程離れていて、太郎は手が届かない。蓋に飛びついたがつかめなかった彼は水の中に落ちてしまった。でも、彼はあきらめなかった。もう一度虫を食べて腹をいっぱいにすると太郎は壁を登った。今度は蓋の穴に近いところを探すため井戸の壁のてっぺんまで登り、縁をぐるりと回った。井戸の蓋は近くで見るといろんなところに小さな穴が開いていたが、太郎が通れる穴は何ヶ所しか開いていなかった。

そしてとうとう、井戸に載っている縁がそって来ていて、うまくすれば自分が通れそうな場所を見つけることが出来た。慎重に一歩一歩彼は進んだ。めくれた蓋の部分に着くと井戸の壁からその蓋の部分に近づき、背中で板を押しながら外に出ることが出来た。外に出ると夕日が今まさに沈もうとしていた。

道も森も見える風景すべてが真っ赤に染まっていた。鳥のくちばしにくわえられて見た風景を思い出しながら彼は池に戻る道を探した。記憶の中から、木々のにおいを思い出そうと必死になった。月の照らす道を彼は一生懸命に走った。周りの茂みで音がすると蛇ではないかとおびえることもあったが、脇目も振らずに走った。お腹が減っても我慢して池の事だけを考えて走った。

大きな木の根元に光る水を見た時、太郎は周りに蛇がいないか確認して池に飛び込んだ。ああ懐かしい故郷の池だ。池にいた蛙たちが一匹、また一匹と寄ってきた。皆彼の事を覚えていた。自然と月に向かって蛙たちの合唱が始まった。太郎も月に届くように声を枯らして歌

っている。お腹が減ってたまらなかったことも忘れてしまっている。
太郎は、池に戻ると虫を捕まえるのに必死にならないと暮らしていけない。けど今度は鳥に捕まらないようにずっと用心深くなった。あの井戸がどれほど暮らしやすいところであろうと二度とあそこには戻りたくなかったのだ。
太郎の井戸の話を興味深く聞く仲間もいたけれど、池を離れるものはいなかった。彼の背中には鳥にくわえられた時に出来た傷が長く残っていたから。

〈了〉

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に2回発行する等の文芸活動を行う。
・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。
・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する者とする。
・会員は、年会費千円を負担すること。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
・作品の長さについては特に規定しないが、１回に掲載できる枚数は、原稿用紙で１００枚以内とする。
・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

青い実り（第四話・決闘）

唐瀬　光

プロローグ

丈高い草におおわれた広い廃園（はいえん）の中を、乙女たちの軽やかな歌声が進んで行く。

丘の上から眺めていると、森の小道から始まった讃美歌のような合唱は、草木の生い茂る広場の中央を横切り、次第にギリシャ風神殿の建つこの丘に向かって近づいて来る。

元はさぞ豪華な西洋庭園だっただろうこの広場。その中ほどに、パルテノンのような白い神殿が建っている。神殿といってもミニチュア。それでも一軒の小さな平屋ほどはある。大理石でつくられた柱は本物のように、上部に向かって少しずつ細くなっている。

中を覗いてみると、中央に祭壇があり、その奥に背丈ほどの木像が立っていた。ふくよかな胸にギリシャ戦士のような甲冑をつけ、腰に剣を吊り、槍と盾を手にしている。古代ギリシャ時代、パルテノン神殿に安置されていたとされる、アテナ女神像のレプリカだという。

来週に聖婚（せいこん）を控えたぼくと葵（あおい）さんは、予行演習のつもりで、これから始まるその儀式を眺めていた。

その集団は蔦の絡まるレンガ塀の間を、歌声を響かせながらこちら

へやって来る。やがて丘の麓に現れた。

二、三十人はいるだろうか、先頭はブロンドの髪をした青い目の女性。裾長の白い衣装に革のサンダル。両手にオリーブの枝をささげ持っている。その姿は、さしずめ古代のギリシャ巫子（みこ）といったところか。

そのブロンド美女はここ舞鶴（まいづる）女子高の三年生で、祭礼研究部（略して祭研（さいけん））の部長をしている。なんでも父親がアメリカ人だとか。だが、彼女は諸県暁美（もろかたあけみ）という名のれっきとした日本国籍なのだ。

ギリシャ巫子の後に、赤い袴（はかま）に純白の千早（ちはや）をまとった和風巫子が二人並んでいる。和洋混在したおもしろい組み合わせだ。

彼女たちの後ろに、二人の女生徒が手を繋いでいる。さらに二十人ばかりが二列に並んで続く。三人の巫子以外は皆きっちり、上衣が白、スカートは黒だが薄い生地の、夏用セーラー服に身を包んでいた。

神殿に着くと、三人の巫子に続いて、手を取り合った二人の生徒（聖婚の当事者）、さらに後ろの二人（立会人）と、七人が中に入って行く。

彼女たちは静々とアテナ女神像の前に進む。ギリシャ巫子が祈りの言葉を唱え、オリーブの枝をうやうやしく祭壇に供える。

それを終えると、和風巫子の一人が一冊の帳簿を、そばに置かれた台の上に広げる。すると手を繋いでいた二人がその前に進み出て、帳簿に自分たちの名前を書き込む。聖婚の戸籍簿に記入しているのだ。

記帳が終わると指輪交換。和風巫子が桐の小箱から銀色に輝く指輪を取り出し、新婚さんの一人に渡す。すると彼女は隣に立っている子の右手を取り、その薬指に銀の指輪をはめた。次に立場を代えて、同じ行為が行われる。

最後にキス。二人は交互に相手の頬に軽く唇を当てた。

それから一同左右にわかれ、端の床几に掛ける。司祭のギリシャ巫子も、微笑みながら祭壇の脇に腰を下ろした。光の加減か、彼女の顔が黄金色に輝いて見える。まるで本物の女神様が現れたかのようだ。

静かな笛の音が聞こえる。巫子の一人が片膝ついて横笛を吹いている。もう一人は扇を横に滑らせながら、片手で神楽鈴（かぐらすず）を振る。

鈴の音が響き、巫子が舞う。千早の袖が宙になびき、あたかも白鶴が羽を広げて空を旋回しているようだ。

やがて笛の音が止み、舞が終わる。すると司祭の巫子が立ち上がり、この聖婚が成ったことを告げる。

これで儀式は終わり。日見子（ひみこ）（日子（ひこ）が男役、見子（みこ）は女役）になった二人は互いの腕を取り、晴れやかな表情で神殿から出て来た。

ぼくは恋人の葵さん（伊東葵（いとうあおい）・じき十八歳になるが、病気で一年遅れたため二年生）の手を握り、皆の去ったこの丘を下りようとした。

彼女の卵型の顔、黒い大きな瞳がうきうきと期待に輝いているよう

に見える。二つに分けた長いおさげの髪が腰の所で揺れている。
「参考になったかい？」
その時、後ろから男のような低い声が響いて、思わず飛び上がった。葵さんも驚いたと見え、ぼくの手をほどいて後ろを向く。
神殿の陰から一人の小柄な紳士が現れた。紺色の長袖シャツにグレーのズボン。足には男物の黒い革靴。だが、七、三にわけた髪の下に見える小づくりの顔は、生徒たちのよく知る人。
「理事長！」
ぼくと葵さんの声が重なる。
「驚かして済まなかったね」
理事長小村正美（こむらまさみ）……深い森と高い塀に囲まれたこの学園の中を、ただ一人闊歩できる唯一の男。いや性転換前は女だったから、本物の男とはちょっと違うが……。
彼はぼくたちの前までゆっくり歩いて来ると「君たちも、やっと念願がかなったね。楽しみにしているよ」とやさしく声をかけて来た。
「は、はあ……」
学園の最高権力者を前にして、なにを言ってよいかわからず、ぼくも葵さんも、あいまいな返事しかできなかった。
彼はそれにはかまわず、廃園の中を行く生徒たちの行列を眺めながら「今日もいい日だ」とうれしそうにこの丘を下りて行った。
一生徒にすぎないぼくたちの聖婚を、なぜ理事長が気にかけているのだろう……。ぼくと葵さんはその小柄な姿が草木の間に見えなくなるまで、呆然と見送っていた。
ぼく……おっと自己紹介がまだだった。名前は立花芯（たちばなしん）という。『シン』……男のような響きだが、ぼくの性自認は男性のそれだから、この名前は大層気に入っている。胎児だった頃のホルモン異常かなにかで、脳の方は男性の構造になってしまったが、身体は女性。世間では『性同一性障害』などと言っているが、ぼく自身は『障害者』などとは思っていない。考え方感じ方が、男と同じというだけの話だ。
幼い頃から男と女、その思考の違いに悩まされた。だがこの全寮制女学園に入ってから、かなり落ち着いて来た。なにせここは、生徒はもちろん、教師から用務員まですべて女性。区別する対象がないのだ。
それに、この学園には、同じ男脳を持つ仲間が数十人はいる。先ほど現れた理事長も、今は手術で男の身体になっているが元は女性。彼（？）は同じ障害を持つ生徒を全国から集めて来たのだ。
二年生の蘭（らん）先輩（七島蘭（ななしまらん））や、同学年の黒木カズ（黒木和子（くろきかずこ））に福地（ふくち）さぎりとは、たちまち親友という間柄になった。

決闘

1

季節は梅雨。空には薄い雨雲がかかり、毎日降ったり止んだりの天気が続いている。だが、ぼくの心はどこまでも続く青い空のように、澄み渡っていた。

（もうすぐ、葵さんと一緒になれる）

初めてこの学園に足を踏み入れたその日に、運命のようにぼくの前に現れた彼女。それ以来、ずうっと追い求めていたその人と、ようやく結ばれるのだ。

ぼくたちは多くの生徒から祝福を受け、心躍る思いで近づいて来る聖婚の準備に追われていた。

立会人（仲人）が必要だが、ぼくはルームメイトの尾鈴美雪（おすずみゆき）（通称、お雪（ゆき））にその役を頼んだ。葵さんの方も慣例通り同室の美貴（みき）さんだ。

式の準備には同じクラスの赤木宮子（あかぎみやこ）（宮（みや））や、彼女の伴侶になった黒木カズ、陸上部の福智さぎり、それに美貴先輩の見子で、まだ中学生のような幼い感じのする伊倉綾（いくらあや）ちゃんが手伝ってくれた。

また、この婚儀は校内マスコミにも大きく取り上げられ、『この夏、一番の話題』などと報じていた。「式に参加したい」と言う者が多く、参列者を絞るのに、お雪と美貴さんは頭を悩ませていた。

葵さん嫌いの蘭先輩でさえ「よかったな」と言ってくれた。ただし、「これで、あのじゃじゃ馬も少しはおとなしくなるだろう」とつけ加えるのを、忘れなかったが。

式の日取りは、六月の第三日曜日に決まった。ぼくは前日の土曜日を希望したが、葵さんに「あなたの誕生日にやりたいの」と押し切られてしまった。翌日に授業を控えた夜は、キャンプ場の小さな山小屋が借りられない。（あのミニハウスで初夜を）というぼくの目論見はあえなく頓挫した。

しかたがない、式を終えたら彼女の希望通り『校外旅行』に出かけるとしよう。学園の外に出るなんて、入学以来、実に三ヶ月ぶりだ。

ぼくは「新宿に行きたい」と言ったが、葵さんは「わたしに任せて」と、目的地を教えてくれなかった。

それから日見子の証し、銀の指輪を作りに、葵さんと工作室に出向いた。そこに備えてある工具を借りて、自分たちで製作するのだ。

まず材料の銀粘土を細長くこねて、指のサイズに合った棒状の型に巻きつける。それに文字や紋様を刻む。型から抜き取り、小型電気炉

で焼く。すると、あぁら不思議。粘土が銀に変わっているではないか。
作り方はいたって単純だが、焼いた物を取り出してみると、表面がデコボコになっていたり、キズがついていたりするので、研磨するのにさんざん苦心する。工作部の生徒に教わりながら、なんとかまともなものに仕上げた。
できた指輪を透かすようにして見ると、表面の細かい線（光のデザイン）を背景に『見』の字が浮き出ている。見子の『見』だ。
ぼくが作っているのは、葵さんの指にはめるもの。彼女の製作しているものが、ぼくの指輪で、こちらには日子の『日』が見える。
奇麗に磨き上げると、指輪の内側に『S・A』とアルファベットを刻む。『シンからアオイへ』という意味だ。逆に葵さんは『A・S』と入れている。
この創作に、彼女は入学したての小学生のように目を輝かせていた。
指輪ができると、それを入れる箱を作る。こちらは桐の板を接着剤で張り合わせ、その上にラッカーを吹きつける。箱の表面は紫を帯びた深い群青色に仕上げた。蓋にはぼくと葵さんの名前を白いペンキで丁寧に書き込む。
その箱に二つの指輪を納め、葵さんと一緒に祭研部に持って行った。
そうこうしているうちに、式はいよいよ明日に迫った。その夜、ぼくは自分の部屋で、仲人のお雪と最後の打ち合わせをしていた。
「いい、指輪交換が終わったらキスをするのよ。でも映画みたいに、唇に『ブチュー』はダメ。みんなが見てるからね。ほっぺに、ちょっと触れる感じでいいのよ」
彼女は自分の唇をとんがらせて「チュ！」とやって見せた。なかなかこまめに指導してくれる。
（やるべきことは、やった……）
いよいよ明日はあこがれの人と一緒になれる。ぼくはこれまでの人生で最も幸福な時を迎えようとしていた。身体に軽い疲労を覚え、そのまま、お雪のベッドに横になる。
その時、廊下をパタパタ走って来る音が聞こえた。足音が部屋の前で止まる。すると急にドアが開いて、一人の小柄な少女、綾ちゃんが飛び込んで来た。
「大変よ、大変。大変だよ、大変！」
彼女は両手を広げて、必死になにかを伝えようとしているが、「大変」を繰り返すばかりで一向に要領を得ない。
続いて蒼白な顔をした美貴先輩が現れた。
「葵が、寮長の貴子（たかこ）様と朋江（ともえ）に連れて行かれたよ！」

いつも冷静な彼女が、かなり動揺している。
「連れて行かれたって……どこに？　なんで？」
ぼくはこの二人がなにを騒いでいるのか、さっぱりわからない。
「どこだが知らないけど、連れて行かれたのさ。そん時の貴子様は、普通じゃなかったね。厳しい顔をしてさ。あたしゃあ、なにかが起こったと、ピンと来たね。たぶん、葵とキミのことだと」
次に宮とカズのペアが来た。
「カラオケボックスで、カズとデュエットの練習をしていたの。終わってドアを開けたら、隣の二号室に寮長と総長が葵様を連れ込んだわ。そう……無理やりって感じで。部屋の中から、蘭先輩の怒鳴り声が聞こえた。それからすぐ、智世（ともよ）様と美里（みさと）様がやって来た。二人とも硬い顔をして、とても歌を歌いに来たって感じじゃなかったわ」
宮は大男（？）のカズを背にして、柔らかく首をかしげた。
総長とは秋月貴子（あきづきたかこ）の見子、宮浦朋江（みやうらともえ）のことだ。寮の総務をやっているので「総長」と呼ばれている。
この寮は、寮長に剣道部部長の秋月貴子、補佐に副部長の七島蘭、総務に師範代の宮浦朋江と、剣道部のトップ３が三役を兼ねている。
剣道着に身を包んだ部員を引き連れ、竹刀片手に寮内をのし歩くその姿は、かの新選組を彷彿とさせるものがあり、とても外部からストーカー男の忍びこむ余地はない。
「それだけじゃ、なにがあったかわからないよ。単に生徒会のことかもしれないし……」
ぼくは首をひねって、お雪の方に目を向けた。だが、彼女はアゴに手を当てて、しきりになにか考え込んでいる。
「あれかしら」、「これかしら」と推測していると、今度は黒く日焼けした皮膚に、白いランニングシャツを張りつけたような、福地さぎりがやって来た。
「おい、シンさん。今、女神様がカラオケの方へ連れて行かれたぞ。連れて行ったのは総長の朋江さんだ」
「女神様って、あのギリシャ巫子のことか？」
「そう、祭研の暁美様だ。きっと風呂上がりなんだろう。あの金髪からしずくが垂れてたよ。ダサいトレーナー姿でさあ。なんか深刻な顔をしていたぜ」
さぎりは、かなり戸惑っている様子。真黒に日焼けした指で、スポーツ刈りの短い髪をせわしげにかきむしる。
ここで、それまで黙って聞いていたお雪が初めて話に加わる。
「ふうん、祭研の部長がかかわることって……聖婚の儀式。それ以外に考えられないわねえ。そこに葵様がからんで来るとしたら……そう、

シンとの婚儀ね。クレームがついたのよ。きっと」
「なんだって、オレたちの式にクレーム？」
ぼくは「そんなはずはない！」とお雪を睨みつけた。
「不測の事態が起こった……と、考えられないかしら」
「不測の事態？　なにそれ？」
みんなの声が重なる。
狭い部屋に七人が集まって騒いでいると、ドアをノックする音がした。カズが開けると、そこには生徒会副会長の一ッ葉美里（ひとっぱみさと）が立っていた。まだ自分の部屋に帰っていないのか、セーラー服のままだ。
「美里様、いったいなにがあったんです？　なんで葵さんたちがカラオケボックスに集まっているのです？　明日の式に関係があるのですか？」
ぼくは小柄な美里様を、問い詰めるように見おろした。
「今ね、智世たちが話し合っているわ。あなたと葵の聖婚のことで。貴子と蘭から異議が出たの。だから、その話し合いよ」
彼女がなにを言っているか、まったく理解できなかった。いや、ぼくだけではない。ここにいる全員が唖然としている。
「異議って？　自分と葵さんの交際は自由でしょう。なんの不満があるんです？」
「あなたと葵がつき合うだけなら、どうということもないの。ただ、聖婚となると話は別。それは文字通り『聖なる婚姻』という意味で、本人たちはもちろん、まわりの人も、充分に納得できるものでなければならないの」
「だったら、なにも問題ないでしょう。なあ、みんな」
部屋にいる仲間たちを振り返ると、全員が首を縦に振っていた。
「それが、ねえ……そうも、いかなくなったのよ……ねえ……」
彼女は口の中で、なにかモゴモゴつぶやいている。
ぼくは次第にイラついて来た。
「美里様、失礼！」
彼女を強引に押しのけると、ドアを乱暴に開けて廊下に飛び出す。
「シン君、お待ちなさい！」
彼女の声が追いかけて来たが、かまわず走った。カラオケ室のある二階まで一気に駆け上がる。振り返ると、後ろから仲間たちがドヤドヤついて来るのが見えた。
宮の言っていた二号室の前には、一人の生徒が腕組みをして立っていた。寮総務の朋江さんだ。
「入っちゃあ、ダメ！」

彼女はぼくが来るのを見越していたかのように、両手を広げて通せんぼをする。
でも、かまわず突っ込む。小外刈りで彼女を床に倒してから、ドアノブをつかんで押したり引いたりした。だが開かない。
「残念ねえ。カギはここにあるよ」
起き上がった朋江さんが、ホルダー付きのカギを指先に見せびらかしながら逃げる。
（ちくしょう！）
追いかけようとしたその時、後からついて来たカズが、その長身を生かして、彼女からヒョイとカギを取り上げた。
「こらーっ！」
地団駄踏んで悔しがる彼女。でも竹刀を持っていない時の朋江さんなんて、なにほどでもない。
カズが投げてよこしたカギで、二号室のドアを荒々しく開け、中に飛び込んだ。そこには五人の生徒が椅子に掛けていた。皆、唖然とした表情でぼくを見上げる。
部屋の中は、壁に沿って長椅子が『コ』の字型に配置してある。中央にカラオケの機器が置いてあるが、もちろん誰も歌っていない。
長椅子の中程には、まだ櫛を入れてないのか、乱れた金髪の『女神』こと祭研部長の暁美様。白いトレーニングウェアのそこここが、髪からしたたるしずくで濡れている。こんな野暮ったいギリシャ巫子の姿を目にするのは、入学以来、初めてのことだ。
その左側に、生徒会長の智世様と書記の葵さん。対面して、右側に貴子様と蘭先輩。お互いに睨み合うようにかけている。
「シン、どうしてここに！」
不意に侵入したぼくを見て、葵さんのうろたえた声がした。
「シン、出て行け！　おまえには関係ない」
反対側から蘭先輩の怒鳴り声が飛んで来る。
「みなさん、どうしたのです？　聖婚が取り消しだなんて。自分と葵さんのどこに不審な点があるんです？」
怒りを込めてそう叩きつけると、今度は首をまわして、竹刀を胸に抱いた剣道着姿の蘭先輩を睨みつける。
「先輩も言いましたよね。『よかったな』って。あれは、同意の意味じゃなかったんですか？」
「それは……その時は、そう思った。だが状況が変わったのだ。おれは今日、貴子様を問い詰めて聞き出した。そして（これは、ほっとけない）と思った。だからだ！」
「そんな！　オレと葵さんが一緒になっちゃいけない、どんな理由が

あるんです？　聞かせてもらえませんか、えっ！」
　ぼくは肩を怒らせて、のそりと蘭先輩に詰め寄った。その剣幕に彼女も竹刀をつかんで立ち上がる。
「下がれ！　シン。上級生に向かってなんだ、その態度は！」
　顔を真っ赤にして威嚇するが、小柄で美少女然としているため、あまり迫力を感じない。
「やめなさい！　シン」
　ついに葵さんが来て、ぼくの肩を引き寄せる。そして耳元で「落ちついて」と小さな声で諭した。
　その様子を見て、先輩の顔がフッと柔らかくなる。
「まあ聞け。おまえと葵が、つき合っちゃいけないなんて言ってないぞ。これまで通りイチャイチャしてていいのだ。それだけなら、なんの問題もない。だが聖婚だけはダメだ。理由か？　それは、今は明かせない。だが、そのうち必ず、みんなの知るところとなる。そうなったら大騒ぎだ。シン、ここは引いてくれ。これも、おまえのためだ」
　先輩の持ってまわった言い方に、次第にがまんの限界が来た。
「だから、どんな理由があるんです？　自分も当事者なんですよ。知る権利がある！」
　葵さんを振りほどいて再び詰め寄ると、先輩の顔は恐ろしい般若のように変化した。
「そうか、そんなに知りたいのか。なら、そこにいる、おまえの恋人に聞くがいいさ。葵はすべてを知っているのだ。なにせ、親の代から翔鶴院（しょうかくいん）に出入りしていたからな。知っているくせに、隠して、おまえに近づいたのだ。許せん！」
　先輩の言ってることが理解できなかった。呆然として聞き返す。
「翔鶴院とオレ……なにか関係あるんですか？」
「だから、葵に聞けと言ってるだろうが！」
　その剣幕に押されて葵さんを振り返ると、彼女は青い顔をして、小刻みに震えていた。
「シン、あなた……」
　なにか言おうとして、言葉を詰まらせる。
「待て！　僕から話そう」
　それまで黙って聞いていた生徒会長の智世様が、勢いよく立ち上がる。彼女は面長の顔に片手を添え、思案気に部屋の中央に進んで来た。
「智世、それは……」
　葵さんがうろたえる。
「葵、シン君はいずれ知る。いや、カレばかりではない。そのうち生徒全員に知れ渡るだろう。なら、早い方がいい」

次にぼくの方に目を移す。
「君はもう十六になるのだろう。昔なら、もうりっぱな大人じゃないか。当然、自分のことは自分で知っておくべきだ」
夏用セーラー服に身を包んだ智世様が、背筋を真っ直ぐ立て、部屋の入口に歩いて行く。そしてドアを開け、外を覗く。そこには美里様が腕組みをして立っていた。
「いいか美里、誰も入れるなよ」
彼女はそう耳打ちすると、周囲を取り巻いているギャラリーたちに言い渡した。
「今、大事な話をしているのだ。騒ぎを大きくしないでくれ。ここは僕に任せて、みんな部屋に帰りなさい」
彼女の毅然とした態度に、集まっていた生徒たちは三々五々散って行った。

2

「まあ座りたまえ」
うながされて、ぼくは『アポロンとマリア様の顔を合わせ持つ』と言われる、生徒会長の高城智世（たかじょうともよ）（別称『女帝』）の隣に腰を下ろした。
彼女は、左脳と右脳を使いわける訓練をしているという。女性らしくしたい時は右脳、男のように議論する時は左脳と、自在に思考を切りかえるらしい。
右手はギリシャ風巫子の暁美様。彼女はまるで『考える人』のようなポーズで、物思いにふけっていた。時折り、クシャクシャの金髪を片手で掻きむしっている。
その隣はクレオパトラ似の寮長、秋月貴子。その次は美少女戦士蘭。
葵さんは智世様の向こうから、心配そうにぼくの顔を見つめている。学園を代表する美女五人に囲まれても、ぼくの心はウハウハとはならなかった。智世様は、ぼくの顔を覗きながら話を切り出す。
「いいかい、正直に話して欲しい。君は自分の母上をどう思っている？」
いきなり、お袋のことを持ち出されて面食らった。
「どう思っている、って？」
「つまり、産みの親かどうか、疑ったことはないかな？」
「智世！」
葵さんが、食いつきそうな顔で睨む。
「葵は黙っていてくれ。これは、シン君自身の問題なのだ」
彼女は葵さんを一瞥してから、またこちらに目を移した。
ぼくは正面から、智世様の黒い瞳を覗き込んだ。それはまったく動

じない強い光を放っている。指導者としてのゆるぎない自信を、そこに感じ取った。

そのせいか、動揺していた気持ちが、不思議と静まって来た。視線を床に落として、過去の記憶をたどる。

ぼくは物心ついた頃から「お父さんに似ている」とは言われていたが、お袋に似ていると言われた覚えはない。

小学校に上がった時「もらわれっ子」という、うわさがあるのを知った。親に聞いたが、もちろん「違う」という返事だった。

五年生の頃、ぼくがあまりにしつこく聞くので、親父が戸籍謄本なるものを見せてくれた。

「ほら、ここのどこにも養子とは書いてないだろう。お前は間違いなく、俺とお母さんの子なのだよ」

そう言った親父の顔が、今では、なんだかうさん臭げに思い出される。その時は一応納得したが、クラスの子たちは相変わらず陰でこそこそささやいていた。

中学生になると、身体がかなり大人に近くなるものだが、お袋にはまったく似て来なかった。親父には所々似ているところもあったが、全体の姿や顔かたちはかなり違っていた。

（そう……似ていると言えば……）

思わず「あっ！」と叫んだ。

先月の初め、学園の森にある尼寺、翔鶴院のお茶会で、住職の翔鶴院様（ここの住職は代々寺の名を称する）がぼくを「正子（まさこ）」と呼んだ。認知症を患っているせいで、少女時代の菖蒲尼（しょうぶに）様と間違えたのだ。

それにお茶会の後で見せられた、あの古い写真。その時はなんとも思わなかったが、そこに写っていたセーラー服の正子様は、ぼくそっくりではないか。

「まさか！　菖蒲尼様の……」

脳裏に稲妻が走った。あとは言葉が続かない。

「そう、そのまさかだ。君は、まさしく、君のお父上と菖蒲尼様の間にできた子なのだよ」

智世様は、ぼくの目を真っ直ぐ見つめて、自信たっぷりに言った。

「でも、確か、戸籍が……」

「戸籍など、どうにでもなるさ。生まれたばかりの時、ある人の子として届ければ、戸籍上はその人の子だ。実の子かどうかは別としてね」

ぼくは頭が混乱して、なにがなんだかわからなくなった。ともかく、今一番重要なことに思考をしぼる。

「でも……仮にそうだとしても……それが葵さんとの婚儀になんの関係があるんです？」

「そこだ。菖蒲尼様の子だとしたら、君は理事長の姪になる。理事長はいまだに独身。性転換手術で子宮を取っているから、もちろん子供は産めない。ペニスは形成してあるが、本物の男みたいに子種があるわけじゃない」

いつもの智世様は、たおやかな女子高生にしか見えない。だが、今、ぼくの前にいる彼女は、男のかもしだす雰囲気にそっくりだ。脳内のスイッチを左脳モードに切りかえているのか。

「父親はすでになく、母の翔鶴院様はもうお年で、そんなに長くはないだろう。もし理事長がお亡くなりになられたら、その遺産はまず姉の菖蒲尼様に行き、次に君が相続することになる。君は将来、理事長を継ぐ唯一の後取りなのだよ」

「でも、戸籍が……」

「しつこいな。戸籍など、どうにでもなると言ったじゃないか。たとえそれが変えられなくとも、養子という手がある。理事長としては、血の繋がった実の姪。つまり君に、自分の後を継いでほしいだろう」

彼女は「こほん！」と咳払いして、さらに続ける。

「理事長の資産は膨大なものだぞ。この学園はもとより、幼稚園から大学院。関連会社、病院、研究所。舞鶴グループ全体がそうだ」

これを聞いて頭の芯が呆然となった。でも今は、遺産より葵さんと一緒になる方がずうっと重要だ。

「でも、このことと、葵さんとの聖婚がなぜ……」

「そう問題はそこにある。葵はこの事実を知っていた。だが君には告げてない。それは君が動揺するのを防ぐためで、決して悪意からではない。でも世間、この場合は学内の生徒たちだが、そうは見ないだろう。御曹司をものにするため、わざと教えなかったと思うに違いない」

「そ、そんなバカな。オレは葵さんが好きなんだ。好きだからプロポーズした。でも葵さんはなかなか受けてくれなかった。きっと、そのことが引っかかって迷っていたんだ」

ぼくは「そうでしょう、葵さん」と心配そうな顔をしている恋人に念を押してから、今度は列席のみんなに向き直った。

「でも、自分が理事長の後取りだなんて、そんなの夢物語にしか思えません。オレは葵さんと一緒になりたいんです。お願いします。葵さんと聖婚させてください！」

そうやって「お願いします」と何度も頭を下げた。

「じゃあ、葵の気持ちはどうなの？　やっぱりシン君と聖婚したい？」

司祭役の暁美様が『考える人』をやめて、初めて口を開いた。濡れた金髪はもうしずくが止まっており、かなり乾いて来たようだ。

「シンが理事長の姪だからって、どうして一緒になっちゃいけないの

か、わからない。あの方は、まだ若いのよ。すぐ後取りうんぬんの問題が起こるはずないじゃない。わたしはシンと聖婚する。暁美がダメだと言っても、二人だけで神殿に行くよ。誰が反対しても！」

葵さんは毅然として言い切る。その凛とした顔が、とても美しく輝いて見えた。

「それでは、みんなが納得しない。うわさは、すぐ学園中に広まるぞ」

蘭先輩が竹刀を片手に、葵さんを睨みつける。

「じゃあ、どうすればいいの？　教えてよ、蘭！」

葵さんも負けずに言い返す。

「どうもしない。聖婚は取りやめだ。お前とシンがつき合うのは、かまわないのに、なんで、そんなに聖婚にこだわるんだ？」

「つき合うだけじゃダメなの。シンとの確かな証し、それが欲しい。ほかのカップルのように、二人だけの世界をつくりたいのよ」

「それが、いかんと言うんだ！」

二人は青筋を立てて睨み合う。

「蘭、あなた、なぜそんなにムキになるの？　そんなに、わたしに振られたのが悔しいわけ？」

その一言で、座の雰囲気が変わった。先輩の顔から血の気が引く。葵さんは言い過ぎたと思ったのか、眼をあらぬ方へ泳がせている。

「葵、キサマあ！」

蘭先輩が蒼白な顔で立ち上がる。握り締めた竹刀の先がぶるぶる震えている。

「おやめなさい！」

女神様が立ち上がった。長い金髪を掻き上げて、先輩の前に立つ。

「どけ！　暁美。おれはコイツと決着をつけにゃならねえ」

「落ちつきなさい、蘭」

ギリシャ巫子が先輩の両肩に手を置いて、やさしく微笑む。

彼女の青く澄んだ目で見つめられたら、どんな荒くれでもおとなしくなろうというものだ。鬼のように憤怒の形相に変わっていた蘭先輩も、不承不承、元の位置に腰かけた。

話し合いは堂々巡りになって、決着がつきそうにない。

「貴子はどう思っているの？　ずうっと黙っているけど」

暁美様は、人の話を聞いているだけで、自分から会話に加わろうとしない、クレオパトラこと寮長の秋月貴子に声をかけた。

「私は、別に葵が嫌いなわけじゃないよ。でも、これは、普通の聖婚とは違う気がする。みんなが納得する必要があると思うわ」

眉のところで切り揃えた前髪を揺らしながら、思案気に答える。

「ほお～っ、どうしたら、みんなが納得したとわかるのだ。一人一人

聞いてまわるか。それともアンケートでも取るか。『立花シンは理事長の後取りだが、葵と聖婚してもいいですか？』って」

智世様が皮肉たっぷりに言うと、彼女は怒ったように顔色を変えた。

「そんなことはできない。第一、この子が理事長の姪だと気づいているのは私たちだけで、ほかの生徒は知らないのよ。それに、当事者の理事長も菖蒲尼様も、そういう話しは一切されていない。私たちが先走って、変に事を荒立てるのは、よくないと思う。それくらい、生徒会長のあなたなら、わかりそうなものね」

こちらも皮肉を交えて返す。

狭いカラオケボックスで、女帝と女王が睨み合う。バチバチと火花が飛び、今にも地中海戦争が起こりそうだ。

「まあ落ちつきなさい。二人とも」

ここで女神様が仲に入り、ことなきを得た。やはり祭研部長の威光はすばらしい。

「では、どうすればいいのだ？　このままでは、話が前に進まないが」

智世様が不機嫌な顔で一同を見まわす。

皆、考えあぐねて座が静かになる。

（葵さんとカップルになるだけなのに、なんでこんな変てこな議論をしているのだ？）

次第にイライラがつのって来た。それはみんなも同じらしい。

「よし、こうなったら、決闘で決着をつけよう！」

蘭先輩がすっくと立ち上がり、竹刀の先を天井に突き上げる。

「決闘？　誰と誰が？　なんのために？」

驚いて、皆、先輩を見上げる。

「もちろん、おれと葵だ。葵が勝てば聖婚を認める。おれが勝てば、いさぎよくあきらめてもらう。はっきりしていいじゃないか。生徒たちにもわかりやすいだろう」

「そんなバカな！」

「そんなのダメ！」

ぼくと葵さんは同時に反対の声を上げた。

女神様も目を白黒……いや、白青して、驚きの表情を見せている。

「それ、いい方法かも知れないぞ！」

その時、智世様がポンと手を打った。

「智世！」

葵さんの怒鳴る声が聞こえる。

ぼくはついに頭の糸が切れた。よろけるように立ち上がり、出口に向かう。

「シン、どこに行くんだ！」

蘭先輩の声が聞こえたが、かまわずドアを開き、そこに立っていた美里様を突き飛ばして走る。彼女の驚く顔が目の端にチラッと映った。

上履きのまま寮を飛び出し、暗闇の中をひたすら走る。

気がついてみると、いつの間にか菖蒲尼様の住まう、翔鶴院の門前に来ていた。呼び鈴があるのも忘れて、激しく木の扉を叩く。

しばらく叩き続けていると「誰かえ？」としわがれた声がして門が開いた。そこには着物姿の翔鶴院様がキョトンとした顔で立っていた。

「おや、正子。こんな遅くまで、どこ行ってたえ？」

認知症を患っているお婆ちゃんは、ぼくを見るなりそう言った。目の前が暗くなり、そのまま意識が薄れて行くのを感じた。

3

なにかが細かく触れ合う音がする。うっすらと目を開けると、白衣を着た女が二人、箱の中に小さな器具をしまっているところだ。

その小柄な方がこちらを見て驚いた顔をした。

「あっ、センセ、松原（まつばら）センセ。シン君、気づきましたよ」

（松原センセ……ああっ、医務室の校医）

その松原先生がやって来て、ぼくの頭や顔をあちこち触った。そして、ぼくから見えない所にいる誰かに向かって言う。

「もう大丈夫です。気が動転して貧血を起こしたようです。注射を打ちましたので、朝までには回復するでしょう」

「ご足労おかけしまして、申し訳ございません。わたくしがもう少し早く話しておけばよかったのですが……」

頭の上から声が聞こえる。

（ああ、あの人だ）

眼球を上にまわすと、白い頭巾をかむった菖蒲尼様の顔が見えた。

それは、いつものたおやかな顔ではなく、いくぶん憔悴しているように感じられる。

「そうですねえ……でも、これは微妙な問題ですから……」

松原先生も、いつになく深刻そうな顔をしている。どうやらこの人も、ぼくの出生を知っているようだ。

起き上がろうとしたが、身体が萎えてうまくいかない。

「あっ、まだ寝てなくちゃ。大人しくしているのよ。いい子だからね」

先生は幼児に言い聞かせるように、ぼくの身体を押さえつけた。そして首をまわして、もう一人の白衣の女に顔を向ける。

「メグ、シン君、気がついたって、葵ちゃんに……いや、智世さんの方がいいかな。電話してちょうだい」

（メグ……ああっ、あのナース。松原女史の愛人）
そのメグさんがスマホで、誰か（おそらく智世様）と話す声を聞きながら、うとうとと眠りに落ちる。その時、誰かの手がやさしくぼくの額に置かれるのを感じた。

再び目が覚めて周囲に目を向けると、この部屋には見覚えがあった。先月のお茶会で、葵さんと最初に入った所だ。
（確か待合（まちあい）とか言ってたな。あの時は茶道部の連中と一緒だったが）
少し眠ったせいか頭はすっきりしていた。半身を布団の上に起こすと、後ろから菖蒲尼様が支えてくれた。
「大丈夫ですか？」
あのゆったりとした声が、すぐ後ろに聞こえる。
ぼくは首を後ろにまわして、穴のあくほど彼女の顔を見つめた。
（この人が、実の母……そんな……）
思案していると、白衣の二人が大きなカバンを持って立ち上がった。
「それでは、よくなったみたいですから、私たちはこれで失礼いたします。もし、なにかありましたら、ご連絡ください」
「夜分に申し訳ありませんでした」
菖蒲尼様は二人を送ろうとして立ち上がりかけたが、先生に「そのまま、そのまま」と押しとどめられた。
「今夜はついていてください。なにもないとは思いますが」
そう言い残して、先生はメグさんと一緒に部屋を出て行った。

背中に菖蒲尼様の柔らかい胸があたって気持ちがいい。しばらくそうしていたが、思い切って尋ねた。
「菖蒲尼様は、ほんとうに、自分の母親なんですか？」
すると意外な答えが返って来た。
「いいえ、わたくしは、あなたの母ではありません」
「えっ？　でも、さっき！」
驚いて振り返る。目の前に彼女の柔和な顔があった。
「あなたのお母様は、ちゃんといらっしゃるではありませんか。確かにわたくしは、あなたを産みはいたしましたが、親ではありません」
「それは、どういうことです？　産んだのなら、産みの親でしょう」
「そういう意味では母親でしょう。でも、わたくしは、あなたを一度なりともこの手で抱いたことはありません。あなたは生まれてすぐ、立花豊（たちばなゆたか）さんと今のあなたのお母様に引き取られました。わたくしは豊さんから時々送られて来る写真で、あなたの様子を知るだけでした」
「でも、自分は親父の実の子ですよね。その頃、親父はお袋と結婚し

ていたから不倫ってこと？　これ、オレのお袋は知っているんですか」
問い詰めるように言うと、彼女はうつむいて肩を震わせた。
「あなたのお母様には、誠に申し訳ないことをしたと思っております。あなたが産まれた病院の院長に頼んで、わたくしの子供というのは隠しております。あくまでも行きずりの女が産み落とした子だと……」
次第に彼女の声が蚊の鳴くように細くなって行く。
「ですから、ご存知ないと思います……」
「そうですか……でも、お袋は薄々気づいていると思いますよ。だって、自分がこの学校に入るのに、強く反対していたから。それに、入学式にも来なかったし」
「そうですね……こういうことは、いずれわかるでしょう。でも、あなたの母は今のお母様です。それは、これからも変わらないでしょう」
彼女は、なんだか人生をあきらめたような顔をしていた。
「そんなの詭弁だ！　じゃあ、オレの気持ちはどうなるんです」
パッと起き上がり、強い口調で詰問する。
「それに、あの観音様はなんなのです。見ましたよ。裏に『芯人』と彫ってあるのを。それは昔あそこで流産したという胎児の名前でしょう。その母親はあなただ。すると父親は？　まさか……」
彼女は蒼白な顔になる。その表情は、ぼくの言葉を肯定するものだ。
「やはり、そうなんだ。それは学生の頃ですね。それからも、ずうっと続いていたんだ。親父が結婚した後も……。見そこないましたよ。あなたは聖人だと思っていたのに！」
かなり辛らつな言葉を投げつけて、彼女の肩を揺する。すると彼女は、いきなりぼくの手を払いのけて、両手で顔をおおった。指の間から幾筋かの涙がこぼれている。
しばらくそうしていたが、彼女は僧衣の胸元から白いハンカチを出して目頭を押さえると、ポツリポツリと昔のいきさつを語り始めた。
「わたくしが高校生になったばかりの頃です。庭師の一家が、僧院の隣に建っているあの屋敷に越して来ました。それまでその家には、わたくしたちの家族が住んでいました。わたくしと妹の正美は、そこで生まれ育ったのです」
彼女は遠い記憶を呼び覚ますように、目を半分閉じる。
「わたくしが中学生の時、祖母が亡くなりまして、母が翔鶴院を継ぎました。そこでわたくしたち姉妹も、寺院の庫裡（くり）に移りました。もちろん男子禁制ですが、舞鶴女学園の理事長をしていた父は、世田谷の本校に詰めていて、ほとんど家に帰って来ないので、別に問題はありませんでした。そこで、空いた家を専属の庭師に貸したのです」
話しながら、時々ぼくの顔を覗うようにする。

「その家族は親子三人で、その一人息子があなたのお父様、立花豊さんだったのです。当時あの方は、八王子の美大に通っておられました。とてもおもしろい人で、わたくしたち姉妹は『勉強を教えてもらう』と偽っては、彼が使っている離れに、遊びに行っておりました。特に男の脳を持つ正美は、たぶん初めて持った友達だったのでしょう。とても喜んでいました。豊さんの方も、正美を『弟みたいだ』と言って、かわいがっておられました。あの方と男装をした正美が並んで歩く姿は、どこから見ても、若い男の二人連れのようでした」

話をして行くうちに、その顔が次第に楽しそうに変わる。きっと、若い頃の日々を思い出しているのに違いない。

「一方、わたくしも、あの方をお慕いしておりました。わたくし、小学校は地元の公立に通いましたが、中学、高校は父の経営する、ここの女学園で過ごしました。当時全寮制ではなかったので、寮には入りませんでしたが、なにせ山の中。つき合うような男子もなく、恋などしたこともございません。そんな時、目の前に現れた豊さんがとても素敵な方に思えました。おつき合いをしているうちに、次第に思いがつのり、寝ても覚めても、あの方のことばかり考えるようになりました。それは彼も同じだったようで、わたくしたちは人目を忍び、二人だけで会うようになりました」

この話を聞いて、ぼくは驚きを禁じえなかった。

(あのブサイクな顔の親父が、こんな美人にモテたなんて……)

「それは、わたくしが高校三年の時、月のモノが来ないのに気づきました。翌月も、その翌月もありません。ある日、夜中に起き出して、雨の中を豊さんの離れ家に行き、意を決して打ち明けました。ところが彼は『お金なら、なんとかするから』と言うのです。わたくしは目の前が暗くなり、離れを飛び出しました。傘も持たず、素足のまま走って、森の中に逃げ込みました。後ろから、恐い顔をした豊さんが追いかけて来ます。わたくしはずぶ濡れになりながら、必死に走りました。何度木の根に足を取られて、転んだかわかりません。そのうち激しい腹痛がして、泥の上に倒れました。その時、股の間になにか温かいものが流れました。おぼろげに、あの人の呼ぶ声が聞こえたような気がしました」

彼女は突然「ああっ!」と頭を抱えた。だが、ぼくが食い入るように見つめていると、またボソボソと話し始めた。

「気がつくと、暗い穴の中にいました。そう、昔クマの一家が住んでいたというあの木の洞(うろ)です。雨はすでに上がり、月の光が木立の間からもれていました。その青い月明かりに照らされた地面の上に、血だまりのようなものが見えました。豊さんはひざまずいて、それをじっ

と見つめておりました。それはもうピクリとも動きません。『死んでるよ。男の子みたいだけど』そう言うと、彼はそれを両手にすくい、土の盛り上がっている場所に埋めました。そして、その上に小石を一つ乗せると、両手を合わせて拝むようにしました。わたくしはカッとなって、彼に駆けよると『出て行って！』と叫びながら、こぶしで何度もその背中を打ちました。年が明けると、あの人は就職先の会社がある練馬の方に引っ越して行きました。その後、十年以上も彼に会うことはありませんでした」

そこまで語り終えると、彼女は放心したように天井を仰いだ。

「鬼だ！　あの野郎、ただじゃおかねぇ！」

ぼくは頭に血がのぼって、激しく親父を罵った。

「それで、あのクソ野郎とは絶交したんでしょう。じゃオレの場合は？」

「まあ、あなた。お父様をそんなに悪く言うものじゃありません。『クソ野郎』だなんて」

悲嘆に暮れているとばかり思っていた彼女が、眉間にしわをつくってぼくをたしなめる。

「あんなやつ『クソ』で充分です。あなたは甘い。だから何度もつけ込まれるんです。おおかた、ずうっと後になってから、どこかでアイツに会ったんでしょう。ヤツは妻がいる身でありながら、あなたに言い寄った。『あなたのことがどうしても忘れられない。あの時、無理にでも、正子さんと一緒になっておけばよかった。僕はなんてバカだったのだろう』とか言って」

すると、彼女は驚いたように顔を上げた。

「あなた、そのお話、お父様からお聞きになったの？」

「まさか。メロドラマにあるじゃないですか。昔別れた女を口説く時の決まり文句。陳腐なようでも、意外と引っかかるんだなあ、これに」

それを聞いた彼女は、また両手で顔をおおった。小振りな肩が小刻みに震えている。

（しまった！　言い過ぎたか）

あわてて謝ろうとした。ところが……。

「くっくっくっ、ふっふっふっ」

奇妙な声が、指の間からもれ聞こえるではないか。

そばに寄って下から覗いてみると、彼女は顔を真っ赤にして笑いをかみ殺している様子。

（今、泣いていたのに……）

彼女は、しばらくそうやって泣き笑いの状態だったが、思い出したように背筋を伸ばして、続きを語り始めた。

「あなたって、ほんとうにおもしろい人ね。そうよ、その通りよ。わ

たくしは舞鶴女子大の仏教学部を卒業すると、すぐ盛岡の尼僧院に入りました。そこで十年修業して、三十過ぎにこちらに戻ってまいりました。そしてあの観音像を建て、あの子を供養いたしました。『男の子みたいだ』と言った豊さんの言葉から『芯人(しんと)』と名づけ、毎日あの子に語りかけました」

彼女はそこで両手を合わせ、ぼくに向かって頭を下げた。

「そのように御仏にお仕えする毎日を過ごしていたある日、裏の屋敷に庭師として住み込まれていた、豊さんのお父様がお亡くなりになられました。その葬儀で、十何年かぶりにあの人を見かけました。すでに結婚しておられ、二人の子供がいました。お通夜の席で、豊さんと奥様が並んでお座りになり、そのそばに幼い男の子が二人、ちょこんと正座していました。父親を亡くされた悲しみの席ではありますが、その様子はとてもしあわせそうで、わたくしは早々に席を外しました」

その場面を思い出したのか、彼女は片手で口元を押さえ「ううっ」と嗚咽をもらした。

「その夜はどうしても寝つけず、一人起き出して外に出ました。夜空には半分に欠けた月が妖しく輝き、周囲の森は青い光に照らされておりました。古い山門を抜け、森の中をふらふら歩いておりますと、いつの間にかあの子の眠っている所に来ていました」

ぼくは、先月の末、あの水子観音を拝み、深く頭を下げていた彼女の姿を思い出した。身を乗り出して次の言葉に耳を傾ける。

「ところが、そこには一人の男が、観音様の前に手を合わせておりました。彼は突然現れたわたくしを見て、一瞬唖然としたようでしたが、すぐ我に返ったように立ち上がると、ゆっくりと歩いて来ました。月の光に照らされた彼の顔は精悍で、十数年前の弱々しい面影はどこにもありません。今やデザイナーとして最も充実している男の姿が、そこにありました。わたくしは（逃げなくては）と思いましたが、『正子さん！』と言う彼の呼びかけに身体が震えて動けません。ただ呆けたように彼の顔を見つめるだけでした」

彼女はそこで「ふーっ」と息をついて言葉を切った。そして額に手を当て、しばらく黙り込んでいた。

「それからは、あなたのおっしゃる通りです。わたくしは僧の身でありながら、人目を忍んで逢瀬を重ねました。あの離れで、あの木の洞で。そしてまた懐妊しました。でも、そのことは誰にも言いませんでした。もちろんあの人にもです。ですが、つわりは激しくなる。お腹はふくらんで来る。とうとう母、今の翔鶴院様に見とがめられました。そこで、以前のことも含めて、洗いざらい打ち明けました。わたくしは『今度の子は必ず産みます。そのために、僧職を失ってもかまわな

い』と言いました。母は大層深刻な顔をしていましたが、わたくしを責めはいたしませんでした」

その時の翔鶴院様はどんな気持ちだったのだろう。道を外れた娘の行いに、かなり落胆したのは間違いない。

「怒ったのは妹の正美で、駆けつけて来た豊さんをみんなの前で殴り倒しました。『この薄汚いオスめ、お前なんか友達じゃない。出て行け。二度とおれの前に姿を見せるな！』と、なおも飛びかかろうとするのを、母が必死に止めていました。あの子の男性を憎む気持ちは、この時から一層激しくなったように思います。単なる憎しみではなく、絶望したのだと思います。それからは『男は、もはや人類の未来になんの役にも立たないどころか、有害ですらある』と、生徒たちに説くようになりました。正美はその時には父の後を継ぎ、理事長の地位にありました。この学園から、教師も含めて男性を排除したのも、周囲を城壁のような高い塀で囲ったのも、この時から始まっているのです」

この女学園は教師から用務員、警備員に至るまで、全員女性。それは、こういう経緯があったからなのか、と改めて認識した。この学園の教育方針『女だけの社会をつくる』は、単に『女が社会の主役になる』のではなく『男そのものをこの世から消滅させ、女だけの世界を創造する』というのだ。

「それでも産まれて来る子は気になったとみえ『自分が引き取る』と言い出しました。わたくしは僧院を出て、街で自活しながら育てるつもりでおりましたが、これには母が頑として首を縦に振りませんでした。『この寺をわたくしに継いでほしい』というのが、母の強い希望でしたから。結局、正美が育てるということになりました」

「えっ？　でも男の子だったら？　理事長は男嫌いなのじゃ？」

すぐバカな質問をしたと思った。彼（？）は医学博士。産まれて来る子が男か女か、調べればすぐわかることだ。

彼女もぼくの考えを読み取ったのか、その質問には答えなかった。

「ところが、それを聞いた豊さんが侮蔑されるのもかまわず『私の子だから、自分が育てる』と言い張ったのです。でも、これが彼の奥さんに知れると離婚沙汰になるかも知れません。それを指摘すると『大丈夫、自分の妻は二人目を出産した後、子宮を手術して子供が産めない身体になりました。この頃は『三人目が欲しい。特に女の子が』と言っております。私の知り合いに産婦人科の院長がいますから、そこに入院してください。そうすれば、彼に頼んで女房の産んだ子だと証明してもらいます。あいつには、浅はかな男女が産み落とした子だと伝えておきます。だから、どうか私に任せてください』と懇願しました。正美は『今度は自分の妻をだまそうと言うのか。見下げ果てたヤ

ツだ』とまた一波乱起こしました。しかし冷静になると『その方が、いいかも』と言うようになりました。ただし『将来、この子が真相を知って、自分から産みの親の元に帰りたいと言ったら、必ず返すこと』と強く釘を刺しました。それからは、先ほどお話しした通りです」

語り終えた菖蒲尼様は、もう取り乱してはいなかった。すっかり肩の荷を降ろしたような澄んだ目でぼくを見つめている。

ぼくには、この人が実の母だとわかっても、どうしても実感が湧かなかった。母とは物心つく前からそばにいて、いろいろと世話してくれた、あのお袋以外に考えられない。でも、これがほんとうなら、すべてつじつまが合う。これまで、ずうっと心の隅に巣くっていた疑惑が、いつの間にか氷解しているのを感じた。

ぼんやり考えごとをしていると、菖蒲尼様に肩を抱き寄せられた。ぼくは、されるままに彼女の膝の上に倒れ込んだ。

（うーん、いい気持ち……）

それから、しばらく彼女の膝に頭を乗せて寝転がっていた。

目を上に向けると、モナリザのような微笑みが返って来る。いつまでも、ずうっとこのままでいたいと思った。

その時、玄関の格子戸が開く音がして、若い女の声が聞こえた。

「菖蒲尼様、お客さまです。一ッ葉様と尾鈴様がお見えです」

（美里様とお雪だ。そうだ、決闘は？）

ガバッと跳ね起きた。

4

菖蒲尼様が出迎えて、二人を部屋に招き入れた。

「ごゆっくりしてくださいね。わたくしは庭の掃除など、やっておりますから」

彼女は二人にそう言うと、下駄の音をカラコロ鳴らしながら、玄関を出て行った。

「シン、大丈夫！」

すぐ、お雪が飛びついて来た。

「もっと早く来たかったけど、智世様に止められていたのよ。『しばらくそうっとしておけ』って。でもさっき松原先生が帰っていらして『よくなったみたいだから、行ってもいいよ』って。それで飛んで来たの。最初はみんなも一緒に来ようとしたけど、美里様が止めたのよ。『ここは、私たちだけにしてくれない』って。美里様って、普段やさしいけど、ここという時はスパッと言うのよね。あたし感心しちゃった。ど

お、貧血治った？　頭痛くない？」
　彼女は心配そうにぼくの身体を撫でたりさすったりする。
「それで、決闘はどうなりました？」
　お雪にはかまわず、美里様に尋ねた。彼女は今夜寝てないのか、まだ制服のままだ。顔に艶がなく、見た目にも疲労感が漂っている。
「やることになったわ。ただし『決闘』なんて物騒な名目じゃなく、あくまで親善試合としてね。ほら、異種武道試合よ。毎月やってるでしょう。次は剣道部と柔道部。これを少し早めるの。選手は葵と蘭」
「少し早めるって、いつ？」
「今朝の五時。講堂の裏庭で」
「えっ、五時！　講堂の裏？　それって、親善試合なんですか」
「だから形だけよ。実態は決闘。これに葵が勝てば、あなたは葵のもの。負ければ、蘭のものになるわ」
「そんな！　中世じゃあるまいし」
「あなたを懸けて、女二人が戦うのよ。どう、すごいでしょう」
　彼女はおもしろそうに声を上げて笑った。
「笑い事じゃない。個人の意志はどうなるんです？　オレの人権は？」
「あなたに人権なんかないわ。だって、あなたは舞鶴グループの御曹司。昔なら王子様だもんね」
「そんな！」
『開いた口がふさがらない』とはこういうことを言うのか。呆然として、美里様の愛くるしいタヌキ顔を見つめた。
　二人の話によれば、ぼくが出奔してからの経緯は次のようだった。
　翔鶴院から、ぼくを無事保護したとの連絡が入った後、改めて話し合いが持たれた。場所も文化棟の生徒会室に移り、柔道部の部長や副会長の美里様も参加した。お雪もぼくのマネージャーだと言い張って、強引に割り込んだ。
　しかし決闘で可否を決める話しは、葵さんの反対で平行線をたどった。らちが明かないので、聖婚の司祭をつかさどる祭礼研究部の暁美部長（通称、女神様）に裁定を求めた。
　彼女はバサバサの金髪を片手でほじくりながら、こう言い渡した。
「確かに難しい問題ねぇ……私にもよくわからないわ。そんな時、古代アマゾンでは、決闘で白黒をつけるのではなかったかしら。この場合もそうねぇ。やりましょう、決闘。それで勝った方がシン君と聖婚をする権利を得る。これで、みんなも納得するでしょう」
　彼女はその海のような青い目で、葵さんと蘭先輩を交互に見比べ、互いの武具を決めた。

「武器は、蘭が竹刀、防具はなし。葵は素手で、空手の防具をつける。これでどうかしら」
それを聞いた葵さんが真っ赤になって怒った。
「決闘は受けるわ。ただし、他武道の防具をつけるなんて、そんな恥ずかしいことができますか。わたしは、自分のやり方で戦います。ええっ、もちろん素手よ。蘭の振りまわす竹の棒なんか素手で充分！」
葵さんが啖呵を切って方針は決まった。今は両陣営にわかれて、戦いの準備をしている。

「じゃ葵さんが負けたら、オレ、蘭先輩と聖婚するの？　そんな……」
式の時に自分が抱擁してキスする相手を、葵さんから蘭先輩に置きかえて想像してみた。
「ぷっ！」
思わず吹き出す。
（そりゃあ、先輩も美人には違いないが……）
「シン、なに考えてるのよ！」
すかさず、お雪の鋭い声が飛んで来た。三ヶ月も一緒に生活していると、ぼくの考えなど筒抜けにわかるらしい。
「あきれたものね。こんな時に、そんなことを考えてるなんて」
彼女は（いやらし〜ぃ）という顔をした。
「な、なに？　なにを考えているって？」
横合いから美里様が好奇な目を向ける。
「別にぃ。美里様には関係のないことですぅ」
お雪はツンとすまして答えた。
「ねっ、いいじゃない。ちょっと教えてくれたって」
彼女は興味津々、お雪の顔を下から覗く。
「美里様！」
お雪がキッ！　と睨む。
「な、なによ。急に怖い顔して」
「今、そんなこと言ってる場合じゃないでしょうが！」
手の平で畳をバンバン叩く。
「ああっ、そ、そうだったわね」
彼女はようやく本来の目的を思い出したらしく、一つ咳払いをして背筋を伸ばした。
「ところで、シン君。身体はもう大丈夫なの？」
そう言って、ぼくを頭から足先までジロジロ眺めまわす。
「ええっ、貧血だそうです。ちょっと眠ったらすっきりしました。
「そう……」

彼女の目が光る。
『『そう……』って、なにか？」
「実は……連れに来たのよ。あなたを」
「自分を？」
「わかるでしょう。もう四時になるわ。後、一時間で始まるのよ。決闘が」
「あっ、そうだった！」
『『そうだった』って、忘れていたの？　葵のこと」
「忘れてたわけじゃないんですが、なんか、こう、現実感がないんですよね。女子校で決闘だなんて」
「この学園を普通の女学校と思うからいけないのよ。ここは女しかいないひとつの世界。昔『男』なる種族がいたらしいけど、滅びちゃったのよ。互いに殺し合って。だから、ここでは女だけが人類。人類には暴力でないと解決できない問題もあるのよ」
（なんだか、無理にこじつけているみたいだけど……）
「というワケで、これから葵と蘭があなたを懸けて戦うの。さあ行きましょう」
　美里様はぼくの腕を取って無理やり立たせた。小柄な乙女とは思えない強い力だ。合気道二段というのもダテじゃない、か。
「ちょ、ちょっと。行くって、どこへ？　なにをしに？」
「もう、じれったいわねえ。決闘の場所に決まっているでしょう。もちろん葵を応援するのよ。あなた、葵が負けてもいいの？　蘭のものになってもいい？」
「そ、それは、よくないっス」
「だったら、行くのよ。葵は防具なしで戦うつもりよ」
「無茶だ。それは！」
　蘭先輩の繰り出す、示現流（じげんりゅう）の鋭い切り込みをはずすのは至難の技だ。
「だから君から言ってよ。あなたの言うことなら、葵は聞くと思うわ」
「葵さんが、オレの言うこと、聞くかなあ……？」
「シン、どうしたのよ。葵様が死んじゃってもいいの？」
　さらにお雪が加わる。
「死ぬなんて……大げさな」
「わからないわよ。当たり所が悪かったら」
「そうよ。お雪ちゃんの言う通りよ」
　ぼくは二人に急かされるようにして部屋を出た。
　玄関にみんなの靴が奇麗に並べてある。ぼくの穿いて来た上履きもそこにあった。それを突っかけて表に出る。
　明け方の空は、東の方から、うっすらと白くなり始めていた。山門

の所では、菖蒲尼様が一人、竹箒で庭を掃いている。
「もう、よいのですか？」
ぼくたちを見ると、ゆったりした声をかけて来た。
「大変ご迷惑をおかけいたしました。シン君も治ったみたいだし、寮に連れて帰ります」
美里様が立ち止って丁寧に頭を下げる。
「そう、それでは行っておあげなさい。葵さんも大変のご様子ですし」
彼女は美里様の肩越しに、ぼくを見つめていた。
「君、歩ける？　大丈夫？」
門を出た所で、美里様に右腕をがっちりつかまれた。
「お雪ちゃんも、そちらを支えてあげて。ふらつくといけないから」
「いいです、いいです。大丈夫。一人で歩けますから」
なんどもそう言ったが「いいから、いいから」と手を離そうとしない。なんだか『連行』されているような気がする。そのまま引っ張られて、講堂の方に連れて行かれた。

5

早朝の校庭を女生徒たちが駆けて行く。講堂裏にはすでに数百人が集まり、これから始まる出来事に目を輝かせていた。
その裏庭は、東にツツジの植え込み、西に赤松を備えた築山があって、出入り口が狭くなっている。その東口を柔道部、西口を剣道部が固め、野次馬を場内に入れないようにしていた。
勢い、あふれた観衆は講堂の中に入り込み、そこから外の様子を覗っている。窓は開け放たれ、バルコニーは「きゃあきゃあ」騒ぎまくる乙女たちでいっぱいだ。
中学校との境を仕切っている生垣の外には、うわさを聞きつけた女子中学生たちが集まっていた。どこからか持ち出した椅子や木箱に乗って、やや幼い顔をちょこんと覗かせている。中には、校庭にそびえている大きな桜の木に登っているやつもいた。
剣道部の陣取る築山の中腹に、大きな岩が青い芝生から顔を出している。その岩に、緊迫した顔の蘭先輩が腕組みして腰をおろしていた。
いつもの剣道着に一本歯の高下駄を履き、額に赤い鉢巻。両肩から背中に白たすきを斜め十字に掛けている。愛用の竹刀を胸に抱き、食い入るように東の空を見つめるその姿は、歌になりそうな少年剣士だ。
先輩の後ろには、寮長の秋月貴子がぶ然とした面持ちで立っている。彼女は冬用の黒いセーラー服に身を包み、長いスカートの裾を風にはためかせていた。

ぼくは、まるでこれから首をはねられるのを待つ罪人のごとく、地蔵脇のベンチに引き据えられていた。右腕は美里様、左はお雪と交代した総長の朋江さんにしっかりと押さえられ、立ち上がることもできない。夏になったとはいえ、風の吹き抜ける早朝の校庭、半袖シャツにハーフパンツではさすがに肌寒い。

葵さんに会わせてくれと懇願したが、朋江さんは「駆け落ちされるといけないからダメ！」とにべもない。美里様は「葵はどこにいるのかわからないのよ。今、美貴たちが探しているけど……」と困ったような表情を見せた。

裏庭の中央に高く枝を広げている銀杏。その太い幹に、大きく墨書した一枚の紙が貼ってある。そこには［異種武道親善試合　出場選手　七島蘭（剣道二段）　対　伊東葵（柔道二段）］と書かれてあった。とても『親善試合』という雰囲気ではないが……。

審判は三人。副審は柔道部と剣道部から一人ずつ。ともに師範代クラスが務めている。

主審は、驚いたことに司祭役の暁美様だ。黄金の髪を後ろに束ね、相撲の行司が着るきらびやかな衣装に身を包み、片手に軍配団扇（ぐんばいうちわ）を握っている。（女神様に相撲の心得があるのか？）と思いきや、祭研のほかにスポーツ系は相撲部で、学内大関というから恐れ入る。この学園の教育方針『文武両道』に則って、いくら文化系と体育系の両方をとらなければいけないとはいえ、ギリシャ巫子と相撲取りじゃ、あまりにも違い過ぎる。

彼女の後方には、黒い学ラン姿の乙女たちがずらりと並び、さかんに手を振り、太鼓を叩いている。応援部の生徒たちだ。

さらにその後ろ、講堂の壁際には智世様始め、生徒会のメンバーが顔をそろえている。好奇心いっぱいの長い首を乗っけた会計長、美巳（みみ）様の姿もここからよく見える。

ただここに、先生を含め大人たちの姿が一人も見えないのは不思議な感じがする。これだけの大騒ぎに、気づかないはずはないのだが。

時刻はついに五時になった。だが、葵さんは現れない。広場には、応援部の威勢のいい掛け声と、太鼓の音が鳴り響いている。

築山にかまえる蘭先輩。彼女は指が白くなるほど強く竹刀の柄を握りしめ、いかにも緊張した面持ちをつくっている。その口がボソッと動く。「遅い！」と言ったように見えた。

「約束の時間に遅れるなんて、武道やってる人とは思えない……」

朋江さんのつぶやく声が聞こえた。

「まだ支度してるのよ。急だったから」

美里様が言い返す。
「決まったのは昨夜ですよ。準備する暇は充分あったでしょう」
「あれから、まだ五時間ちょっとしか経ってないじゃない。それに卑怯だわ。この子をエサに葵を釣り出そうなんて、人とも思えないのは、どっちよ！」
激高する美里様。
「葵には義理というものがないのです。去年の生徒会選挙を見てくださいよ。蘭の推薦でクラス委員になったのに、選挙では対抗馬に立ったのですからね。おかげで蘭のクラスが真っ二つに割れて、私たちは落ちた。そりゃあ、蘭も切れますよ」
「あなたたちが負けたのは、人気がなかったせいでしょう。葵のせいじゃないわ。それを根に持って、今度は聖婚を妨害する。この子はもともと葵のモノだからね。わかってるでしょう、朋江！」
「まあ、もうすぐ決着がつきますよ。みんなの前で叩きのめされる葵の姿が見られます。もし来なければ臆病者のレッテルが貼られる。どっちにしても、この子は蘭のモノですよ。みんなも納得するでしょう」
試合はまだ始まっていないのに、バチバチと火花を散らすギャラリーたち。
（モノとか、なんとか、試合の景品か。オレは……）
心の中で毒づく。
十五分が過ぎた。葵さんはまだ来ない。
東の方から朝日が射して来た。生垣の向こうに見える中学校の建物が、白く輝いている。そこの非常階段にも女生徒の一団が連なり、楽しそうにはしゃぎまくっている。
築山に陣取る新選組もどきにも、どこか落ちつかない様子が見て取れる。一方の当事者、蘭先輩も、手に持った竹刀を握ったり離したり。下駄を脱いだり履いたり。せわしげに身体を動かしている。
変わらないのは後ろに立っている貴子様。相変わらず腕を胸に組んだまま、厳しい表情を見せている。面長の白い顔に切れ長の瞳。肩のあたりで切り揃えた漆黒の髪。それらが制服の黒と呼応して、みごとな美しさをかもしだしている。
時計の針が分を刻んで行く。さすがに美里様もそわそわし始めた。
広場の隅に目を向けると、学ラン姿の十数名が両手を腰に当てがい、黄色い声で応援歌を歌い続けている。
副審の一人、剣道部の三年生が主審の所に行って、何事か話している。女神様は「まだまだ」というふうに、首を左右に振っていた。
三十分経過。まわりの観衆もざわついている。（もう来ないのでは）

という雰囲気があたりに漂い始めた。
それは待ち構えている蘭先輩も同じらしく、立ったり座ったりを繰り返している。
「落ち着きなさい！」
後ろの貴子様が見かねて、時々声をかける。
「どうやら、こちらの勝ちね」
朋江さんは（ほれ見たことか）と美里様をチラッと見やってから、ぼくの顔を覗き込んだ。
「怖くて逃げたのよ。葵はもうおしまい。昨夜、あんな啖呵を切ったのに。これで蘭の勝ち。あなたもよかったわねぇ、蘭と一緒になれて」
さすがに美里様も言い返せずにいる。ぼくの心にも、少しずつ疑いの心が芽生えて来た。
（きっと来る。葵さんが見捨てるはずがない……いや、我が身かわいさに、オレのことはどうでもよくなったのか……）
相反する考えが頭の中を駆け巡り、いても立ってもいられない気持ちになった。
とうとう四十分が過ぎ、（もう来ない）と誰もが思った。すでに帰り始めている観客もいる。
ドン！　ドン！　ドン！
応援部の太鼓は、一定のリズムで単調な音を打ち続けている。近くに立っている石のお地蔵様だけが、何事もないような顔をして、両腕に赤ん坊らしきものを抱いていた。
女神様の前で副審二人が言い争っている。いつも落ちつき払った彼女も、さすがに困った顔をしていた。
その時トレーニングウェアの小柄な少女が、人だかりを掻き分けながら、こちらに来るのが見えた。
（お雪だ！）
先ほどからどこかに姿を消していたルームメイトのお雪が、ツインテールの髪をピュンピョン跳ね上げながら、小走りにやって来た。
「今来ます」
彼女は美里様に短く告げると、ぼくにウインクして審判たちの方へ駆けて行く。同時にバルコニーの生徒たちがザワッと動いて、口々に叫んだ。
「来た。来たよ。来た！」
太鼓の音が急に早くなる。
やがて人垣が割れて、四、五人の生徒が現れた。みんな園芸用の作業服を着ている。先頭の背の高い人は、確か園芸部長だ。

（なんで園芸部が？　葵さんが園芸部を兼ねているのはわかるけど）
首をひねっていると、その中から一人の生徒が進み出た。後ろに垂らした二つの髪束が、腰のあたりで揺れている。
会場が波のようにどよめく。
（葵さんだ！）
彼女は黒帯を締めたいつもの柔道着姿ではない。カーキ色の作業服に作業ズボン。頭にはキャップの作業帽。足にはなんと地下足袋（じかたび）を履き、その上からゲートルを巻いている。まるで昔の写真で見る日本軍の兵士みたいだ。
その姿で、悠然と広場の中央に進み出て来た。ぼくの方をチラッと見たが、特断なんの表情も見せなかった。
一方、蘭先輩は葵さんの姿を視認するや、下駄を脱ぎ棄て、竹刀を鷲づかみに、砂塵を巻き上げながら築山を駆け下りて来た。そして竹刀の先を葵さんに突きつけ、叫ぶ。
「遅いぞ、葵！　約束の時間に遅れるとは何事だ。さては臆したか、オシッコちびってたかあ――」
（あれ？　この場面、テレビかなにかで見たような。たぶん厳流島の小次郎と武蔵。でも『オシッコ云々』はなかったと思うが……）
「それに、そのふざけた格好はなんだ。この神聖な試合に、おれをおちょくるかぁ――」
先輩は顔を真っ赤にして叫んだ。竹刀を握りしめた手が、怒りにぶるぶる震えている。
「なにが神聖な試合よ。こんなの、ただの喧嘩。親善試合が聞いてあきれるわ」
葵さんも負けずに言い返す。そして先輩に人差し指を突きつけ、大声を出して罵倒した。
「蘭、あんたの出る幕じゃないの。痛い目に遭いたくなかったら、引っ込んでな！」
それを聞いた蘭先輩、可愛い顔を鬼のように歪めた。
「なんだと、なんだと。痛い目に遭うのは、おまえの方だ。勝負だぁ葵。叩きのめしてやるぅ！」
そう叫ぶや竹刀を八双（はっそう）にかまえる。
審判の合図もなく試合は始まった。場内水を打ったように静か。皆、固唾をのんで二人の死闘を見守っている。
「気を静めなさい、蘭！」
築山から貴子様が声を飛ばしているが、本人にはまったく聞こえていないようだ。
少年剣士と日本兵はしばらく睨み合っていたが、日本兵の方が先に

動いた。地下足袋の先で、少しずつ少しずつ右に滑って行く。それに釣られて剣士も動く。

葵さんは銀杏の大木を背にした時、なにを思ったか急に両腕をだらりと下げた。剣士はその一瞬の隙を逃さない。竹刀を上段に振り上げ、猛然と襲いかかる。

「キャ――ッ！」

示現流独特の甲高い猿叫が響き、葵さんの肩口めがけて、鋭く竹刀が振り下ろされる。

次の瞬間、なにか硬いものを叩いたような激しい音がして、竹刀の先が弾けた。蘭先輩の身体が大きく回転して地面に叩きつけられる。

（なんだ？　どうなった？）

先輩の倒れているすぐ傍に、スクッと葵さんが立っている。頭上にかざした手には、先の弾けた竹刀が握られている。

（出た！　無刀取り背負い投げ）

「うお――　きゃあ、あああ――」

大歓声が場内を包む。

太鼓の音が激しく響く。

三人の審判が、あわてて「一本！」と手を上げる。

蘭先輩は地面に投げ出されたまま、呆けた顔をしている。自分でも、なにが起こったかわからないのだろう。

銀杏の幹に貼られた『親善試合』の紙は半分に千切れ飛んでいた。

葵さんは竹刀を投げ捨てると、スタスタとこちらにやって来て、ぼくを押さえている朋江さんの手を払いのけた。それからぼくの肩を抱いて立たせ、まわりの観衆に大音声で宣言する。

「この子はわたしのもの。わたしが連れて行く。依存あるかあ――」

それを聞いた蘭先輩、あわてて起き上がり「待て、葵！」と怒鳴りながら先の弾けた竹刀を拾った。

「やめなさい、蘭！」

築山から貴子様の声が飛んで来た。

「勝負はついたのよ。これ以上、みっともない真似はおやめなさい！」

その厳しい声に、蘭先輩はガクッと肩を落とした。そして弾けた竹刀を引きずりながら、うなだれて広場から姿を消す。

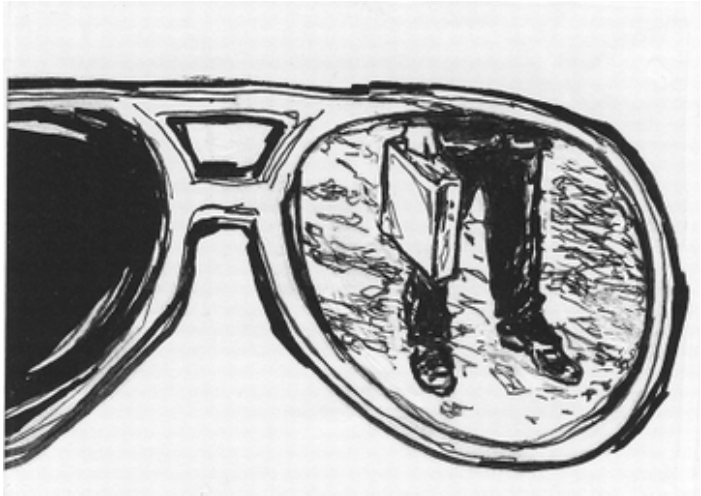
先輩がいなくなると、葵さんはぼくの手を引いて、文化棟の生徒会室に向かった。

舞鶴女学園初の『決闘』は、以後末長く、生徒たちに語り継がれることになるだろう。

（第四話了・続きは第五話〈完〉にて）

幻滅

畑中康郎



その晩、自分は嫌な気分でいた。嫌な男を接待した帰りだったのだ。接待して受注をとろうなんてことは今時はやらない。それなのにぼんくら上司は最後の決め手は接待にある、と信じ込んでいる。仕事は通信システムの提案と構築。接待相手は電子部品メーカーの社長だ。やり手だったが、接待されることが大好きの男だったから、上司がちょっと声をかけたら飛んでやってきた。これまで大した受注はなかった。十分な取引がないのに顧客面され、尊大な態度で接してくる。自分の嫌いなタイプだ。

そこにもってきて、その夜の接待には嫌いな、そのぼんくら上司までもが同席すると言い出した。見え透いたウソが上手な上司とそれを知っていながら嬉しがる変人社長。この取り合わせの中で小間使いをしなければならない自分。疲れることを想定していたが、やはりその晩は疲れた。

話は先日のゴルフに及んでいた。

「いやぁ、先日のゴルフ、社長の腕はますます上がっていますね」

ぼんくら上司が持ち上げる。

「いやぁ、それほどでもないがね。まぁ徐々に上がっていることは確かだがね」と、変人社長が応える。よく馬鹿なことを言えるものだ。自分に言わせれば、社長のゴルフは少しも上達していない。相変わら

ず方向は定まらないし、たまにＯＢも出す。グリーンの芝目もよく読めていない。どうしてこれで上達していると言えるのか。スコアにしても九十近い。

だが確かに、たまにはいいショットもあった。

それは七番ホールだった。グリーンが、小高い丘の陰に右ドッグレッグして、その先にあった。ふつうなら、よくて二打でグリーンを捉えるのだが、社長は山越えで直接狙った。腕力があるからだ。スコア挽回の一か八かのショットだったのだろう。これがまぐれ当たりして、たまたま一打でグリーンを捉えた。先日のゴルフで目立ったのはそれくらいだ。後は見るべきものはなかった。ひょっとしたら、上司はそのことを言ったのかもしれない。

仕事のことには何も触れない。ゴルフの話ばかりだ。終了予定時刻になっても社長は腰を上げなかった。接待酒がそれほどうまいのか、お銚子を次々空にする。ついにはコップで飲んだ。顔を真っ赤にして、ますます饒舌になった。

「それにしても、この近藤くん。優秀ですなぁ、永野さんも優秀な部下をお持ちで羨ましいですわ」

何を突然言い出すのだろう。因みに近藤は自分の名前、永野はぼんくら上司の名前だ。この前だって社長は自分を叱りつけた。提案内容が違うというのだ。実に細かい男だ。余裕というものがない。コストを絞るだけ絞る。あれではトラフィックが最大化する何らかの異常時には対応できまい。通信システムは費用削減だけが目的ではないのだ。

「いや、社長の通信システムに対する理解度は大変なものですよ。常々近藤とも噂しているんですよ。社長は専門外のこともよく勉強されている」

と上司が言った。しかし自分は社長の噂など上司の前でしたことがない。第一大した理解度とも思っていない。素人が参考書をさらっと読んだ程度だし、システム担当者から耳にした程度の表面的なレベルだ。

「そうかね、まぁ何でも自分という人間は納得いくまで勉強するのが流儀だからね」

お世辞がわからないのか。冗談がきつい。この馬鹿げた二人のやり取りを聞いても、納得の笑顔でいなければならない。いい加減疲れる。

「そろそろ、帰るかな」

社長が言い出した。ぼんくら上司は車を呼ぶようにと自分に指示した。そして用意した土産物を料亭の押入れから取り出した。社長が趣味にしている結構高価な盆栽だった。土産の中味を知れば大喜びするだろう。だがここまで接待してもウチが受注できるかどうかは不透明

だ。おそらくだめだろう。競合三社の中ではおそらくウチが一番高い。ぼんくら上司に楽観は禁物ですよ、と言っても素直に聞くような人間ではない。

タクシーに乗せ、社長が帰ってしまうと、上司は急に不機嫌になった。笑顔を見せるのが損だとも考えているかのようにむずかしい顔をしている。楽しくなかったに違いない。自分にはご苦労さんの一言もなかった。馬鹿な男だ。

自分はぼんくら上司と分かれ、いつも行く自宅近くの居酒屋に寄った。気分転換だ。嫌なことがあると自分はその居酒屋のカウンター席でひとり飲んだ。カウンターの中で調理する店主は気難しい人で滅多に口を利かなかった。しかしなぜか自分はそんなオヤジと気があった。気持ちが安まるから不思議なのだ。最近は目が合うと微笑んでくれるし、機嫌がいいときなど、近藤ちゃんと自分の名を呼んだ。この人は裏表のない人である。自分は直感的にそのことを知っている。

「オヤジさん、ちょっとオレの話聞いてくれる？」

午後十時を過ぎて、手隙となっていた店主に話しかけた。他人に心のうちを明かしたことなどない自分がそのときは珍しかった。オヤジは相変わらず気難しくニコリともしなかったが、頷いてくれた。

「オレ、最近生きてるのが、馬鹿らしくなってきたんだ。人間不信というヤツかもしれない。どいつもこいつも、みんな本物じゃないような気がする」

すると、珍しくオヤジが歯を見せて笑った。そしてこう言ったのだ。

「近藤ちゃん、あまり難しく考えるなよ。これが人生と言うものだよ。本物なんていないんだ。みんなニセモノなのさ。それでも、みんな必死に生きている。ニセモノだから生きられるのさ」

「人生はニセモノだって？　人間はみんなニセモノだっていうの？」

「ああ、そうだよ。いずれ、もっと生きればわかるようになるさ。近藤ちゃんはまだ若いんだ」

それだけ言うと、オヤジは黙ってしまった。

結局その店も三十分ほどいて帰宅し、すぐベッドにもぐりこんだ。気分転換はできたようだ。それに余程疲れていたのだろう、すぐ眠りに落ちた。

その翌朝のことだった。出勤途上、いつもどおり自宅から駅まで約十五分の道のりを歩いていた。自宅を出て五分くらい経ったであろうか、ふと見ると道の真ん中に立派なサングラスが落ちていた。拾い上げてみると傷のひとつもない。そっと道端に置かれたような感じなの

だ。すぐに周りを見回した。幸い誰もいなかった。それでつい悪い気を起こした。拾得物として交番に届ける気を失くし、スーツの右ポケットに隠してしまった。これから本格的な夏になる。ちょうどいい。儲けものをした、と思った。

しばらく歩いているうちに、今朝は初夏の太陽が眩しいことに気が付いた。それでサングラスをしてみた。なかなかいい。一度に気に入ってしまった。

自分はサングラスをしたまま駅に着いた。そしていつもの改札を入ろうとしたときのことだ。不思議なことが起きた。偶然に改札を出ようとする若い男とぶつかりそうになったのだ。急いでいるような感じである。改札を入る自分の方が、パスモのゲートに一瞬タッチの差で早く触った。そのときその男と目があった。

『このボケが』と、若い男は言った。自分はムッとして足を止め、その男を睨んだ。ところが、男は涼しい顔をしている。そして何事もなかったかのように別のゲートから出て行った。確かに、このボケがと聞こえた。ふつう言った本人も何らかの緊張をしながら、こうした言葉を発するはずなのに冷静だった。平静な感情のない顔なのである。

電車に乗った。いつもどおり八分の混み方だ。畳んだ新聞を読めるかどうかのギリギリのところだ。

自分はカバンを網棚に載せようとして、つい目の前の乗客の膝にカバンをぶつけてしまった。恰幅のいい大柄な男だった。目が合った。鋭い目つきである。まるで敵対するかのような目だ。男がこう言った。

『この馬鹿が、しっかり前を見ろ。うすのろは何処にでもいるものだな』

またしてもムッとした。謝罪する気が途端に失せた。男を睨み付けた。いや、睨みつけようと思った。実際は怖かったのだ。

ところが男はすでに目を閉じて、静かに座っている。どうなっているんだ？　強そうな男だったからもとからケンカなどする気はない。でも何か言ってやりたい気分だった。少し感情的になっていた。キッカケができたら文句のひとつも言ってやれるのだが、キッカケはなかった。男はすでに目を閉じていた。

それからなんとなく目を左横に転じてみた。すると今度は若い女性と目があった。信じられないが、その女はこう言ったのだ。

『いやらしい男ね、電車の中でサングラスなんかかけちゃって。頭はボサボサ、不潔そうだし、こういうのが痴漢を働くのよね』

今朝はいろんなことが起きる。自分はすっかり頭にきてしまった。しかし電車の中で若い女性と言い合うのは、自分にとって不利だ。衆目を集める必要は毛頭ない。こんな女と関わるとロクなことはない。

だから自制した。しかし女は何事もなかったかのように、すでに目を窓の景色に向けている。訳がわからなかった。何かがおかしい。自分も窓の外に目をやるしかなかった。サングラスも外した。

三十分の乗車ですっかり気分を害した。地下鉄に乗り換え、さらに二十分乗って会社に着いた。その間何事も起こらなかった。

会社に着き、自分の席に座ると、ほうーっと息をついた。そして朝方経験したことをよく考えてみた。奇妙な体験はあのサングラスが原因ではないか、と思えてきた。何故ならサングラスをかけて相手の目とぶつかると、相手の呟きのようなものが聞こえるのだ。その証拠にサングラスを外してからは何事もない。

自分は、会社の事務室で実験してみる気になった。まだ早い時間だったから社員は揃っていない。しかしいつもどおり酒井さんはすでに出社して、お茶淹れの準備をしていた。毎朝自発的にお茶を淹れてくれる若い女性だ。いつも感じがいい。皆から好かれている。勿論自分も彼女が好きだ。いやこれは特別の意味ではない。

自分は半分恐い思いで、サングラスをかけ、彼女の目と自分の目を合わせてみることにした。彼女がやってきた。いつもの明るい笑顔だ。この爽やかさが売りなのだ。

「おはようございます」彼女はにこやかに言った。だが次の瞬間、『あらあら、今日はまた髪にはよくクシが通っていないし、スーツの肩にもフケがついているわ。お風呂にちゃんと入っているのかしら。だから中年の独身者は嫌なのよね』

と言った。いや聞こえたのだ。

「えっ、なんだって」いつもと違う彼女の態度に自分はやや感情的になった。

「えっ、私何も言っていませんけど」と彼女は笑顔ながら、ちょっと困ったような顔をした。

そこでわかった。やはりそうなのだ。このサングラスだ。これをかけて自分の目がその人の目に合うと、囁き声が聞こえてくるのだ。聞いてはいけない声が聞こえてくる。ひょっとしたら、これはその人の心の在り様ではないか。内心の真実の声ではないか、という気がした。人の心の中はいつもこんなひどいことを思っているのか。そこに気づいた自分は愕然としてしまった。それなら何も聞きたくないし、知りたくもない。知らなければ、まったく平穏無事に過ごせるのに、知ってしまったら心乱されることばかりじゃないか。これが高じれば、すべての人間関係が破綻してしまう。

すぐにサングラスを外した。間違いない。このサングラスは悪魔の

道具だ。目が合えば、その人の心の中を覗けてしまう。
恐くなった自分はすぐ廃棄することを考えた。ところが、すぐに思い直した。
金儲けに使えないか、と考えたからだ。そのように考えること自体、すでに自分は何かに毒されていた。資本主義社会が根付いて七十年、その悪影響としての拝金主義が自分にも感染していたのだ。
金儲け？　窃盗？　そうだ、例えば銀行の大金庫だ。金庫を開ける暗証番号を金庫番から聞き出せば何かに利用できないか、と自分は考えた。ところが、暗証番号を知ったところでどうやって銀行内部に入るかは、まったく別問題だ。それでもいい、とにかくサングラスは何かに利用できる。結局持ち続けることにした。自分はすでに無意識に悪だった。
自分は会社の昼休み、金を下ろすふりをして近くの銀行を訪れた。何をしようというのではない。何かおもしろいヒントを発見できないか、と思ったのだ。
そこはある都銀の支店だった。結構大きな建物である。莫大な現金が保管されているに違いない。実に多くの人たちが出入りして、混雑していた。
すぐ目に付いたのは、五十前後の無精ひげの小柄な男だった。貧相なうえに身なりもあまりよくない。何やら大声で怒鳴っている。
「この銀行はなんでこんなに人を待たせるんだ。俺がどれだけ待っていると思っているんだ。三十分だぞ、俺はヒマじゃないんだ。俺を馬鹿にしているのか。お前ら、何様のつもりだ。のろまな女ばっかり窓口に並んでいやがる。責任者を出せ」
どうやら窓口の担当女性行員は、前の客が依頼したらしい面倒な事務処理に手間取っている。男はなかなか順番が回ってこないことに腹を立てていた。声が次第に高くなっていく。他の客たちも大きな声に迷惑顔だ。とうとう責任者らしい男の係員が出てきた。
「お客様、お腹立ちは理解できますが、他のお客様のご迷惑になりますのでどうぞ大声だけはお止め下さい」
「なんだと、そんなこと言うんだったら、お前が代わりに処理しろよ。そののろまな女ではダメだ。とにかく遅い」
自分はそっとサングラスをかけてみた。丁重な言葉を使った責任者と思しき行員の本心はどうなのか知りたくなったからだ。自分の目が責任者の目と合った。するとどうだ、内心の声はこう言っていた。
『この馬鹿、客だと思ってエラそうにしていやがる。いい加減にしろ。無教養な馬鹿に限ってこういう声を出す。俺はお前みたいな下品な屑野郎が一番嫌いなんだ』

自分はたまらなく愉快になった。誰もいなければ大声で笑っていただろう。これが現実だ。裏に回れば、丁重このうえもない銀行の応対も本心はこの程度のものなんだ。

自分はサングラスをしたまま場所を移動し、二階に上がってみた。少し奥まった席に座っている初老の男性行員に目をやった。男も偶然自分の方を見た。そのとき男の内心はこう言ったのだ。

『俺は今夜も金庫の鍵を預かる。金庫の最終確認をした後、鍵を保管庫に戻す。いや今夜こそ戻さない。鍵で金庫を開けるのだ。金庫にはいったいいくら眠っていると思う？　十億円だよ、十億円。俺はそのうちのほんの一部で十分。旅行用スーツケースに詰め込めるだけ詰め込むんだ。そしてそのままずらかる。毎日まいにち、他人の金の勘定なんてもう真っ平ごめんだ。もうこんな味気ない銀行の下働きなんてたくさんだ。銀行なんて辞めてやる。自由になるんだ』

自分は驚いた。そして彼の胸に付けられている名札を見た。「〇〇」とあった。今夜にでも窃盗事件が起きれば、この〇〇という男の仕業だ。警察に匿名の電話をしてやろう。

だが、事件は結局起きなかった。男はいつも同じことを考えているに違いなかった。

会社に帰った。間違いはなかった。このサングラスは打出の小槌になる。しかし肝心の活用法はなかなか思いつかなかった。

思いついたのはテレビのクイズ番組だ。例えば、みのもんた氏が司会をしている「クイズミリオネア」はどうだろう？　出場すれば一千万円は確実だ。

一日そんな取りとめもないことを考えながら会社にいた。仕事にならなかった。そのとき自分は人生を踏み外そうとしていたのかもしれない。

午後六時すぎ、会社が終わった。やっと終わったと思った。急いで家路についた。家でこれからのことをじっくり考えてみたかった。今後の人生にどう生かすかだ。どんなおもしろいことがあるか、自分は次第に胸がワクワクし始めた。

そして考えついた結論は次のようなものだった。

人間なんて、汚い存在だ。誰しもひとつやふたつ、あるいはそれ以上他人に知られたくない秘密があるはずだ。それを内心の声から探り出す。それをネタにうまく利用すれば、関係において自分が優位に立てるのは間違いない。勿論、その前に秘密の裏づけ、証拠が必要になる。その証拠さえ手に入れたら相手を自分の思うとおりに動かせる。例えば身近でいうなら、あの永野だ。あんな小うるさい小物の男に対

し、日頃の鬱憤を晴らすことは容易だ。自分に対する悪態は、奴からは絶対になくなる。

自分は翌日からこの考えを実行した。まず永野の秘密を探ろう。あいつに悪の秘密があるかどうか、それはわからない。でも何かあるだろう。

出勤すると、昨日一日出張で不在だった永野にすぐ呼ばれた。

「近藤君、何だ君、そのサングラスは？　上司の前ではサングラスを外せ」

自分は早速永野の本心を知りたくて、サングラスをして彼の前に出たのだ。

「部長、自分はどうも眼病にかかったらしいんです。何でも医者が言うには強い光はだめだということで、サングラスがいまの時期手放せなくなったんです」

「じゃ、仕方ないか。早くその眼病とやらを直せよ。ところで肝心な話だ。君は一昨日の玉沢さん、どう思った？　感触はどうだ？　受注できそうか？」

「あの方ですか？　以前にも申し上げたとおり、なかなか難しいと思いますよ。接待を機嫌よく受けていらっしゃいましたが、それも当てにはなりませんよ。そういう人です。私は五分五分だと思っています」

「五分五分では困るんだな。絶対にとらないと。かけた経費や時間はすでに膨大なものになっている。君は見ているとどうも諦めがよすぎていかんよ。いいか、諦めずに通え。玉沢さんの好きな真っ赤な蘭、きょうはそれをプレゼントに持って行け」

「部長、またプレゼントですか？　もう物に頼るのはやめましょうよ。これまで最大限、誠意を見せてきたんですよ。プレゼンの中身だって玉沢社長は相応に評価しているはずですよ。これでだめなら仕方ないでしょう」

「だめだ。絶対にとれ。十億五千万だぞ。これを諦めるわけにいかない。本部長にも報告している。とにかくきょうもフォローしてくれ。すぐ顔を見せるんだ」

自分は永野が内心何をしゃべるのか知りたくて仕方なかった。サングラスのまま彼の目を見た。そして、沈黙した永野の内心が語ったのは、次のようなことであった。

『近藤という男は、一見頼りなく見えるときもあるが、実は肝心なところはしっかりしている。ただ自惚れの自信家だから叱り付けて丁度いい。この男は褒めてはいけない。結果はいままでもきちんと出してくれた』

自分は驚いた。いつもガァガァ小言ばかり言っているが、実際は自分を信頼してくれていたのだ。これは意外だった。外面の当たりと内心とはこれほどに違うものなのか。しかし勿論これだけでわかるわけはない。だからこれからも注意しよう。だが不思議なことに永野の秘密を探る気が急に失せてしまった。自分は素直な気持ちになり、永野部長の指示どおり玉沢さんのアポを取り、外出することにした。

三十分後に、玉沢社長のオフィスにいた。社長は忙しそうにしていたが、一昨日のこともあり、快く会ってくれた。

「いやぁ、近藤君。おとといはいろいろ面倒をかけて申し訳なかった。お蔭で楽しかった。ご馳走になったうえに、あんな高価な盆栽までいただいて申し訳なかった。永野さんにもよろしく伝えてくださいな」

自分は目上とはいいながら、社外の人から君づけで呼ばれるのは心外だった。しかしそんなことは億尾にも出さずに、

「ご丁寧にありがとうございます。そこでなんですが、見通しをお聞きしたいと思いまして、例の、私どもでご提案させていただいた通信システム、社長のお眼鏡にかなっておりますか？」と訊いた。

社長はしばらく沈黙した。自分はサングラスを取り出した。

「社長、すみません。私眼病にかかりまして、強い光がいまだめなんです。医者に勧められて、サングラスをかけるよう言われているんです。すみません」

「そうか。それはよくないね。いいですよ。どうぞご遠慮なく」

サングラスをかけた。するとすぐに玉沢社長の内心が、胸の奥深くから響いてきた。

『冗談じゃないよ。十億五千万円だって、そんな金がどこにあるというのだ。いまウチは火の車だよ。通信システムに金をかける余裕などどこにある？　あるわけがないじゃないか』

内心の声がそう言ったのだ。自分は驚いた。

「そうですか。社長のところは現状そんなに資金繰りが悪いんですか？」

自分は反射的にそう言ってしまった。驚いたのは玉沢社長だ。

「えっ、何だって？　資金繰りが悪い？　私はそんなこと言ってないよ」

不思議そうに自分の顔をじっと見た。首を傾げている。自分はしまった、と思った。

「そうですね、前年度の純利益三十億円の会社が、そんなことないですよね」

「ああ、決定に時間がかかっているのは、三社どれもいいところがあ

ってね。迷っているからだよ」

と、玉沢社長はごまかした。実際には先立つ資金がないのだろう。それなら、いままで何時間もかけて検討してきたあの時間は何だったのか。競合の他社も同じことだ。この会社はどうして危ない状態なのに通信システムのニーズを言い出したのか？　結局われわれの貴重な時間をもてあそんだ、ということか。

「近藤君、もう少し待って欲しいんだ。勿論君のところが最有力と思っている。もう少し細部を詰めたい。あと少しだ。今日のところはそれしか言えない」と言った。

自分はこれ以上の時間をかけたくなかった。むしろ過去の盗まれた時間を返せと叫びたかった。すぐに暇乞いをした。

外に出てバカバカしいと思った。疲れを感じて、喫茶店に入った。コーヒーでも飲んでリラックスしよう。思いきり手足を伸ばし、すべてを忘れたかった。世の中はこんなことばかりだ。玉沢は結局接待を受けたかっただけなのだろう。内心の声はウソをつかないものだ。

永野部長には玉沢さんの会社はもう止めましょう、と言うしかない。だがどう言う？　内心の声がそう言った、とは到底言えない。そんなことを言ったら気違い扱いをされる。だが言わなければ、ズルズルと時間を盗まれるだけだ。自分は喫茶店で、もともとない頭を絞って考えた。だが、なかなかいい考えが浮かばない。

喫茶店を出て会社への帰途、自分は入社同期の小澤がマーケ部にいることを、突然、思い出した。マーケ部は正式にはマーケティング事業部といい、バックヤード的な役割を担っている。会社の信用調査も担当していた。そこで内心のあの声が事実かどうか、調査をしてもらおうと考えたのだ。

小澤はこう言った。

「お前ら、遊ばれたんだよ。引っ張ればずっとその間、接待にあずかれると踏まれたのさ。ホント、営業の奴らは目の前の餌でどうにでもなってしまうんだな。甘いよ。焦っていつもいいように利用されるんだよな。いいよ、すぐ調べてやる」

小澤はそう言って、席を立った。愛想のない男だが、その仕事ぶりは信頼が置ける。

数日後には結果が出た。ほとんど思ったとおりだった。

「近藤、お前の勘が当たってたよ。この会社危ない状態だ。業績が今年に入って急激に悪化している」

「やっぱりそうか。がっかりしたな」急に気持ちが萎えた。

「多分電子部品のリコール騒動が新聞報道されて、それが影響したん

だろう。大口の取引がなくなったのかもしれない。だから大口一辺倒の取引は危ないんだ。なるべく分散させたほうがいいんだよ。

そこでだ。地道に経営改善の施策を打つべきところを社長は一発逆転の博打を打ったんだ。株取引だよ」

「何だ、株かよ。経営者が博打か」

「ところがそれがまた大失敗だったんだ。おそらく投資アドバイザーのアイディアじゃないかな。そのとき日経平均は明確な根拠がなくてジワジワ上がっていたんだ。それで必ずその反動が来るとアドバイザーが読んだ。実際に下げる時期だったと思う。社長もそう見込んだ。そこで、信用のカラ売りを大量に仕掛けたんだよ。ところがそれが運の悪いことに、丁度政権交代の時期にぶつかった。その政権はデフレ脱却を叫んでいたから、その期待感から円安となり、株価の急上昇を招いてしまった。お前の最初の提案は約半年前だろ、カラ売りのスタートが約三ヶ月前だから社長は通信システムのための資金は確保できると踏んでいたに違いない」

「うん、時期的には合致している」

「でもこの社長、博打に頼るなんて甘いよ。だからさ、近藤、この辺でやめとけよ。こんな人間が社長の会社は危ないよ。かえってよかったじゃないか。システム構築の後で業績悪化が表面化したら大火傷するところだったぜ。不良債権だ。接待費だけですんだからむしろよかったんだ」

小澤はそう結論付けた。玉沢社長に騙された自分と永野部長は人が善すぎたと思った。

自分は小澤から手渡された調査報告書を持って、永野部長に説明した。彼は苦りきった顔をし、そして肩をガックリと落とした。見るも気の毒なほどだった。

「本部長に報告にいく。近藤には悪いが、一緒に来てくれないか。俺ひとりでは説明できない。あまりに俺が本部長に期待を持たせてしまったからな。いまさら見立て違いとは言えないよ」

本部長は人柄温和な善人だった。自分のような下っ端に対しても権力で押さえつけるようなことはしない。むしろ立ててくれた。自分はこの本部長となら、おおげさに言うなら最後まで運命を共にしてもいいとさえ思っていた。人望の厚い人なのである。

だが、ここでまたしても悪戯心が働いた。サングラスをかけて、ついでに本部長の本心とやらも探ってみたいと思ったのだ。

本部長室に入る直前、ドアの隙間から本部長の様子がチラっと見えた。何やら週刊誌のようなものを見ていたようだった。自分は初めか

らサングラスをしていた。永野部長から、その理由をすでに伝えてもらっていた。すぐ本部長の目とぶつかった。

すると本部長の内心は驚くべきことを言った。本部長は、自分の見立てによれば善人であったはずだ。

『この忙しいときに、何事だよ。下っ端社員の、この男何といったかな、永野と二人してわざわざ俺に説明することなんてあるのか？　どうせ大したことじゃないだろう』

自分は意外だった。そして失望した。部長が緊急に会って話がしたい、と言ったとき、十中八九報告内容は悪いに決まっている。真剣に耳を傾けるべきだ。それなのに本部長は会社のことなど少しも考えていない。外見と中身はこれほど違うのか。常務取締役本部長ともあろう者が、こんなことでいいのか？

永野部長は俯いたまま、報告した。

「本部長、申し訳ありません。受注間違いなしとお伝えしてきた、W電子部品工業、あそこはどうもだめみたいです」

ところが、本部長の頭の中は別のことを考えていた。自分はずっとサングラスによって聞き取れる内心の声を謹聴していた。

『W部品、そんなのどうでもいいよ。早く適当なところで引き上げてくれ。俺は「ゆき」の本心を確認したいんだ。今日は早めに退社して「ゆき」のところへ行く。あの子との関係が心配だよ。電話ではもう会いたくないと言っていた。せっかくここまで来たんだ。好きなんだよ。別れるなんてできるわけがないじゃないか』

自分は腹が立った。こいつ役員の立場にいながら、こんなつまらない男だったのか。若い女と付き合っていたのだ。仕事より女か！　いいよ、理由をつけて外出し本部長がどこへ行くか、見つけ出してやる。そして秘密を探り、社内に暴露してやる。それにしても、永野部長も自分も本部長というこの卑劣な男に完全に騙されていた。怒り心頭だった。

自分は社の玄関の隅で待機することにした。きょうは社用車で帰宅しないはずだ。しばらく待つと、やはりそうだった。午後五時にひとりで姿を現した。そして最寄りの地下鉄の駅に徒歩で向かったのだ。代々木上原で乗り換え、小田急沿線の某駅で降りた。自分も降りた。尾行なんて初めての経験だ。結構緊張した。本部長は五分くらい歩いて、とあるアパートの一室に入っていった。一階の五号室だった。本部長がブザーを押したとき、若い女が顔を出した。後で表札を見ると『〇〇』とあった。ここまで調べれば楽だ。これから後の調査は私立探偵に任せよう。それにしても何という見下げた奴だ。人間、蔭で何をやっているかわかったものではない。

自分は元気をなくし、疲れ切って家路についた。尊敬していた人の正体を知って落胆がひどかった。人間なんて、なんと浅ましい、なんとくだらないものなのか。

この落ち込んだ気持ちをどう回復させるか？　喫茶店でクラシック音楽を聴きながらコーヒーでも飲むか？　それとも例の店で酒を飲むか？　でもそんな元気もなかった。今回はまっすぐ家に帰ることにした。

家に着いた。誰もいない空間は寂しいものだ。こんなとき、家族でもいれば気が紛れるのになぁ、としみじみ思った。

スーツ姿のままで洗面所に立った。帰宅後すぐに手洗いとうがいをすることが、自分の幼少時からの習慣である。丹念に手洗いをし、うがいもした。それからじっと鏡に映る自分の顔を見た。何度見たか数えきれない見慣れた顔が映っていた。そこには、やはり疲れが出ていた。眼の下には隈もできていたし、充血もしていた。それはそうだ。とくに今日は特別の日だった。疲れたのは無理もない。

そのときだった。

ふとあることを思いついたのだ。ふだん他人は自分のことをどう見ているのだろう？　この素朴な疑問だった。人は真実を知る権利があるが、その一方知りたくない真実だってある。なるべくなら、自分の弱点を知りたくない。ところが一番恐ろしいのは、自分が知らない自分の弱点を他人が知っている場合だ。それは何としても避けたい。するとやはり自分の弱点をこの際知っておくことも必要じゃないのか？　このサングラスはきっとそれを教えてくれるに違いない。サングラスをかけ自分の目を見たら、鏡に自分のどんな真実が映るか、あるいはどんな声がするか。

胸がドキドキした。それで自分の真実がわかるかもしれない。はじめて知る究極の自分、それは恐いものみたさであったかもしれない。

ところで少し自己弁護しておきたい。自分はとびきりの善人でもないが、そうかと言って悪人でもない。まぁふつうだ。不幸な出来事があれば、他人であっても悲しく思い、一緒に同情の涙を流す。お目出度い幸せなことがあれば、他人であっても素直に喜んでやれる。勿論他人を陥れて、自分だけ優位に立つなんてことは絶対にやらない。親孝行もしてきたつもりだ。友達思いでもある。だから自分は絶対に悪人ではない。サングラスが暴露するのは、きっと悪いものではない、と当然ながらに思った。

自分は上着の右ポケットにあるサングラスを取り出した。胸の鼓動は激しくなっている。それから、ゆっくりとサングラスをかけた。す

るとどうだ、途端に鏡の上に妙なものが映った。しかしそれはとても顔と呼べる代物ではなかった。それが自分の顔とはすぐに気づかなかったのだ。

その顔はこんな感じだった。目は大きく眼窩から飛び出ており、眼球の血管は太く赤く浮き出ている。頬の肉は削げ落ち、頬骨が浮き出ている。そして鼻がなかった。それに唇は失われ、黄色く変色した大きな前歯はすべてむき出しになっていた。髪はまばらに大きく後退し、何百歳にも見えた。そうだ、それは骸骨そのものだったのだ。悪鬼さながらの化け物が鏡の中にいたのである。生まれてから、これほど醜悪な顔を見たことがなかった。

だがそれでもまだ、映っている顔が自分のものとは気づかなかった。下の方に目をやった。するとそこに見慣れたネクタイが映っていた。いつものあざやかな赤の地に黒の水玉模様だ。今日玉沢社長に会い、永野部長に説明し、本部長に失望したときにつけていた、あのネクタイである。そしていつもの黒のスーツの上下。

ウワァーと自分は叫んだ。紛れもない、それは自分の顔だった。この醜い顔が自分の内心、これが自分の正体なのだ。それは失望なんてものではなかった。自分はサングラスを外し、床に叩きつけた。サングラスは粉々に破損した。気が狂ったように転げまわり、頭を床に自ら激しく叩きつけた。その痛みから急速に意識を取り戻した。

ベッドから落ちていた。何と、それは夢だった。あまりにもはっきりとした、妙に現実的な夢だったのである。

夢から覚めた自分は、それから明け方近くまで一睡もできなかった。他人の批判ばかりをし、人間の醜悪さばかりを見てきた自分が、夢に教えられたように思えたのだ。つまり、自分こそが誰よりも醜悪な人間なのではないか、その思いに囚われたのだ。

だが、ふだんあり得ない、そんな人生哲学のような難しいことを考えているうち、ふと気がついた。

そんなはずがない。自分のような平凡な、取るに足らない市井の人間が最も醜悪なわけがない。権謀術数の限りを尽くし、権力者に上り詰めた人間はどうなんだ？　そういう人間の方が余程醜悪なのではないか？　陥れた人の数は限りないはずだ。そうしなければ生き残れないからだ。上り詰めるほど、闘いは厳しくなる。

権力者に媚びへつらう人間にしてもそうだ。権力闘争の片棒を担いでいるから条件は同じだ。自分を守るために、数限りない人々を裏切ってきたに違いない。それが上り詰める人間の姿であろう。

だが、途端にまた別の考えが湧いた。それはこういうことだった。

こういう醜悪な人間どもが、ひょっとしてこの世では正常に分類されるのではないか。つまり、正常な人間とは、周囲の変化する現実と適宜に交渉し、意識の転換を自由に行うことで、生活者としてのバランスを保っている者のことではないか。これが生きるということではないか。自分に都合のいいように考えを変えながら、自分に都合の悪い人間を意識的、無意識的に切り捨てている。同様に都合のいい人間を取り込んでいる。そうして自分を守っているのが人間なのだろう。

その一方、変人とは真っ直ぐに物事を考えすぎて、自分自身正しいと考えるものの中に自らを閉じ込めてしまい、身動きを取れなくしている人間のことではないか？　すると自分は変人の部類に違いない。しかし中途半端の変人だ。

そうであれば、ある程度のいい加減さが逆に正常な証しと言えるのではないか。つまり、この世における理不尽さを平然と呑み込み、ただ貪欲に生きること、余計なことを一切考えずにただひたすら生きることこそが人生には大切なことなのではないか。正しいと思ってきたことさえも、生きるために時には捨て去る勇気だって必要なのではないか。人間は生きなければならない。死ぬわけにいかないからだ。

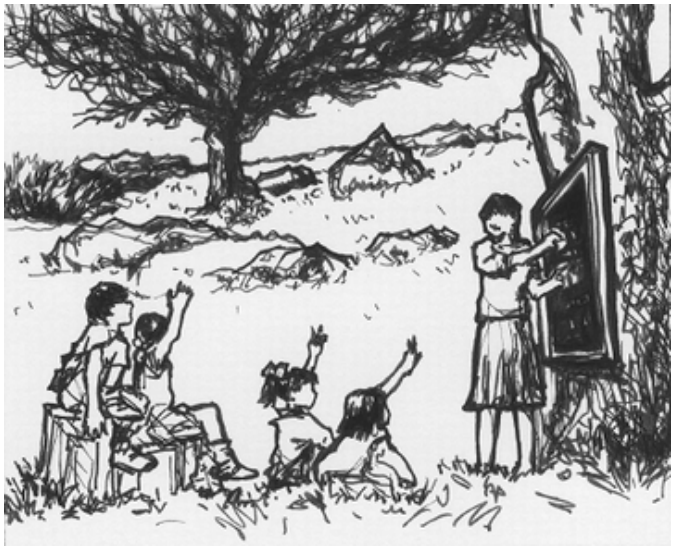
自分はこの考えに達して、ようやく眠りに落ちた。

〈了〉

アプとズコ(Appu & Zukko)

―第七回―

香取　淳



16

雨も降らず風も吹かず、気温も殆ど変わらない地底の奥深くでは、時間が止まったような錯覚に陥ります。さらに物音ひとつ聞こえない洞窟の一隅で、アプたち四人は新世界の到来に備えた規範作りに没頭していました。しかし、動画による学習や源蔵たちとの議論を終えて、漆黒の闇の中から一歩を踏み出した外の景色は、時々刻々と変わっていたのです。

「あの、オレンジ色の木は何だろう？」

ある朝、パーリオ邸を元気よく飛び出したズコが、色づき始めた街路樹を見上げてアプに訊きます。

「あれはね、ナナカマド」

「ふーん、赤いのは実？」

「そう、秋には真っ赤な実を結び、紅葉も早いのよ」

アプは、息を切らせながら答えます。彼女は草花や樹木に関心があって、日頃からスクールで調べていました。

「紅葉、ということは今シーズンももうすぐ終わりか」

ズコが、自分に言い聞かせるように呟きました。その声に、アプが前を向いたまま応じます。

「あと、一ヶ月と少しかしら」
二人はそのような会話を短く交わしながら、草の生い茂る道をひたすら走ります。やがて、眼下に谷の底を縫う川が見えてきました。その流れに辿り着くと、二人は躊躇なく足を踏み入れます。所々に岩が迫り出していたり深い淵があったり、小滝にもぶつかります。それでも渓流のどの辺が浅くて歩きやすいのか、よく知りつくした通路です。二人は洞窟の入り口まで一気に駆け上がり、暗くて狭い穴の中に這入って行きました。

リビングでは何時ものように源蔵が二人を出迎えました。アプとズコは濡れた靴を脱ぎ、足をタオルでよく拭います。そして、テーブルに出されたスープを啜り終えると、規範作りが始まります。
「今日はスクールじゃなく、ここでやろう」
源蔵が、テーブルの椅子に腰を下ろして、二人に話し掛けます。空のカップを片付けてきたアプとズコも異論はなく、源蔵の向かいと隣に座りました。
「君たちがここに来るようになって、何年になるかな？」
さっそく源蔵が、若い二人に問い掛けます。
「確か、五年。そうだよね、アプ」
「はい、十歳の時が最初だったから五年と少し」
アプも、ズコに同調して答えます。
「もし仮に、の話だが、君たちがここを見つけられずに、ワシと千佳に会えなかったとしたら、どうなっていただろうか？」
源蔵が、アプたち二人の顔を交互に見ながら訊きます。
「もし、ここに来なかったら……。そんなこと、考えたこともないよ」
ズコは腕組みをして、黙りこくってしまいました。
「私はレースに集中、かな。パーリオ夫妻の言いつけをよく守って、ご褒美のご馳走をねだる家畜になっていただろうな」
「ウーン、アプの言う通りかも」とズコ。
「多分、そういうことになるだろうな。いくら嫌だと思っても、家畜にはほかに為す術がないから」
源蔵はアプたち二人の答えを予測していたかのようです。
「僕らはここで多くのことを知って、さまざまなことを学んだ。まず、自分が人間であるという重大な事実。でも、その人間は戦争で自滅し、僅かに生き残った者もイカタック星人の家畜にされてしまったという現実」
ズコが、自分の眼より少し高い空間を睨んで言います。

「その現実から、私たちは人間として何をしなければならないのか、という使命を知り、果たすべき目標が生まれてきたわ」
アプも上目遣いに宙を見つめて、ズコの言葉を繋ぎます。
「自分を知り、自分の置かれている状況とそうなった経緯を知れば、自分のやるべきことが見えてくる……、ということでいいかな」
源蔵が若い二人の言葉を要約して、確認します。
「はい、その通りです」
アプとズコが、声を揃えて答えました。
「それでは訊くが、君たちは何故そのように進歩することができたのかな？」
「それは」と言いかけて、ズコがアプの顔を見ました。アプは、ズコを見返して「それは一杯勉強をしたからよ。ねえ、そうでしょう」と自信なさ気に答えます。
「確かにそうだ、勉強だよ。スクールで字を覚えて沢山の教材を学び、そのあとで源蔵さんや千佳さんと納得がゆくまで話し合う。その繰り返しで僕らの知識はとても豊かになったと思うな」
「知識に加えて、考える力や判断する力も身に着いたと思うわ」
互に話すうちに、アプたちの口調は確信に満ちたものに変わってきました。
「そうだね、君たち二人がいくら優れた資質を持っていても、家畜のままでは何も知ることはなく、何もできない。飼い主を喜ばせるレーサーとして一生を終えるところだったね」
源蔵は若い二人を傷つけないように、気を配って言いました。
「ということは、ここで沢山勉強をして多くのことを学んだから私たちは人間になれた、ということかしら？」
アプが、源蔵に確かめるように訊きます。
「ウン、そうだね。それは間違いないと思うよ」
「そうかぁ、人間は色々なことを知ることで人間らしくなれるんだ！」
ズコが、新発見をしたときのように驚嘆の声を上げました。アプも、目を大きく見開いて、源蔵とズコを見詰めます。そこに、千佳が入ってきました。
「あれ、何かいいことがあったの？　みんな、目を輝かせて」
「あのね、いま凄いことに気付いたんだ。人間が人間らしく生きる方法だよ！」
「ズコ、急にそんなことを言われても分からないわよ」
千佳は、当惑顔でズコを見詰めます。
「あのね、私とズコがもしもよ、ここに来なかったとしたら今頃どうなっていただろう、という話をしていたの」

アプが、笑顔で説明を始めました。千佳は、テーブルの空いた椅子に掛けて耳を傾けます。アプは、リビングで交わされた三人の討議をかいつまんで紹介しました。

「そうなの、アプもズコも大切なことに気付いたわね」

千佳は若い二人を交互に見詰めながら、貴重な気付きを褒めます。三人のやりとりを見守っていた源蔵が口を開きました。

「勉強や学習が大事だと言うことは、みんなよく分かったと思うけど、そのような場やシステムを構築することを教育と呼ぶんだ。少し押しつけのニュアンスがあって、あまり好きになれない言葉だがね」

「教育と言っても色々あるのよ。最初の段階は一方的な知識の詰め込みになりがちだけど、そのあとは自ら学ぶことが大事になるわ」

千佳が、源蔵の言葉に注釈を付けました。

「それじゃ、僕らがここに来たときも、源蔵さんたちは真っ先に教育を考えた？」

「その通り。君たちが人間らしい人間になるようにと。最初は文字の読み書きや単純な知識の詰め込みで辛い時期もあったと思うけど、二人ともよく頑張ったね」

アプとズコは、互の顔を見ながら小さく頷きます。

「でも、あなたたち二人が教育をしっかり受けたから、こうして楽しくお話ができるようになったとも言えるのよ。これからもいっぱい勉強をして、私たちに色んなことを教えて頂戴」

「千佳さんに教えるなんて、とんでもありません。まだまだ教えてもらうことばかりです」

アプとズコは、声を揃えて謙遜しました。

「今日はとても良い話し合いができたね。この続きはまたにして、昼食にしようや」

源蔵の提案で、その日のディスカッションは終了しました。

翌日、アプとズコが地底湖の先にあるリビングに到着すると、源蔵が待ち構えていました。

「二人とも教育の大切さに気付いたと思うから、今日はスクールでビデオを見ながら考えてみよう」

そう言うと、源蔵は足早にリビングを出ました。アプとズコは洞窟内用の乾いた靴に足を入れて、源蔵の後に従います。スクールに入ると、源蔵はタッチパネルを操作しながら呟きます。

「そうだな、今日はこの話題からアプローチしてみるか」

アプとズコは、お気に入りの椅子に腰を沈めて、大きなディスプレ

イを見詰めます。そこには『世界の飢餓（きが）の状況』というタイトルが浮かび上がりました。

「これは二〇一〇年代に作られたビデオだが、地球上には飢餓で苦しむ人が一杯いたという記録だ」

「飢餓って何ですか？」

アプとズコが声を揃えて訊きました。

「飢餓と言うのは、食べ物がなくてお腹を空かしている状態。詳しく言うと、生きていくのに必要な最低限のカロリーを摂取できない状態だな。必要なカロリー数は年齢や性別、体の大きさで変わってくるけどね」

「フーン、飢餓になると人間はどうなるの？」

「体や脳の働きが鈍って、物事に集中することや積極的な活動ができなくなる。とくに子供の場合は免疫力が低下して、はしかや下痢などで命を落とすことも多くなる」

「食べられない人が一杯、ということは、その頃の地球では食糧が不足していたということかなぁ」

ズコが、独り言のように呟きます。

「その答えはビデオに出てくるからしっかり見ておきなさい。それではスタートするよ」

そう言って、ビデオを止めていた源蔵がタッチパネルに触れました。

ディスプレイいっぱいに世界地図が浮き上がります。その地図はグリーンから黄色、赤などの五段階に塗り分けられていました。それは国連世界食糧計画のハンガーマップで、調査の時期は二〇一二年からの三年間。マップでは、インドを中心とした南アジアとアフリカのサハラ砂漠より南の国々が赤や茶色に染められていました。それらの国では人口の二五％以上、最悪の国々では三五％以上が飢えていて、栄養不良は八億五百万人、地上に住む人の九人に一人が飢餓に苦しんでいることになります。

それほど多くの人が飢えているのは、世界の食糧が不足しているためでしょうか。答えはノーで、世界にはすべての人に十分に行き渡るだけの食料があるのです。にもかかわらず、何故多くの人々が飢餓に苦しむのでしょうか。原因の一つは、自然災害です。地震や津波、洪水や干ばつなどで農作物は採れず、人々は住む家や仕事などの生活基盤を失います。さらに、紛争が起きると多くの人が家や農地を捨てて難民キャンプに逃れます。たとえ地元に残ったとしても危険なために農作業はままならず、食料の確保は困難を極めます。

慢性的な貧困も原因の一つです。貧しい農民は土地や水、種などを

仕入れる資金がないために自給自足ができず、貧困や飢餓から抜け出すことができません。また子供にも教育を受けさせられないため、貧困の連鎖が続きます。実際に飢餓に苦しむ人のおよそ七五パーセントは途上国の農村部に住む貧しい農民です。

ディスプレイには飢餓に苦しむ人々が映し出されました。食糧の配給所に群がるおびただしい子供や乳幼児を抱きかかえた母親たち、路上に這いつくばって食べ物をむさぼる痩せた少女、干ばつでひび割れした農地、着の身着のままで逃れてきた人々であふれる難民キャンプ。そして骨が浮き出るほどに痩せて、腹だけが異様に膨れ上がった瀕死の子供たち。

見ていることが辛くなるような映像がしばらく続いた後で、『それではどうしたらよいか、解決策はあるのか』という文字が画面に浮き上がりました。その文字が消えると、そもそも自給自足の時代には飢餓というものはなく、その土地に見合った人口が常に維持されてきました……というナレーションと共に、世界の人口増加を示すグラフが描かれていきます。

グラフの横軸には西暦元年から二〇一〇年までの時間が、縦軸には億人単位で人口が目盛られています。まず、西暦元年の人口は一億人に過ぎない、と横軸の基線に触れそうな位置に赤い点が打たれました。その点は線となって右に伸び、西暦千年では二億人、千五百年では五億人とほぼ水平の推移を示します。ところが千九百年に近づく頃から人口は十五億人と右肩上がりに増え始め、二〇一〇年には七十億人に急増していきます。

赤い線で描かれたグラフの先端はほぼ直角に立ち上がり、いまにも縦軸にくっつきそうです。十九世紀から二十世紀にかけての人口増加がいかに爆発的なものであるかが一目瞭然でした。さらにグラフが鋭く立ち上がる千八百年の少し前に『産業革命』、千九百年のあたりに『農業革命』という二つの文字が書き加えられ、その二つと人口の急増との間には密接な関係があることが解説されていきます。

人口が急激に増えることを『人口爆発』と呼びますが、それはインドやソマリア、エチオピアなど南アジアやアフリカなどに多く、前出の飢餓に苦しむ国々とほぼ一致します。生きていくのに必要な食糧さえ十分に手に入らない人口爆発の原因を、「干ばつなどの自然災害」、「貧困の連鎖」、「教育の不足」といったことで片付けて良いのでしょうか。もし仮に、これらの国で小麦や米、ジャガイモなどを栽培していたとすれば、飢餓は十分に防げる筈です。ところが実際に栽培されている作物の大半はコーヒーや紅茶、ゴムや綿など、輸出すればお金になる『換金作物』です。さらに木材や鉄、ダイアモンドなどの資源

の産出のために農地がつぶされ環境が破壊されているケースも少なくはないでしょう。

自給自足の社会では人口は安定していました。食糧の生産・供給量を上回る人口増加は起こらないからです。しかし、産業革命を契機に換金作物の栽培が加速され、農村部にも貨幣経済が入ってきました。その結果、一時的に農村は豊かになり食料の供給が増えて人口も増えたのです。ところが人口が増えると、より多くのお金が必要になり、生産の拡大と経済の発展が求められます。経済発展のためには換金作物の栽培をさらに拡大、木材や鉱物資源の生産を上げる必要に迫られ、この悪循環が続くと資源の枯渇と環境破壊を招いてしまいます。そこには先進国の植民地政策の影響もあったでしょうし、大資本による搾取の存在も否定できません。

このような切り口から見ると、貧しさは人口爆発の原因ではなく、人口爆発の『結果』であると捉えることができます。単に貧しさや無知が原因で子供を産み増やしているのではないということです。

（人口爆発の記載については、web「5分で分かる人口爆発と貧困」NPO法人『地球村』より一部を引用しました）

学習ビデオは、まとめとして飢餓問題の解決には難しい問題が山積していることを強調します。富める国による「途上国の経済支援」にも問題が多く、実際には貧しい国の人口爆発と貧困を助長していることもあり得ること。さらに「自給自足体制の回復」とか「所得格差の解消」とか言ってみても、それらの実現には乗り越えなければならない壁が幾重にも立ちふさがっていることを指摘します。

いまでも世界には飢餓に苦しんでいる人がいっぱいいるという現実から私たちは目をそむけてはいけません。多くの人が知恵を出し合い、互に協力をし合って、より良い解決策を見出していきましょう、というナレーションでビデオは終了しました。

内容が重たくて、アプとズコはしばらく椅子から動けません。放心したように真っ黒な画面を眺めたままです。そこに源蔵が戻って来て、二人の背後から声を掛けました。

「いままで見たことのない内容だと思うけど、かつての地球には飢えた人々がいっぱいいたんだよ」

「肥満やメタボで糖尿病や心臓病が増えたという話は勉強したけど、逆に食べられずに死んだ人も多かったんだ！」

後ろを振り向いたズコは、驚きの表情を隠しません。

「お金持ちは貧しい人たちに食べ物を分けてあげればいいのに。そうすればどちらも健康に生きられると思うわ」

「確かにアプの言う通り。しかし、実際には貧富の格差は拡大するばかりで、飢餓も解消することはなかったようだね」
源蔵が沈んだ声で言いました。その源蔵にズコが問い掛けます。
「ビデオにも出てきたけど、貧しいから人口が増えるの、それとも人口が増えるから貧しいの？」
「それは一概には言えないよ。卵が先かニワトリが先か、という話に似ているな。ただ、貧困の連鎖は教育によって断ち切れる、というより断ち切らなければいけない」
「それってどういうことかしら。ちょっと解かりにくいな」
アプが率直に訊きました。
「そうだな、生まれた家が貧しくて学校にもいけない子は字の読み書きができないし、知識も乏しく技術もない。だから成長しても就職先は見つからず、働きたくてもまともな仕事にはつけない」
アプとズコがコクリと頷きます。
「また、女子の場合は十五、六歳で子供を産んで、子育ての知識も将来の計画もないままに極貧の生活が続く」
「そうか、そのような繰り返しを貧困の連鎖と言うんですね」
「ウム、だから幾ら貧しくても生まれてきた子には教育が必要になる。教育を受ければ自立できる人が多く育つだろうし、自立した人が増えればその社会や地域、国の自立が進む。だから貧困や飢餓からの脱却も、第一に子供の教育から始めるべきだ」
源蔵は、強い口調で断言しました。しかし、アプとズコは考えたこともないテーマなので、素直には頷けません。
「そうだなぁ、それでは米百俵という話をしてあげよう」
源蔵は、若い二人に理解を促そうと考え、次のような話を始めました。
それは一九世紀後半のことであるが、戊辰（ぼしん）戦争（一八六八―一八六九年）に敗れた長岡藩は財政が窮乏して、藩士たちはその日の食事にも事欠く有様であった。これを見かねた支藩の三根山藩から見舞いに米百俵が届けられる。藩士たちは、これで少しばかり生活が楽になると喜んだが、藩の重鎮であった小林虎三郎は見舞いの米を藩士に配ろうとはしなかった。彼は百俵の米を売却して得られた資金で学校を建てることを決定してしまう。藩士たちは猛烈に反発して虎三郎に抗議をしたが、虎三郎は「百俵の米も食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万俵、百万俵となる」と反対する者たちを退ける。彼は、食えないからこそ学校を建てて人材を育成するのだという信念を貫き、藩内に学校を建設した。虎三郎の教育第一の取組みは、やがて多くの有為な人材を輩出し、長岡の復興に繋がっていった。

源蔵の話を聞き終わると、即座にズコが口を開きました。
「小林虎三郎という人は凄いですね」
「そう、すぐれた先見性と不屈の決断力にはワシも敬服している。何より教育を第一に考え実行した点が素晴らしい」
「そうすると、いまビデオで見た飢餓で苦しむ国や地域の子供たちにも教育が必要になる、ということかしら？」
アプが、源蔵の顔を見つめて尋ねました。
「そう、その通りだと思うよ。時間は掛かるが、まず貧しい国や地域の人たちが虎三郎のように教育の重要性に気付くことが大事だ」
「先進国の援助も、食料や資材を提供するだけでなく、学校を建てたり、先生を育成したりするような支援が大事になるのね」
源蔵の言葉を先取りするようにアプが言いました。
「そうだね、ワシは学校を建てるだけでなく、教育制度の整備が重要だと思うな。幾ら貧しい家の子であっても、すべての子供たちが等しく教育を受けられるようなシステムだね」
「義務教育のような仕組み？」
「そう。さらに理想を言えば、人間として自立できる年齢、まあ一八歳位までは国や社会が教育する形が望ましい」
「先進国はそのような支援をしたのですか？」
ズコが源蔵に訊きます。
「いや、殆どないと思うよ。食糧や建設資機材、医療などが中心で、貧しい人々の自立を促すような支援は殆ど聞いたことがない」
源蔵は、少し怒りを込めた口調で言います。そのとき入口の扉が開いて、千佳が顔を出しました。一日の大半を研究室で過ごす彼女がスクールに来たのは久しぶりです。
「皆さん、ご熱心ですね。リビングにはいなかったので、こちらに来てみたのよ」
彼女は源蔵の隣に座り、椅子の向きを回転させて全員の顔が見える輪に加わりました。
「今日はどんなお話をしていたの？」
「人類が地上から消える前のことだけど、貧富の差が拡がって、飢餓に苦しむ人が一杯いたということ。その話には驚きました」
アプが、ビデオの内容を簡潔に伝えます。
「その飢餓に苦しむ人たちを救うためには食料などの支援だけでは不十分で、抜本的な支援、具体的には子供たちの教育が一番必要ではないか、ということになりました」
ズコが、間を置かずに続けます。

「ワシからは教育の大切さを理解しやすいようにと、米百俵の話を披露したところだ」
「そうですか、教育が大切と言えばマララ・ユスフザイという女性のことを思い出しますわ。彼女はパキスタン出身で一七歳のときにノーベル平和賞を受賞しています」
「えっ、一七歳でノーベル賞？」
「私と二歳しか違わない、その若さで何故？」
アプとズコが同時に、同じ疑問を発しました。若い二人の疑問に千佳は答えず、源蔵に視線を送ります。
「そうそう、彼女は女性の教育を認めないタリバンに撃たれ、命を狙われながらも教育のために立ちあがった女性だったね」
源蔵は目を輝かせて、千佳の話を繋ぎます。
「マララは受賞後にいろいろなところで講演をしているけど、教育が第一 Education first ということを強く訴えているわ」
「そう、それこそワシが心底から強く思っている言葉だよ。マララさんも全く同じことを言っているよね！」
源蔵は興奮気味で、顔が紅潮していました。
「分かった、分かってきたよ！　昨日からの学習で」
ズコが、甲高い声を上げました。
「人が人らしく生きるためには教育が必要不可欠だということ」
「そして、どのような国や社会であっても、教育が第一でなければならないということ」とアプが続けます。
「いかに貧しくても、人はみな平等に教育を受ける権利がある」と源蔵がさらに付け加えます。
「皆さんの考えが一つにまとまったようですわね。それでは私が新しい世界の四番目の規範を言ってもいいかしら？」
千佳が、三人の顔を順繰りに見て、賛同の表情を読み取ります。そして、椅子から立ち上がり次のように宣誓しました。
「人には人らしく生きる権利が保障され、そのためには教育が第一となります」
ディスプレイを背に円い輪となった四人は、互いの顔を見つめ合いながら拍手をしばらく続けました。

ナナカマドの後を追うように街路樹や森の木々が色づいてきました。街中では銀杏が朝日を浴びて黄金色に輝き、旧道に入ると黄色い落葉松（からまつ）や真っ赤な楓（かえで）で周囲の山々が燃えるように彩られています。アプとズコが十日余りレースで全国を転戦しているあいだに、秋は着実

に深まっていたのです。
「こんにちは、ただいま戻りました」
アプとズコがリビングで待ち受ける源蔵に挨拶をします。この日は珍しく、千佳もテーブルで紅茶を啜っていました。
「二人ともお帰り。何か変ったことはなかったかな？」
「ハイ、ありませんが、外はモミジがとてもきれいです」
そう言いながら、アプが楓の赤い葉を何枚かテーブルに並べました。
「まあ、宝石のような色。それに形もいいこと」
「でしょう、途中で休憩した時、きれいな葉っぱを集めたのよ」
アプが得意気に言いました。
「紅葉ということは、今シーズンも終わりが近いな」
源蔵が、モミジから視線を上げて言います。
「そうなんですよ。あと半月しかありません」
ズコが焦る気持ちを顔に滲ませて言います。
「それでは我々の学習も急がなくてはいかんな。早速始めようか」
「ハイ、お願いします」
アプとズコの賛同を得て、源蔵は議論に入りました。
「いままで幾つかの規範をみんなで取り決めてきたよね。第一に、人は人を殺してはいけません、二番目に……」
源蔵は、テーブルに着いたアプとズコの顔を見ながらこれまでの振り返りを始めました。四番目まで復習が済むと、源蔵は若い二人に問い掛けます。
「それでは次に重要なこと、新しい人間の世界に求められることは何だろうか？」
アプとズコは小首をかしげたままで、言葉が出てきません。
「何でもいいんだよ、思いつくままに言ってごらん」
「男の人が女の人を無理やり襲うようなこと……」
ズコが独り言のように言いました。彼は、何年か前に溺れていた女ホサピを池から救い出し、それが強姦（ごうかん）に間違えられて酷く叱られたことを思い出したのです。
「ウム、ズコが誤解された強姦というのは、男が女を無理やり犯すことだが、男女の立場が逆になるようなケースも有り得る」
「僕はスクールで、姦淫（かんいん）してはならない、という言葉を勉強したことがありますが、それに該当しますか？」
「いや、ちょっと違うな。姦淫とは男女が道義に背いた肉体関係をもつことを指すが、道義と言うのは一概に規定できない。時代やそのときの社会的背景で大きく変化するからな」
そう話す源蔵は、渋い表情をしています。

「何を言っているのか、さっぱり……」
アプとズコが当惑しています。
「そうだね、日本の旧刑法には姦淫罪という法律があった。それは夫のある妻が他の男と肉体関係をもつと成り立つが、夫には適用されなかった。当然、男女平等の世の中になると廃止されたがね」
「それって、日本だけの話ですか？」
「いや、韓国でも同じように廃止となったが、イスラムの世界では厳然として存在していた」
「その法律って男尊女卑の典型じゃない。そんなこと、新世界の規範には相応しくわないわよ」
大筋を理解したアプが、膨れ面で言います。
「変化と言えば、同性愛も長いことタブー視されてきたわ。でも、性同一性障害とか色々なことが医学的に解明されてくると、表面的な社会通念だけでは判断ができなってきたわけよ」
千佳が、性に関する問題をさらに広げていきます。
「フーン、そうすると性衝動のままに間違いを犯してしまうようなことは規範にならないのかしら？」
アプが、源蔵と千佳の顔を交互に見て訊きます。
「いいえ、そんなことないと思うわ。性衝動の暴走にはやはり歯止めをかけることが必要よ」
「ワシもそう思うな。いま挙がってきた問題に加えて、年端のいかない少年少女に性的ないたずらをすること、性的虐待と呼ばれる行為も許されることではない」
「子供が性の対象にですって！　そんなことってありなの？」
「ウム、被害者が幼いために明るみに出ないケースもあるから、少なくはなかったと思うよ」と源蔵。
「強姦や性的虐待がいけないっていうことはよく分かった。でも、性とは関係のない暴力だって、すごく悪いことでしょう」
「そう、ズコの言う通り。暴力は絶対に禁じられるべきだね」
「僕はスクールで覚せい剤や危険ドラッグによる暴力や交通事故が多発したということを学習したことがあるよ」とさらにズコ。
「良いところに気付いた、覚せい剤や危険ドラッグは人間の理性を麻痺させて恐ろしい暴力や危険行為に結びつきやすい。だから薬物の乱用も戒めに入れたいと思うね」
このようなやり取りがしばらく続いて、三人の議論はだんだん煮詰まってきました。
「それでは次の規範は、暴力はいけません、ということでどうかしら」
「ウン、僕は暴力に加えて性的虐待も入れた方がいいと思うな。少年

少女に限定しない老若男女に対する性的虐待という意味で」
「もうひとつ、薬物の乱用も入れれば完璧かな」
源蔵の言葉に、若い二人と千佳が大きく頷きました。それを確かめ、源蔵は五番目の規範を大きな声で宣誓します。
「暴力と性的虐待を禁じます。理性を失う薬物の乱用も許しません」
アプとズコ、それに千佳がパチパチと拍手を送り、源蔵が何度も大きく頷きました。

次の日も、同じようにリビングで議論が始まりました。この日は千佳の姿はありません。
「規範が五つできたが、もういいかな。人が社会で生きていくために欠かせないことは、ほかにないだろうか？」
源蔵が、アプとズコに問い掛けます。
「私は、物を盗んではいけないということが大事だと思うわ。先週も遠征先で着替えを全部取られて困ったことがあるの」
「そうそう、ホサピレースの事務局が代わりの服を用意してくれるまで、アプはしばらく更衣室から出られなかったものね」
遠征先での出来事を、ズコもフォローして言います。
「ホォ、そんなことがね。でも盗られたという確証はあるの？」
源蔵がアプに疑問を投げ掛けます。
「バッグを更衣室に置いて、トイレに入っている間になくなっていたのよ。シャツやスカートが勝手にバッグから出て行く？」
「そうか、更衣室にいた何者かに盗られたということになるか」
源蔵は、アプの言い分を認めて頷きます。
「悪意があるかどうかは分からないけど、よく持物はなくなるよ。ホサピにも色々なのがいて、中には自分の持物と他人のそれとの区別がつかない奴もいるし」
ズコも同じような経験を思い出して、膨れ面で言いました。
「いずれにしても、物を盗んではいけないということは重要だから、憲章には欠かせないかな？」
「はい、その通りだと思います」
アプとズコが声を揃えて答えました。
「付け加えて言うと、盗むことは物だけではないと思うな。知的財産の盗用、例えば他人（ひと）の発明や発見を断りなしに利用するとか、他人（ひと）の文章や音楽、デザインなどを勝手に使ったりすることも該当する」
「そのようなことって、滅びた人間の世界ではよくあったことなの？」
「ウム、ワシもその時代を生きてきたわけではないから、はっきりし

たことは言えんが、常に大きな問題になっていたようだね」
「それじゃ、盗んではいけないということに、源蔵さんがいま言ったことも付け加えればいいわ、ねえズコ！」
「ウン、それで六番目ができあがるよ」
若い二人に促されて源蔵が立ち上がりました。そして一段と高い声で六番目の規範を宣誓します。
「盗んではなりません。物に限らず、発明・発見等の知的財産も含めて」
アプとズコが源蔵の顔を見上げて、パチパチと拍手を送りました。

燃えるような紅葉に彩られていた山もすっかり色褪せ、舞い散る落ち葉がアプとズコの足に絡みつきます。二人の野外トレーニングも、残りわずかとなってきました。
「大事なことは出揃ったと思うが、もうほかにはないかな？」
アプとズコが洞窟内のリビングに落ち着くと、何時ものように源蔵が切り出しました。
「僕は、嘘はつかない方がいいと思いますが、どうでしょう？」
ズコが、源蔵とアプに問い掛けます。
「それはそうだけど、一概には言えないと思うわ」とアプは、渋い応答です。
「ウーム、いろいろなことが考えられるな。例えば癌の告知のようなケースだ。癌はできるだけ本人に告知した方が良いと言われるが、精神的に耐えられない患者の場合には不用意に真実を告げる訳にはいかなくなる。また、孤児院から乳幼児を引き取って育てる場合にも、出生についての真実はその子が理解できる年齢になるまでは伏せておいた方がいいと思うな」
「なるほど、必要なウソとか美しいウソがあるから、嘘はすべてダメです、という訳にはいかないんですね」
ズコが、頷きながら言います。
「そうだよ、現に君たちもいま、トレーニングだと嘘をついて、ここに来ている」
「源蔵さん、それは言い過ぎですよ。その嘘は僕らが生きていくために必要なことだし、嘘の相手はイカタック星人ですよ！」
「ごめん。冗談、冗談だよ」
「大事な話をしているときに、もう。からかわないで下さい」
「しかしズコ、ユーモアとしての嘘もあるんだよ。例えばエイプリルフールとかドッキリカメラとかね」

「そうすると嘘をついてはいけない、というのは新世界の規範にはなり得ない、ということ？」
「いや、問題になる嘘もあるよ、絶対についてはいけない嘘がね」
源蔵は緩んだ表情を引き締めて言います。
「それはどんな嘘かしら？」
アプが、源蔵の顔を見詰めて訊きます。
「例えば裁判で偽りの証言をすること。証人が嘘の供述をしたとしたら、罪のない人に罪を被せたり、逆に罪を犯した人を無罪放免にしてしまうような間違いが起こり得る」
「なるほど、それは問題です、大問題になりますね。公正な裁判など成り立たなくなってしまう」
「そうだろう、だから偽りの証言は絶対にしてはならない」
「よく分かったわ。でも、私はほかにもあるように思うな、例えば悪意に満ちた詐欺のような」
「ウム、詐欺も良くないな。相手に危害や損害を及ぼすような嘘や作り話を詐欺と呼ぶが、これも禁じられるべきだろう」
「そうか、ウソの中でも偽証と詐欺だけは明らかにいけないわけだ」
「そうだね、ほかに付け加えることはないかな？」
源蔵が、アプたちの顔を見て訊きます。
「ハイ、もうありません」
「それではズコ、第七番目の規範をまとめてみてくれないか」
源蔵に促され、ズコは椅子から立ち上がりました。そしてよく通る声で高らかに宣誓します。
「偽りの証言ならびに詐欺をしてはなりません」
アプと源蔵が拍手を送り、宣誓を終えたズコも拍手に加わります。そこに千佳が入ってきました。
「あら、皆さんで拍手、ということは新しい規範ができたんですね」
「そうです、千佳さんがいないところで失礼だったかも知れませんが」
「いいえ、ズコ、そんなことありませんよ。その規範はあなたたち二人の胸の中にしっかり刻み込むことですから」
「えっ、千佳さんには関係がないと言うんですか？」
「とても関心はあるの、だけど、規範は新しい世界に生きる人たちに広めるものでしょう。だから私や源蔵さんはいくら関心があっても、どうにもならないのよ」
「そうかぁ、作ることはできても、そのあとは別問題なんだ」とズコ。
「だったらさぁ、今まで作ってきた規範のタイトルに、源蔵さんと千佳さんの名前を入れたら？」
しばらく黙っていたアプが、新たな提案をしました。

「いや、駄目だ。ワシと千佳さんは滅びた人間の末裔(まつえい)で、新世界の戒めや規範に口を出す資格がない」
源蔵がきっぱりと言い切りました。
「そんな……、実際に作った中心人物は源蔵さんなのに」
ズコとアプが嘆くように言いました。
「新しい人間の世界ができるかどうかは分からないが、もしできたときにはアプとズコ、君たちがその世界の中心になる。当然その規範や戒めは君たちの名のもとに広めるしかないんだ」
「源蔵さんと千佳さんの規範、ではダメなわけ？」
「ウム、アプとズコでなくては。そうだよね、千佳さん」
「はい、私たちのことなど、新世界では取るに足らない存在になってしまいます。ですからあなたたち二人がリーダーになって、二度と滅びることのない世界を作り上げなければならないの」
千佳は力のこもった声で、二人を諭すように言いました。
「まず、春から作ってきた七つの規範をしっかり心に刻みつける。そしてイカタックシティにいる幼い子たちにそれらのことを正しく伝えて根付かせていくこと、それが君たちの使命だ」
源蔵が、逆らうことはできないような強い口調で言います。
「大変だとは思うけどアプとズコ、二人で力を合わせて幼い子供たちを教え導いていくのよ」
アプとズコは背筋を正して、源蔵と千佳の言葉に大きく頷きました。

17

十一月の末日に、アプとズコはパーリオのワゴン車でイカタックシティに移動しました。市の郊外にある体育館、そのすぐそばに併設された宿泊所に到着すると、世話係のペリーゼがスルスルと近づいてきました。彼女はトレードマークのピンクの洋ダルから円い顔を出して、仰々しく挨拶をします。
「パーリオ様、先ほどからお待ち申し上げておりました。この冬もアプ号とズコ号の二頭ですね」
「そうだよ、ペリーゼさん。どちらも大事なレースホサピだから、よろしく頼む」
「お任せ下さいませ。パーリオ様の金の卵でしょうから、私の弟や妹と思って大事にしますわ」
彼らの会話を聞き流しながら、アプとズコは大きなバッグを手に玄関に入ります。ペリーゼも、パーリオのワゴン車を見送って、二人の

後を追ってきました。
「生意気なホサピども、入所の手続きはとっくに済んでいるからさっさとお入り。それから何か要るものがあったら必ず私を通して申し出ること、親切な私がすぐに取り揃えてやるからさ」
「ハイ、有難うございます、ベリーゼ様」
アプとズコは頭を深く下げて礼を言います。その二人を尻目に、彼女は洋ダルをクルリと廻して引き上げて行きました。
「グググ、お久し……グググ」と女の声がしました。振り向くと、ハウスキーパーのチロロが笑顔で二人に近づいてきます。
「あら、チロロさん。お会いできて嬉しいわ」とアプが大声を上げ、「来年の春まで、またお世話になります」とズコが挨拶をしました。チロロの案内で、二人は昨シーズンと同じ部屋に夫々の荷物を運び入れます。そして二人は身の回りの品をバッグから取り出し、長丁場の冬季トレーニングに備えました。
翌朝、アプとズコは紫色のコスチュームに身を固めて、宿泊所を飛び出しました。道端の表土は霜柱で浮き上がっていますが、まだ大した寒さではありません。増産所に到着すると、理事長室の前にパーリオが立ち、二人を待っていました。
「寒かっただろう、さあ、二人とも駐車場の中にお入り」
「有難うございます、パーリオ様。でも、僕らは走っているとほとんど寒さは感じません」
「そうか、それならいいんだが」と答えながら、パーリオは新しい黄色の衣服をアプとズコに手渡します。
「改めて言うことでもないが、お前たちはホサピだということをいっときも忘れないように」
「ハイ、誰からも怪しまれないように気をつけます」
「私も、周りにいるホサピたちと同じように行動します」
二人は、主人に忠誠を尽くす態度を全身に滲ませ、素直に答えます。そして、先ずズコが脇の廊下に回り込み、黄色い服に着替えを済ませ、次いでアプがハウスキーパーの服に着替えてきました。
「ヨーシ、その恰好であれば普通のホサピと見分けはつかん。ワシがここに来る機会は少なくなるが、二人とも心を引き締めて、しっかりトレーニングを積むこと。分かったな！」
「ハイ、それでは行ってまいります」
二人は元気に挨拶をして、理事長室の駐車場を出ました。
増産施設の入り口にある装置で顔認証を受けて、アプとズコは施設の中に入りました。横長の窓がある研究所に沿って前進し、突き当りの妊婦棟の前で右に曲がります。授産所や周産期棟、去勢処置室の前

を通り抜け、乳児棟や幼児棟が建ち並ぶ広大な敷地にやってきました。
「一応、乳児棟から覗いてみる?」
ズコが、アプに問い掛けます。
「そうね、普通のホサピと同じように」とアプが答え、二人は乳児棟に入りました。
建物の中は春先とまったく変わらず、ベビーベッドがフロアの奥まで綿々と連なっています。そして、赤ちゃんの蝉しぐれに似た鳴き声の中で、黄色い服を着たハウスキーパーたちが忙しく働いていました。
アプとズコは、入り口付近のベッドを幾つか覗き込み、すぐに外に出ました。その次は一歳児の棟を、さらに二歳児の棟を覗いてみます。しかし、幼い子たちの面倒をみる気は端からありません。二人は申し訳程度に幼児たちと接して、目的の三歳児の棟に向かいます。
入り口のドアを開けると、そこは広い体育館に灰色の絨毯を敷き詰めたような建物でした。フロアの中ほどには背の低いテーブルが幾つも並び、それらの上に玩具を広げて遊ぶ子、絨毯にごろりと転がる子、鬼ごっこをしているのか、盛んに走り回る子などさまざまです。左右の壁際には斜度が三十度くらいのスロープがあって、スロープの斜面には無数の穴が開いています。その穴に潜り込んで、頭だけを出している子も見受けられます。
アプとズコは靴を脱いでフロアにあがり、近くの子供たちと遊びます。女の子が一人、アプに近づき、両手を差し出したアプに体を預けてきました。アプは女の子を抱いて、耳たぶの後ろを調べます。そこには、IC2412.12.05.07という刺青が刻まれていました。
「ズコ、この子は今月の五日が誕生日で、もうすぐ三歳になるわ」
「そうかい、こちらの男の子も十二月十四日で三歳だ」
ズコも、膝にぶつかってきた男の子の耳たぶをかきあげ、誕生日を確かめました。
「ここにいる子はすべて十二月生まれ。ということは、幼児棟のローテーションはきちんと守られている」
ズコは眼を輝かせて、アプに話し掛けます。
「そうすると隣の建物には十一月生まれの子、**の**組の子供たちがいる、ということになるわね」
アプも興奮気味にそう言うと、抱いていた女の子を床にそっと下ろします。二人はフロアに群がる幼子たちの間をゆっくり進んで、突き当りの壁際までやって来ました。その壁のほぼ中央に次の建物への引き戸があります。アプとズコは引き戸の留め金を外して、左右の把っ手を握ります。そして力一杯引き開け、の組の建物に飛び込みました。次の瞬間、沢山の子たちがワッと駆け寄ってくることを期待して。

しかし、駆け寄ってくる子は一人もいません。駆け寄るどころか、アプとズコをまったく無視して遊びに夢中です。拍子抜けした二人はその場に立ちつくして互に顔を見合わせます。

「この子たちは何も覚えていない！　春までのことは、みんな忘れてしまったんだー」

ズコが大声を上げて嘆きます。

「ズコ、そんなに大きな声を出さないで。幼い子は覚えるのも早いけど、忘れるのも早いんだから」

アプが、ズコを慰めるように言いました。

「それにしてもずいぶん大きくなったねぇ、僕らにも見分けがつかないほど成長したよ」

ズコはそう言いながら、絨毯の上で遊ぶ子の一人ひとりを見回って歩きます。

「あっ、アイノちゃん！　このグループで一番先に生まれたアイノちゃん。僕はズコ、ズコですよ。もう忘れちゃった？」

ズコは、しっかり印象が残っている女の子を抱き上げ、耳たぶの後ろを確認しました。そこには、IC2412.11.01.01 の刺青がくっきり刻まれています。

「間違いない、君はアイノ、アイノちゃんです。僕はズコ。そしてこちらのお姉さんはアプですよ」

ズコは女の子を抱いて、アプのところに連れて行きます。

「あら、アイノちゃん！　ずいぶん大きくなったわね。私はアプ、アプですよ」

しかし、アイノはきょとんとした顔つきで、何の反応も示しません。急に抱き上げられたうえ、二人から大声を掛けられ、いまにも泣き出しそうです。

「ごめんね、アイノちゃん。お友達と元気に遊ぼうね」

ズコは無理強いをしないで、嫌がるアイノを床に下ろしました。ズコもアプも、春先までの親しい思いは帳消しにして、見覚えのある幼子たちを探します。そして、この子は確か……、と思う子らを抱き上げたり、膝をついて目線を合わせたりして、初対面の挨拶からやり直します。

「わたしはアプよ、あなたのお名前はユキノ。これから仲良しになりましょうね」

「君の名前はマリノです、僕はズコ、ズコだよ。マリノちゃん、これから仲良く遊ぼう」

瞬く間に一時間が経ちました。アプとズコはそれぞれ二、三十人の幼児とお話をしたでしょうか。その数は定かではありませんが、初対

面の挨拶には時間が掛かります。また、警戒心が強い子は、アプとズコが近付くだけで逃げ出してしまいます。

ズコはそのような作業に疲れ、近くにいたアプに声を掛けます。

「すっかり当てが外れてしまったね」

「そうね、今までのことが水の泡のようだわ」

アプも、落胆と疲労感を隠さずに答えました。

「次の建物は**お**組だけど、どうする？」

「どんな様子か覗くだけでもいいから、行ってみましょうよ」

アプもそう言って立ち上がり、二人は隣の建物の引き戸を開けます。**お**組の中には二人のことを覚えている子がいるのでは、という淡い希望を抱きながら。しかし、結果は同じで、誰ひとりアプとズコのことを覚えている子はいませんでした。

翌日は九月生まれの**せ**組の建物に行ってみましたが、やはりアプとズコの顔はすっかり忘れ去られていました。二人は落ち込んだ気持ちを奮い立たせて、おびただしい幼子たちを相手に初対面の挨拶からやり直します。そのような作業を繰り返すうちに年が明けて、一月も半ばを迎えました。

「人数が多くて大変だったけど、やっと顔と名前が一致してきたわ。ズコはどう？」

「うん、人の子は表情が豊かで言葉も多いからホサピとの見分けは簡単だけど、全員の名前まではちょっと……」

「そうだわね、完全一致にはもう少し時間が掛かるかも」

「でも、挨拶と名前の繰返しだけではどうかなぁ？　何か意味のある、もっと役に立つことを教えたいな」

「そうねえ、何か大切なことはないかしら……」

「そういえば源蔵さんと千佳さんは、子供たちに教える戒めというか規範を作ろうと言ったよね。それで苦心して七つの規範を作り上げた」

「そうよ、だけど三歳の子たちにはまだ早いわ。どれもみんな、むずかしいことばかりで」

「そうかなあ、規範の一番は殺してはいけません。これはちょっとムリかな。二番目は……、いつも仲良くしているからいまは必要ナシだろうな。三番目は……、もう少し大きくならないと神や信仰は理解不能か。四番目は人間らしく生きることと教育だけど、教育は僕らがしっかりやればいいことだし」

そこでズコは口を噤(つぐ)み、一呼吸置きます。

「五番目は暴力の禁止で、六番目は盗んではなりません。七番目が偽証と詐欺をしてはいけません」

アプが代わって、規範の五番目から先を暗唱しました。

「暴力？　そうか、暴力の禁止だ！」
アプの言葉に触発されて、ズコが小声で叫びました。
「暴力ですって！　それを三歳の子供に？」
「そう、暴力の禁止だよ。アプ、よく考えてみて。ホサピって何なの？何のために作られた？」
「それはおとなしくて使いやすいから、イカタック星人に反抗するとか危害を加える心配がないから、でしょう」
「そう、ホサピは他者を攻撃したり、他者に歯向かったりすることはしない。だけど、人間の子たちは？」
「喧嘩をして、友だちを叩いたり虐めたりすることがよくある、というより喧嘩は日常茶飯事でしょうね」
「だから、放ってはおけないんだ。ホサピではないことがばれてしまうかも知れないから」
「そうかぁ、だったらおとなしいウサギのポーズだけでなく、イカタック星人がいない所でも暴力はいけないっていうことを教えましょうよ」
「そうだね。まずは何時ものパフォーマンスをやって、そのあとに教えてみようか」
二人は、当面の目標を見つけだすと、さっそく行動に移しました。
以前使用した絵は増産所を離れるときにすべて処分したので、イカタック星人のお面と洋ダル、ウサギの絵をクレパスで丁寧に描き直します。何度も描いてきたので、仕上がりの色や形は本物そっくりです。宿舎で描いたそれらを二人はランニングシャツの下に忍ばせ、増産所の建物に持ち込みます。
の組の建物に入った二人は、広い建物の隅でパフォーマンスの準備に取り掛かります。昨夜仕上げた小道具を黄色い服の下からそっと取り出しました。そしてアプは建物の隅で飛んだり跳ねたりのダンスを、ズコは入口の方にゆっくり離れて行きます。一ヶ月半の取り組みで、近くにいる幼子たちが集ってきました。ホサピの子は見向きもしませんが、人間の子たちは機敏に反応するのです。それらの愛おしい子たちに笑顔を振りまきながらアプは楽しげにダンスを続けます。
一方ズコは、壁に沿って十メートルほど入口側に遠ざかると、イカタック星人を模した面と装束を身に着けます。そして、膝をついてアプの方ににじり寄って行きました。アプは、イカタック星人に扮したズコが数メートルに近づいてくると、「ババババババ、ババババババッ」と警告音を発しながらダンスを止めました。そして足もとに置いたウサギの大きな絵を背負って床に腹ばいになります。「ババババババ、ババババババッ」と鋭く叫びながら。

ズコが、ウサギに扮したアプのすぐ近くまでやってきました。アプは、警告音を止めて床に蹲(うずくま)ります。近くにいた幼子たちもみんなアプを真似てウサギのポーズです。そのひれ伏した姿を見下ろしながら、ズコが怖い声で叫びます。

「悪い子はいないか！　悪い子は懲(こ)らしめてやるからなー」

建物の隅に集まった数十人の幼子たちが床にひれ伏しています。それをぐるりと一回転して見渡したズコは、入口の方に膝をにじらせて去って行きました。その距離が数メートルを超えたとき、アプが「ググググ、ググググ」と安全を知らせる合図を始めます。すぐ近くにいた子も真似をして、「ググググ、ググググ」と声を出します。安全の合図が幼子たちに伝わっていく中で、アプはウサギの絵を背中から取り外して立ち上がりました。そして再び楽しいダンスを踊り始めます。

ズコがイカタック星人の扮装を解いて、アプの近くに戻ってきました。数十人の幼子たちがアプを真似てぎこちなく踊っています。ズコはアプに目配せをして、ダンスを止めさせました。そして建物の隅にアプと並び立ち、幼子たちに話し掛けます。

「よい子の皆さーん、今日はよくできましたね。ズコ兄さんはとても感心しました。これからもババババッ、が聞こえたときにはウサギさんになりましょう。おとなしいウサギさんはじっとしていて動きませんね。そして、ググググッという声が聞こえてくるまでは、じっとしているのですよ。ググググッという声が聞こえてきたらもう大丈夫。安心して元気に遊びましょう！　分かりましたね」

ズコに続いてアプが口を開きます。

「今日はアプ姉さんから新しいお話をします。よーく聞いてくださいね。よい子の皆さんはお友達を傷つけるようなことはしません。例えばお友達を叩いたり、蹴ったり、物を投げつけたり、そのようなことは絶対にしてはいけません。分かりましたかー」

「はーい」という可愛らしい声が返ってきます。

「それでは今日のお遊びはこれでおしまい、さようならー」

建物の隅を輪になって取り囲む幼子たちに別れを告げて、アプとズコは次のパフォーマンスに向かいました。

ある日、**せ**組の建物の隅でパフォーマンスを終えた時のことです。ズコが危険を知らせるババババッと安全の合図ググググッの確認をして、アプが引続き叩いたり蹴ったりしてはいけないことを教えます。そして、「分かりましたねー」と声を掛けると、近くにいた背の低い女の子がぽつりと言いました。

「アプ姉さん、押し倒すのはいいの？」

「え！　それって、どういうこと？」
「あのね、体の大きい男の子で、私やお友達を押し倒す子がいるの」
「それはダメ、駄目ですよ。お友達を押し倒したり、馬乗りになって押さえつけたりすることもいけません」
「アプ姉さんが言うように、よい子の皆さんは乱暴なことをしてはいけません。喧嘩もしては駄目ですよ」
　ズコが続けて注意をします。
「よい子の皆さんは、自分がされたら嫌だなぁ、と思うことはしないようにしようね、そしていつも仲良くしましょう」
　幼子たちが返事をしたり手を挙げたり小さく頷くのを見届け、アプとズコは次のパフォーマンスに向かいます。

　瞬く間にときが過ぎて、彼岸が近付いてきました。アプとズコの冬季トレーニングもあと一週間と少しになりました。
「子供たちとやっと仲良しになれたのに、もうすぐ終わりだね」
　宿舎を飛び出したズコが、隣を走るアプに話し掛けます。
「乱暴や喧嘩はいけないっていうことがせっかく身についてきたのに、もったいないな」
「ウン、もったいないし、喧嘩で怪我をする子が出てきたときが心配だよ。すべてが台無しになってしまうから」
「そうだわね、とにかく子供たちには喧嘩をしないように、もう一度徹底して教えましょうよ」
「もう一度？　アプ、もう教えることなんてないだろう」
「いいえ、一つだけ残っているわ」
「なに？　いったい何が？」
「ホサピたちの真似をすること」
「ホサピの真似？」
「そうよ、例えばせ組の建物には私たちの仲間がいっぱいいるけど、その数はせいぜい三分の一に過ぎないわ。建物内の大多数はホサピ、いつもおとなしくてニコニコ笑っているホサピの子たちよ」
「そうか、建物内の七割近くはホサピなんだ。だからそのホサピを手本にすればいいという訳か」
「そうなのよ、ズコ。あと何日もないけど、子供たちにホサピの真似をするように教えましょうよ」
　二人は増産所に着くと、黄色い服に着替えて施設の中に入りました。そして、**の**組の建物の隅でパフォーマンスの準備に取り掛かります。親しくなった人間の子たちが次々に集まってきました。その数十人の

子たちを相手に、寸劇に似たパフォーマンスを手短に済ませ、アプたち二人はお話を始めます。
「よい子の皆さん、今日もよくできましたね、とても立派でした。ところで、アプ姉さんと僕はもうすぐここから出て行きます。遠いところでお仕事をして、また冬になったらここに戻ってきます。それまでに皆さんにしっかり守ってほしいことがありますので、これからアプ姉さんに言ってもらいます」
「はーい、よい子の皆さん、よく聞いてね。皆さんはズコ兄さんや私の仲間です、兄弟と言ってもいいくらいですね。でも、本当はね、ホサピの子なんですよ。だからここに集まっては来ないお友達、ほら、ちょっと後ろを向いてみて」
そう言って、アプは幼子たちを振り向かせ、絨毯の上に寝転がったりぎこちなく歩いたりしている子を指さします。
「あのおとなしい子たちが本当のホサピの姿なの。ここにいるみんなもやさしくておとなしいホサピだから、あの子たちの真似をしてください」
「どうして？　あの子たちとは遊んでも詰まんないよ」
言葉の発達が早いサトノという女の子がアプに訊きました。
「そうね、詰まらなくてもあの子たちの真似をすることが大事よ。もし、イカタック星人が近付いてきたら、サトノちゃんは何て言うの？」
「ババババッって言うの、そしてウサギさんよ」
「そうね、ウサギさんはじっとしていて動かないわよね。それはねぇ、サトノちゃんもホサピになって、じっと動かないようにしようねっていうことなの」
「フーン、困ったときはウサギになればいい？」
「そうよ、どうしたらよいか分からないときには周りにいるホサピのお友達の真似をすること、分かった」
「はーい」と返事をしたサトノは、アプたちの言うことが少しだけ理解できたようです。
アプとズコはすぐに場所を変え建物を変えてパフォーマンスとお話を続けます。二人は三月の末にパーリオの屋敷に移動する日まで、時間を惜しんで幼子たちにホサピの真似をすることを説いて回りました。
冬枯れの木立がどこまでも続いています。四月といっても北国に春が訪れるは遅くて、咲く花もなければ緑もありません。アプとズコが谷川の畔まで走ってきて一息入れたときです。日当たりのよい土手に緑の塊が点々と散らばっていました。
「ズコ、フキノトウよ！」

「本当だ、いっぱい芽吹いている！」
「これを摘んで、源蔵さんたちへのお土産にしない」
「うん、地底で暮らす源蔵さんたち、きっと喜ぶだろうな」
二人は幾つかのドングリ型の蕾を土手から掘り出して、ウェストポーチの隙間に詰め込みました。
地底湖の先にあるリビングでは何時ものように源蔵が待っていました。アプとズコは、再会の挨拶を交わしながら先ほど摘んだフキノトウを取り出します。
「ほう、これは早春のシンボルだな。それにしても凄い臭いだ！」
「あれっ、源蔵さんは初めてですか？」
「ウム、ディスプレイで画像は見慣れているが、実物はね」
「そうかあ、源蔵さんたちは臭いをかいだことがないんだ！」
「ウム、生まれてからずっと、洞窟の中だけじゃからな」
「私たちは家畜の身分だけど、源蔵さんや千佳さんに比べれば幸せかも知れないわね」
「ああ、青空の下を自由に駆け巡れることは人間として、生き物として本当に幸せなことだと思うが、我々にはそれがな」
「でも、近い将来にきっと。僕らがその世界を作り出します」
「ああ、大いに期待しているよ、眼の黒いうちに外の空気を存分に吸ってみたい」
「私たち頑張るから、源蔵さんたちも長生きをしてくださいね」
「ああ、そうしよう。ところで増産所の子たちは順調かな？」
「はい、大きくなって、とても元気です。でも、しばらく会わなかった間に私たちのことをすっかり忘れてしまって、元に戻すのに一ヶ月半もかかったのよ」
アプが、返事に少しばかり悔しさを滲ませました。
「そうか、ブランクがちょっと長過ぎたかな」
「ハイ、長過ぎますね。でも慣れてきたら僕らの言うことをよく聞いてくれるし、理解力もかなり上がっています」
「そうか、それで教育の方は？」
「ここで作った七つの規範のことですね。とても悩みましたが、六番目の暴力の禁止から教えることにしました」
「ホウ、暴力の禁止ねえ。そこから始めた理由は？」
源蔵の質問に、ズコが自信たっぷりに答えます。
「ホサピはおとなしくて喧嘩はしない。もちろん暴力行為もしないでしょう。ところが人間の子たちは喧嘩をしたり……。もし怪我をするような子が出たときには大ごとになるから」
「それに、困ったときには周囲のホサピの真似をするように教え込み

ました。私たちが増産所を離れる直前に」
「なるほど、それは適切な判断と行動でしたな、良いですよ」
源蔵は、アプとズコを褒めます。そこに千佳が入ってきました。彼女は研究の合間にリビングを覗いて、アプとズコが帰ってくるのを心待ちにしていたのです。
「アプとズコ、お帰りなさい。二人とも元気そうね」
「ただ今戻りました。千佳さん、これ、何か分かります？」
アプとズコはテーブルに載せたお土産を指さして訊きます。
「フキノトウだわ、もう外は芽吹きが始まったのかしら？」
「いえ、まだ灰色の世界です。その中で日当たりのよい土手にこれが」
「そうなの、それにしてもすごい香り」
「そうか、色や形は分かっても、臭いは別か」
ズコが新しい発見をしたという顔つきで言います。
「そうなのよ、私たちはディスプレイでいろいろな図柄や風景は見ているけど、臭いや香りは知ることができないの」
「だったら、これからも野の花やいろいろなものを摘んできますよ」
「有難う、ズコ。あなたたちが来てくれると毎日がとても新鮮だわ」
「僕らもここに来るのが楽しみです。いろいろなことが勉強できるし、何といっても心が安らぎます」
「そうだわね、私もできるだけこちらに来るようにしましょうね」
「ということは、研究が一段落したということ？」
「そうね、山場は過ぎたわね。これからはイカタック星人に対する殺傷能力を高めるような応用研究に入るわ」
「そうですか、早く完成するといいですね」
そのような会話をしているうちに帰りの時間が迫ってきました。アプとズコは老夫妻に別れの挨拶をして、洞窟を後にしました。

次に地底湖のある洞窟を訪ねたとき、リビングで二人を迎えた源蔵にズコが問い掛けます。
「このあいだは褒めて頂いて嬉しかったですが、増産所の子たちの教育を考えると不安がいっぱいです。規範の最初の殺してはならない……は、暴力の禁止を徹底してゆけば辿り着く問題だと思いますが」
ズコは、源蔵に増産所での悩みを打ち明けます。
「とくに三番目の神を信じることは大切です。但し……、が難題ですね。まず、教える僕らが神のことをよく理解できませんし、ほかにも信仰とか異宗とか異宗派とか、腑に落ちないことばかりです」
「そうなのよ、私も三番目はどのように教えたらいいものか、皆目、

見当がつきません」
アプも、ズコと同じ悩みを打ち明けました。
「そうか、宗教の問題は抽象的で何を教えたらいいのか分からない、ということかな？」
「はい、年端のいかない幼子を相手に、自分でも良く分からないことを教えることは不可能かと……」
アプもズコも困り果てた表情です。
「そうか。では、こうすることはどうだろう」
源蔵は一度口をつぐんだ後で、力強く切り出しました。
「この洞窟の中で作り上げた七つの規範を、これからは『教典』と呼ぶことにしよう。正確には、『アプとズコの七つの教典』、短縮すれば、『ＡＺの教典』と言うことになる」
「そんな！　無茶ですよ」
アプとズコが、声を揃えて叫びました。
「いいや、昨年の春先から晩秋まで、ここで苦心して作った戒めや規範は何のために作った？　それはこれから創造される人間の社会が永遠に栄えて、決して滅びることがないように、という強い願望や祈りに根差している、そうではなかったかな？」
アプとズコは揃ってコクリと頷きます。
「その祈りや切なる願いは神の声であり、その声を信じて守り抜くことが信仰そのものなのだ」
源蔵の声は、どこかお告げに似ていて、威厳に満ちたものでした。アプとズコはテーブルの上で両手を組んで、頭を垂れて聞き入ります。
「結論として、君たちが悩んでいる問題は、ＡＺの教典を子供たちに徹底して教え込めばよいことになる。決して難しいことではない」
そう言い終えると、源蔵も祈るように両手を組んで、静かに眼を瞑りました。
「そうかぁ、まず僕らが規範、いや経典をしっかり理解して、自信をもって幼子たちに教え込む」
「そうすれば、ＡＺの経典は幼子たちの血となり肉となり、やがて生涯忘れることのない信仰になっていくわけね」
アプとズコは、自分自身に言い聞かせるように呟きました。
「その通りだよ、アプとズコ。決して難しく考える必要はない」
源蔵は、二人の眼を交互に見て言い含めます。
「経典のことは分かりました、でも、神とは何ですか？　何処にいるんですか？」
ズコが、素朴な疑問を投げ掛けます。
「神は、人間には見えない次元の違う世界におられる。人間が姿を見

たいとか声を聞きたいと思ってもかなわない超越した存在、ということになっている」

源蔵は、躊躇なくそう言い切りました。

「でもＡＺの経典は私たちの意見を集約したものだし、その中核（コア）は源蔵さん、あなたのものじゃないですか」

アプが、源蔵の眼を見つめて訊きます。

「いや、ワシではない。ワシは神から暗示されたことを適切な言葉に変えてみただけのこと。そのように考えて欲しいな」

「でも、人間には見えないもの、聞こえないものでは納得ができません、しっくり心に納まりません」

ズコが不満をあらわにしました。

「だったらワシが信じている神、自然の山や森、巨木や巨岩など我々に畏怖（いふ）の念を抱かせるものに宿る神、八百万（やおよろず）の神がよろしい」

「日本古来の神道に根差すものですね。日常を超えて、人に畏怖の気持ちや感動、感銘などを与えるものに宿る神々」とズコ。

「そうだ、日本の神道に限らず、古代ギリシャやローマにおいても数え切れないほど多くの神々が信じられていたのだよ」

「そうかぁ、太陽や月、海や川、ありとあらゆるところに神が宿っていて、その神の子として私たちは生まれてきた、と言う訳ね」

「そう、アプの言う通り。神は身近なところにいるのがよろしい」

「でも、源蔵さん、太陽や山川などの自然は何も言いません。それなのに何故、神が七つの言葉を言ったと教えたらいいのですか？」

「ウム、鋭い指摘だな。神の声は誰にでも聞こえるわけではない。それを聞くことができるのは優れた者、選ばれた者だけだ」

「すぐれた者、選ばれた者、とは誰のことですか？」

「ハハハハハッ、君たち二人のほかに誰かいるのかね？」

「えーッ、そんなー」

アプとズコは揃って大声をあげました。

「君たち二人は神の声を聞いて、それを七つの経典にまとめた者、言い方を変えると預言者ということになる」

「止めてくださいよ！　僕もアプも普通のありふれた少年と少女です。それを預言者だなんて、冗談もほどほどにして下さい」

「気持ちはよく分かる、よく分かるよ。だがな、人の世が平和で秩序正しいものとなるためには民衆に共通の規範や精神基盤が必要になる、それがなければこの世は争いが続き殺戮（さつりく）が絶えない。獣（けだもの）以下の最低の世になり下がってしまう」

「だから源蔵さんは、私たちが神の声を伝える預言者となって、秩序正しい平和な世の中を作れ、と言うわけですね」

「そうだよ、ほかに伝える人がいないんだから諦めるしかないね」
源蔵は、突き放す口調で言います。
「分かりました、新世界ができたらそこの精神基盤はＡＺの経典で、それを伝える者はアプと僕ということですね」
「ウム、君たちにとっては荷が重いとは思うけど、新世界の創造には欠かせない役割だ」
アプとズコは、神妙に頷きます。
「しかし、あまり意識する必要はないと思うよ、いま始めた幼子たちへの教育をこれからも続けてゆけば、君たちは必ず彼らにとって絶対的な存在になるから」
源蔵は表情を緩めて、楽観的な見通しを口にしました。アプとズコは、源蔵の言うことに納得はできません。しかし、そんな具合にことは運ぶのかなぁ……、と漠然とした未来を予感しながら、熱い討議を終わりにしました。

〈以下、次号〉

文芸『草の丘』の表紙について

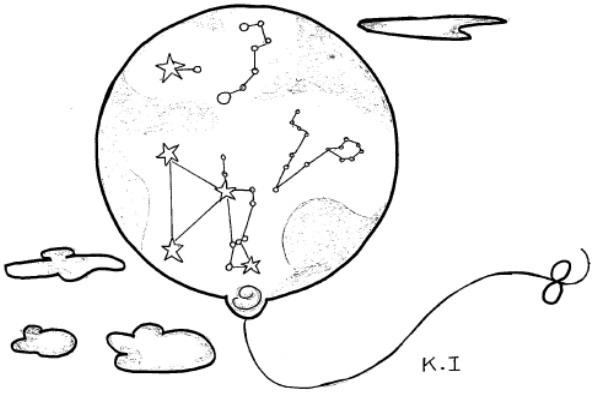
本誌は、創刊号から八号まで、表紙に一貫して草の丘の写真を掲載してきた。『表紙は草の丘』という取り決めがあるわけではないが、発行の時期が近づくと、カメラを手に草の丘を探して歩く。潤沢な緑に包まれた印西市とその周辺には、草の生えた丘は幾らでもあるように思われるが、実際には殆ど見当たらない。山と森、それに丈の高い夏草の草原はあるものの、それは荒涼とした原野に近く、とても絵にはならない。車で逡巡した末に、行き着く先は決まって印西市のほぼ中央に位置する『牧之原公園』の巨大な丘である。
この芝生に覆われた楕円の丘は、東西に百メートル、南北に百五十メートルもあり、巨大な古墳を連想させる。そして、丘陵をくまなく覆う芝生は定期的に刈り込まれて、年間を通して美しいたたずまいを保っている。
創刊号はこの丘の枯れ芝に残照、二号は若草色の丘陵等々、その季節の風景をカットして表紙に用いてきた。ただ、四号（二〇一三年六月発行）の表紙だけは、本土最西端の地、神崎鼻公園（佐世保市）の写真を用いている。今後も草の丘を求めて渉猟することになるが、良い丘を知っていたら是非、教えていただきたい。

（香取　記）

初初(ういうい)しい季節

― 冬の抄 ―

中川　とら



それは、突然の事だった。夕飯が終わりくつろいでいたときだったと思う。父が長次郎の行方を教えてくれたのだ。

「高山さんところの牛は、どうももう居ないようだ。」

「本当？　お父さん、何処へ行ったの？」

「働けなくなった家畜が行くところだよ。」

「それって、どういう所？」

「屠殺場だな。」

「殺されるの？」

「そうだな。」

「どうやって？」

「麻酔を打たれるんだろう。」

「……」

私は茫然として言葉を失った。

「そういう訳だから、朝子ちゃん、もう牛を捜してそこいらをふらふら歩いたりしなさんな。」

「……はい。」

「寂しいだろう？」

兄が優しく言った。私は何も答えられない。

「ああ、そうか　そういう事だったのか。長次郎は屠殺場へ行ったん

だ……　もう会う事はできないんだ……」
悲しいというより寂しいというよりも、もっと大きな喪失感、まるで体から力が抜けていく感じがした。
「長次郎、怖かったでしょう。苦しかったでしょう。高山さんのおじさんはどんな思いだっただろう……」
次第に思いは広がる。思いつめていく私に、
「そういうことだから、分かったネ」
父は念を押した。
「高山さん家の垣根の前には、もう立つまい。だって長次郎はもういないんだから。」
私はぼんやりしていく自分の頭に、何度も何度も言い聞かせた。

しかし、ふらふら歩くなと言われても、それ以来私は、学校の帰り、寄り道しては冬の寒空の下をよく歩いた。長次郎はもういない。だから高山さん家の方へは行かない。
何だか、小川に流れる水の音を聴きたくなった。田ん圃がまだ沢山あった頃、川の水を配水場から引いた小川が流れていた。田植の時季になると水はいっぱいになり、所々に設置した足踏みの給水ポンプを農家の人が踏みつづける。水はザブザブと勢いのいい音をたて汲み上げられ、そして染み込むように田ん圃に入っていく。小川の回りは文字通リ、蓮華やすみれ、タンポポの花盛りだ。
学校の帰り私達はよくこの小川を飛び越えた。まずランドセルと運動靴を向こう岸にほうり投げ、それから思い切り助走して跳ぶ。時々失敗して尻もちをつき、ずぶ濡れになって母にこっぴどく叱られた。めだかや水すましも沢山泳いでいた。
やがて稲刈の頃になると水かさはぐっと減り、水はチョロチョロ遠慮がちに流れる。農家の人の目を盗み足踏みポンプを悪戯して踏むと、中から赤い蝦蟹が顔をだしたりした。それが面白くて、叱られても、叱られても私達は止められない。
でも、今は田ん圃もほとんど無くなって、水門は閉まり小川の水は水たまりの様なもので、既に枯葉の下の土は乾き始めている。分かっていたのに、もしかしてと思った自分が悲しかった。
冷たい風が強く吹くので、赤土グランドの土ぼこりは引っ切りなしに高く舞い上がる。乾いた風景の中をトボトボ歩いていると、心までカサカサ音をたてるようでたまらない。私の好きなものが一つ一つ遠く無くなっていくのはやり切れなかった。

忙しい忙しいと駆けずり回り大掃除を済ませると、家族四人のささ

やかな正月がやって来た。
「今年はいよいよ貴女も中学生です。少し女の子らしく、家の手伝いを進んでして下さい。勉強もしっかりね。一郎は今年で最後です。」
そう言って元旦のお膳を前に、母は兄と私にお年玉をくれた。二つ違いの兄は三年生なる。
「まっ　何よりもまずは健康第一だな。」
いつもと変わらぬ調子で父が言った。
お正月はあまり好きではない。父が年賀状の整理をし、母が三食お餅を焼く。決して大好物と言えない御節料理を三日間食べ続けるのはいささか閉口だ。これと言ってやることも無いので、元旦から私はみかんをほおばり、本を読んでいた。
「三箇日に叱ると一年中叱ってなければならないから、お母さん我慢してるけど朝子ちゃんは今年もお尻に根が生えてるようだわね。」
呆れかえって母が言った。私は聞こえない振りをしていた。
着替えの下着をバスタオルにくるんで、お風呂の支度をした桶に載せ風呂敷に包んだ。
それから綿入れを着、マフラーをして玄関に座って母を待つ。
「もう少し炬燵に入っていたかったな。そうだ宿題があったんだ。行きたくないよー。」
心の中で行きたくないお題目を唱えているうちに、いつも私は柱にもたれ背中を丸くして居眠りを始める。少しすると、
「さっ　行くわよ！　お待ちどう様！」
気合の入った母の声がして目が覚め、私は観念し、頬被りをした母と底冷えのする外へ出て行く。
冬の夜のお風呂は本当に勇気がいた。お風呂屋さんは十五分程歩いて、十三間道路を渡ったところにあった。車が走って人通りのある比較的明るい道路があったのに、母は好んで人気の無いすぐ傍の暗い土手道を選んだ。土手伝いに切らずに残された桜の老木が何本か黒く佇んでいる以外は、ほとんど枯草の道だ。昼間とは様子が違い、どことなく気味悪くさびしい。そのせいもあってだろうか、母は私の手をそっと取り、優しく割烹着を着た脇の下で歩きながら暖めてくれた。見上げる夜空は、冬のプラネタリウムだ。あんまりきれいで思わず立ち止まり、北斗七星や北極星を捜した。向こう岸の川面に、チラチラと明りが映っている。工場の灯だ。残業をする人達だろう。
その隣に、当時まだ木造の大学附属病院があった。病院の前はこちら側と違って暫く桜堤が続いている。
戦前、戦中と結核の療養所だったが、戦後一般診療を行なう総合病

院になった。その頃、まだ結核の患者が居たかどうかは定かでないが、春になると、病院の前の桜堤に寝間着の様な着物姿の人達が花を見に出て来た。

風の強い日、母は小学生の私に決まって、

「いい、朝子ちゃん、今日は土手に行かないでね。」と何度も念を押してから仕事に行った。

母は娘時代に肋膜炎を患い苦しんだ体験があった。微熱が長く続き、寝汗をかき、体が怠く気力が失せて切なかったと私に語った事がある。結婚してからも、産後軽い肋膜炎にかかった。

私がまだ小さかった頃に、御不浄の前にクレゾール液をたらした洗面器が置いてあったのを覚えている。生活のためにやむなく働いていたが、見るからに健康そうという人ではなかった。首から胸にかけて血管が見えるほど透き通った青白い肌で、荒仕事をしている割にしなやかな指のきれいな手をしている。が、爪がいかにも病弱そうに薄く反っていた。そして、疲れ易いことからくるのか癇性な人だった。

途中、川岸の葦原に隠れる様に一艘の舟が止まっているところを通った。明りがついて、中で人が生活しているらしい。身を乗り出し覗こうとする私を、母は腕を引っ張りたしなめた。

中川は昔から輸送船がよく通る。特に大きな製紙工場があったので、資材や燃料を船で運んだ。後に使われなくなった小さな船が、そのまま川岸に置きやられ、やがて訳あってそこを、生活の場とする人もいたらしい。街道に近づくと、母は、時々突拍子もないことをしでかす私を心配してか、決まってこう言った。

「朝子ちゃん、中川は、真ん中が擂り鉢状態になっていてね、とっても深いの。万が一、落ちるような事があったとしたら、それは絶対に助からない。今まで何人も川に落ちた人がいたけど、見つけることはできなかったそうよ。よく覚えておきなさい。」

「そう……」

私は、元気なく返事をしながら、何故母がそんなことを言うのか解せない。「絶対に助からない。」と言い切る母の確信に満ちた言いっぷりに、「はい」とも「分かりました」とも言いたくない、得も言えぬ暗い憂うつを感じていた。

十三間道路はまだ、横断歩道も陸橋もない。私と母は、互いの手をしっかり握り、車がとぎれたのを見とどけ、

「行くわよ！」と言う母の掛け声と共に「カタカタ」と石けん箱の音をたてながら、駆け足で渡った。

母の仕事が休みだった土曜日の午後、珍しく桃ちゃんのおばさんが

訪ねて来た。
「あら、久しぶりだこと」
「忙しいかしら、お邪魔じゃない？」
「いいえ、お上がりなさいな。」
「仕事が一段落したもんだから」
「どうぞ　どうぞ」
火鉢のある部屋に通されたおばさんは、
「口に合うかどうか」
布巾を取って、白菜の漬物とふかしたばかりのさつま芋を母に手渡す。
「そんな気使いいらないのに。かえって悪いわ。」
恐縮しながら母も又、甲斐甲斐しくお茶の支度を始めた。茶筒を開ける音も、急須にお湯を注ぐ音も、久しぶりの友を迎え、心なしか弾んでいる。
遠くの人であれ、近くの人であれ、人が訪ねて来るのは嬉しいものだ。おみやげは言うまでもないが、どこか普段と違う母の表情や、襖の向こうの話しのやり取りに、他所の人の生活のにおいがしたり、子供とは違う大人の感情が感じ取れたりするのが、あたかもラジオドラマを聞くようで面白い。常々、「大人同志の話を、子供が聞くものではありません。お行儀が悪い」と、言われていたけれど、隣の部屋に居れば、聞くとは無しに聞こえてくるのは自然というもので、「仕方無いでしょう」と、私は心の中で思っていた。
話の中心はいつもお客様で、大概母は聞き役に回る。
「ええ　ええ」「まあ　まあ」「成程ね」
あいづちを打っているうち、次第に話は核心に触れていく。すると、「驚いたでしょう」「なかなか　難しい事よね」「こちらの思いが届かないのね」などと、相手の身になってさりげなく気持ちを表す。時々、声が聞こえなくなる時があったが、そんな時は決まって母は、貰い泣きをしていた。
「そうは言っても、世の中そうそう悪い事続きではないはずよ」「ものは考えよう　苦あれば楽あり」「私も人事でないわね」
やがて、笑い声が聞こえて来て、おしゃべりは終わりを迎える。大方、こんな流れだ。
楽しい話よりも、生活や人生の打ち明け話が多かったように思う。だから母は、どんな話も決して他言しなかった。
夕方になっておばさんは、少女のようにほっぺを赤くしのぼせた顔で、部屋から出て来た。私と目が合うと、
「朝子ちゃん、今夜テレビを見に来なさいな。明日は日曜だから、お

母さんに許してもらって。」
私は母の顔を見た。
「夕ご飯を済ませてから、一つだけね。」
「はい」
おばさんは、
「じゃあ　待っているわね」
そう言って、帰って行った。

夜になり、桃ちゃん家にお邪魔すると、おばさんは、あったかい甘酒を作って待っていてくれた。桃ちゃんは、炬燵に入って「リリヤン」を編んでいる。
「こんばんわ」
私が声をかけると、
「朝子ちゃん、いらっしゃい」
手元から目を離さないで返事をした。
「さっきから、こんな物に夢中になってね、ろくに口も利かないのよ。」
そう言いながら、おばさんは「ガチャ　ガチャ」とテレビのチャンネルを回した。
炬燵の上には、お菓子の箱が置いてあって、中には出来上がった「リリヤン」が五、六本並べてある。黄色、赤、みどり、青、紫、原色を中心にした人絹の糸で編んだ筒状の紐は、いかにも艶やかだ。
「きれいでしょう。朝子ちゃん、どれがいいと思う？」
「うーん」
そう聞かれても、私にはどれも同じ様に見えて、よく分からない。それよりも、余りに真剣な桃ちゃんの顔と、よく動く指先に感心して、そちらに見入っていた。暫くすると「始まるわよ」と、おばさんに言われ、テレビの方に顔を向けた。
やっぱり、西部劇だ。開拓期のアメリカらしいテーマ曲が流れ、馬に乗ったカーボイ達が、山間の大草原から現れ、ドラマは始まる。
おばさんが好きな俳優は、何となく分かっていた。若くて、ちょっとやんちゃで、熱血漢のその人は、拳銃さばきも図抜けて、荒野のならず者達をつぎつぎ倒していく。決して負けないヒーローだ。ちょっとハンサムなのもお気に入りの理由に違いない。
愉快極まりない表情で見入っているおばさんには悪かったけれど、何故か私は、西部劇が余り好きではなかった。必ずと言っていい位、決闘があることと、必ずバタバタと人が死ぬことが、悪党どもと言えいやだった。人がこんなに簡単に殺されていくのも不思議な気がしてならない。

やがて、事件が一件落着すると、カーボーイ達は馬に乗り鞭を打ちながら、数え切れない程の牛を集め移動させていく。大きな掛け声と鞭の音、そして牛達の啼き声が、たち上ぼる砂塵の中に湧き上がっていく風景には圧倒される。

自分を癒してくれた、啼く事も動く事も滅多になかった長次郎は、果たして牛だったのかしらんと思えてくる。もしも長次郎がここにいたら、こんな風に啼いていたんだろうか。

時代も国も分からなくなり、そんな事を思っていると、おばさんが振り返り私を見てニッコリ笑った。瞬間、私は「もしかしたら、おばさんは私に牛を見せてくれたのかも知れない。」そう思えた。

「朝子ちゃん、お母さんが心配するから、もう帰った方がいいね。」

「はい。じゃ、桃ちゃん　さよなら」

「うん。おやすみなさい。」

桃ちゃんは、赤くなった目を「リリヤン」から離し、眠そうな小さな声でそう言った。

外は凍てついて道が硬い。おばさんは家の前まで一緒に歩き、別れ際に「一郎ちゃんと分けて食べてね。」と、バナナを二本手に持たせてくれた。

「ありがとうございました。おやすみなさい。」

私は頭を下げ、お礼を言ってから、真暗い庭の中に入った。心の中に暖かいものが込み上げて来た。

六年生の最後の家庭科制作は、文化刺しゅうだった。その日は、二月には珍しい快晴で、空は雲一つなく晴れわたって優しい青をしている。教材が配られ、先生は基本のステッチを教えてくれた。

「説明書通りでなくてもいいですよ。何でも好きなデザイン、できたら六年間の思い出を表すものがいいかもしれませんね。」

一通りのアドバイスを済ませると、ストーブにシャャベルで石炭を注意深くくべながら、付け加えた。

「二時間あるので、なるべく授業中に仕上げましょう。」

私は、後ろの自分の席で図案を考えていた。普段、家庭科は余り気が乗らない。けれど窓際の日差しがポカポカ気持ちいいのと、だまっていられるのが楽で、いつになく真面目に取り組めた。窓の向こうで、何かが動く気配がしたので目をやると、雀が数羽枯木の梢から一斉に飛び立った後だった。電線がゆったりたわんで、陽を受けるのでキラキラ光っている。鉛筆を持った手で頬杖をつき、考えあぐね左手でそっと机を摩った。古くなった木の机は、傷だらけで黒ずんで、けれど柔らかく暖かい木肌の感触が手の平に伝わってくる。

構図は決まった。机と窓にしよう。この場所こそ六年生の唯一すてきな思い出だ。それに直線が多いから、きっと作り易いにちがいない。小さな頭でそう直感した私は少し心弾ませ鉛筆を握った。

教室は次第にしーんと静まりかえって、誰もおしゃべりをしなくなった。先生はストーブの近くで本を読んだり、時々みんなの作業を見てまわっている。私の傍に来た時、暫くじっと立ち止まった。にび色の先生のスカートが右腕の横にぼんやり見えて、微かにインクと紙の混ざった冷たい臭いがした。私は顔を上げず、黙って手を動かし続けた。

窓の枠は、緑がいい。硝子の中には黒い糸で木の枝を入れよう。鳥も飛ばそうかしら。机はこげ茶色の糸で、本を広げて、赤い筆入れを置こう。ああ、時間が足りない。私は糸の色を選びながら、夢中で針を刺し布目をすくった。

先生のことは、とうに忘れていた。ほっぺが、かっかと熱くなってきたので思わず深呼吸をした。

「おー！　すげえ！　金子うまいなー！」

男の子達が、金子君の机を覗き込んで感心の声を上げ出した。

「よく出来ていること。」

先生の声がする。見てみたいと思ったけれど、自分の刺しゅうがまだ出来上がってないのだから「だめだめ　あとで」と言いきかせた。

ベルが鳴り、あっという間に授業は終わって、未完成の人は宿題という事になった。窓を細く開けてから、私は金子君のところへ行った。

「金子君、見せて！」

金子君は照れ笑いしながら、机の上にほぼ仕上がった作品を開けた。

「わぁー　すごい！　きれい！」

白い布地に、鮮やかな濃いピンクの花が二輪、緑の葉っぱの中に咲いている。糸が絵の中をうずめつくしているので、立体的に浮かび上がってまるで本物のようだ。

「金子君　上手！　本当にきれい！」

何度も何度もそう言って、私はうっとり見とれてしまった。隣に座っている森君も嬉しそうに横目を向けてぼそりと言った。

「うまいな」

図書室で、いつもよりゆっくり本を選んでいたので、帰る時間が遅くなってしまった。冬は日の落ちるのが早いから、四時半になると閉門される。校庭で遊んでいる子供も疎らだ。下駄箱の蓋を開け運動靴を取り出し、本を抱えて小走りに外へ出て、驚いた。夕焼けで校庭がオレンジ色に染まっている。夕日の周りの空は燃えたように朱く、遠

く風に流された雲が幾つものシルエットをつくって、それはもう、きれいを通り越し壮大な絵画のようだ。
足を止め、暫く感動して、私は空を見上げていた。
「吉野――！」
誰かが自分を呼んでいる声がした。が、振り返ってもそれらしき人は、分からない。
「吉野――！　こっちだ！」
鉄棒のある方から聞こえて来る。森君だ。
「かばん　置けー！」
森君の足下には、ドッジボールがあった。私は言われる通り慌てて、ランドセルと本をその場に置いた。
「いいか！　行くぞー！」
森君が足を大きく後に振ってボールを蹴った。ボールは、ものすごい速さでこちらに向かってくる。しかし、屁っぴり腰で構えていた私を、いともたやすくすり抜けて行ってしまった。慌てて追い掛け、ボールを持って突っ立っていると、森君は怒鳴るように言った。
「投げるんじゃない！　思いっ切り蹴ろ！」
言われた通りにすると、勢いのないボールはそろそろと転がっていく。森君は近寄って、それを足で止め、今度は方向を変え、
「金子、行くぞー！」と、言った。よく見ると、校門の近くに金子君がいた。足を少し開き、じっと相手の足下を見ている。ボールは金子君の足に捕らえられ、森君に返された。
「吉野、ほら、行くぞ」
距離が縮まり、スピードが緩められたので、今度は失敗しなかった。
「金子に回せ！」
「はい！」
私は金子君の位置を確認し、ボールを蹴った。金子君は、森君にパスした。
要領が分かってくると、三人は三様に走りながら、森君、私、金子君とクルクルボールを蹴ってパスした。
その内、時々森君は金子君に、
「吉野に回せ！」と言ったり、思い切り遠くにキックしたが、金子君は一所懸命それを追い掛け、鼻水を手の甲で拭き拭き応戦する。「アー」とか「ヒュー」とか、今まで聞いたことのない金子君の高い声に、なんだか可笑しさが込み上げてくる。
やがて、私は息が上がり疲れ果て、しゃがみこんでしまった。すると、森君がボールを手に歩き始め、キックボールは終わった。二人共笑いながらハァーハァーと息を切らして、その場に寝転んでしまった。

空はいつの間にか日が沈みかかり、赤黒くなっている。
けれど、何とも言えず爽快な気分に、私達は顔を見合わせてはニコニコ笑っていた。
“トロイメライ”が流れ始めたので、ランドセルを背負った。
「じゃな」
「さようなら」
疲れた足を引きずり校門を出ると、三人は各々違う方向へ帰って行った。
その晩は、母とお風呂に行きぐっすりと休んだが、翌日から私は具合が悪くなった。
朝になると、体中の節々が痛く、全身がだるくてたまらない。布団から起き上がることが出来ない。母は心配し、体温計を持って来て熱を測った。
「三十八度　風邪ひいたのかしらね……　お母さん、お昼で帰るから、今日は学校休みなさい。桃ちゃんにお願いしてくるから。」
食事をしていた父も顔を出し、私を見て、
「様子をみたらいい。」と、母に言った。
「何、熱あるの？　本の読み過ぎじゃない？」
隣の部屋で御飯をかけこみながら兄が言うと、
「ばかな事言って！」
母は怒った。
みんなが出ていった後、私は喉が渇き、隣の部屋へ這って行き、火鉢にかけてあるやかんの湯を湯飲みに注いだ。火が消えて、お湯は冷めていたので気持ちよく喉を通っていく。けれどお膳の上に残された物は、何も食べたくない。そのまま布団の中で、だるい体に耐え、熱くなってきた目をつむっていた。
お昼になる前に、母は帰って来た。傍に来ると、
「あー、朝子ちゃん、発疹が出てきてるわ。これはひょっとすると、麻疹かもしれないわ」
そう呟きながら、体のあちこちを確認している。
夕方いつもより早めに帰って来た父も、
「そうだな」と、言った。熱は更に高くなり三十九度近くになった。
翌朝父は仕事を休み、
「大きくなってからの麻疹は怖いから、風にあてないように。」と、頭から足元まで目だけ残して、しっかり病人の身繕いをさせ、六年生の私をおぶい紐でおんぶして自転車に乗った。病院は駅の向こう側だ。母が見送り、出発しようとした時、桃ちゃんが血相を変えてやって来た。私の出で立ちを見て、よけいに驚いたらしく、

「朝子ちゃん、どうしたの！　大丈夫？」
そう言いながら半べそをかいている。自転車が走り始めると、
「朝子ちゃん　朝子ちゃーん」
泣きながら追い掛けて来た。おばさんが、
「大丈夫よ！　桃ちゃん、病院へ行くんだから、大丈夫。」と、後を追い掛ける。何事が起きたのかと、近所の人達が出て来た。
父の背に背負われ、私は恥ずかしさもなく目をつむりぐたっりしていた。時々、ガタン、ガタンと自転車の振動が、父の背からお腹に伝わってくる。
「矢田橋、踏切、赤土グランド、畑、石井製作所、もんじゃ屋、魚屋の魚政……」
朦朧としている頭の中で、通り過ぎて行くだろうそれらの場所を、今はあそこかしら、この次は……と想像していた。
診察の結果は、やはり麻疹だった。医師は、
「安静にして、しっかり治るまでは学校には行けません。」と、薬を処方してくれた。
それから三、四日、母は仕事を休んでくれ、お粥をつくり、りんごを摺ったり、滅多にしないだしの利いた吸い物を時間をかけつくってくれたりした。
先生には、感染(うつ)るのでお友達にはお手紙もお見舞いも、お気付かいのないように、と欠席届といっしょにしたため桃ちゃんにお願いしてあったので、誰も訪ねて来ない。
辛い日が過ぎると、一日中、食べて寝るだけの静かな時間が流れていく。
少しずつ力が付いてきて、本を読みたくなったが、母から堅く禁じられていたし、学校に行かないので読む本も無かった。卒業式の練習が、きっと始まっているだろう。天井の染みも畳の目も、もう見飽きた。午後になると、母は炬燵で居眠りを始め、夕方になると、垣根の向こうから近所の子供達の声が聞こえてくる。「子供は風の子」と言うが、こんな寒い時季でも、みんな相変わらず元気のいい声だ。病気になって始めて感じる羨ましさだった。
発疹が引き始め、母は又仕事に出なければならない。
「まだまだ治ってないんだから、くれぐれも布団から出ないように。治り際が大事なんですから、油断をするとぶり返し、取り返しのつかない事になりますよ。分かったわね。お母さんの言う事を、いつものようにいい加減に聞いていると、『後悔先に立たず』という事になります。いいわね、朝子ちゃん。」
丁寧語の説教がいつものように長々と続いて、私は最後に小さな声

で、

「はい」と言った。

一人でぼんやり布団の中にいると、いろいろな音が聞こえてくるものだ。人の歩く音、どこかで戸を開ける音、猫の鳴く声、おばさんが洗濯物を干す音、人の話し声、自転車の走るタイヤの音、鳥が枝を渡る音、囀る声、風が硝子戸に触れていく音、草木の中で枯葉がすれ合う音……深とした空気の中に、音にならない音さえしている気がする。

そしてそれらは、動いているというより、通り過ぎていくように聞こえてくるのだ。窓硝子の向こうからやって来る冬の陽射しに包まれていると、いつか自分もどこか遠くへ行ってしまうような不思議な感覚だ。私は、思わず寝返りをうった。

「どうだい？　朝子ちゃん、体の方は」

仕事から帰って来た父が、襖を開け様子を伺いながら入って来た。

「うん」

私は父を見上げた。

「あと一息ってとこかな」

そう言いながら布団の傍に座り、父は、

「美味しいものを買って来た」と、言った。みかんの缶詰がお盆の上に載っている。

「起きられるかい」

「はい」

布団の上の綿入れを、そっと背中に掛けてくれながら、

「冷たくて美味しいよ」

手渡されたそれは、母が大切にしているアメジスト色の江戸切り子小鉢の中で、しっとり汁に濡れ、金毛臭いみかんの香りを放っている。口に入れると、皮の付いていないひんやりと甘いみかんは、渇いた喉を少しずつ潤し、まだ私が治りかけの病人である事を再認識させているように思える。

食べ終わると父は布団を掛けてくれ、隣で夕刊を広げ読み始めた。久々に気持ちがよくて、私は手足を伸ばし大きく大きく深呼吸した。

「世の中が、変わっていくな。もうすぐ、人が月に行く時代が来るよ。」

「変わるって、今あるものが無くなるってこと？」

「いや、そうとばかりは限らないだろう。不便なもの、滞っているもの、未開発のものが、科学や経済の力で発展していくんだよ」

「誰がそれを望んでいるの。変わらないでいると、大変なことになるの？」

「誰がと言うより、自然の摂理だ。人間の欲望や探究心も留まることを知らないからな。」
何やら、学校の先生が話しているようだ。
「生きていく、ということは、良くも悪くも変わっていくということだろう。」
「ふーん」
話は段々漠然として難しくなっていく。私は、昨日体験した不思議な感覚を思い出していた。
「お父さんは、戦争に行かなかったんでしょう。」
「ああ」
「だったら、戦争の本当の怖さはしらないでしょう?」
「……そうだな。戦地に行った人のようには分かないだろう。……本で読んだのか。」
「うん。沢山の人が死んだんでしょう?」
「そうだな。お父さんも弟を亡くした。」
「弟がいたの?」
「ああ、健康で学業優秀な家族自慢の弟だった。」
「そう……悲しいね」
「朝子ちゃん」
父は、急に声を変えて真顔でゆっくり話し始めた。
「これからの世の中は、刻一刻変わっていく。その速さも、今までの比ではないだろうよ。必要があって変化していくものもあるが、必要もないのに変えられていくものもあるかもしれない。時には、心ならずも失っていくものもあるだろう。しかし、それに流されて、悲しむだけだったり、自分を見失ってはいけない。
変化していく時代の中にも、変わらないもの、変えてはいけない大切なものは確かにある。それは、自分の目で見つけ、勝ち取るものだ。まだ小さくて、よく分からないだろうがな。覚えておいてくれればいい。
おまえには、弱い者を大事にしようとする思いやりの心がある。正しいと思ったことを曲げない意地もあるな。それは、素晴らしい個性だ。お父さんの誇りだよ。
大きくなったら、心で感じることを言葉に表していくことが大事だな。そうでないと、人は理解できないからな。」
「そうなれるかな。」
「なれるさ。人間は成長していくものだ。今は、大切だと思うことを沢山心にもっていれば、そうして生きていけば、それが出来るようになる。お父さんもお母さんも、いつかはいなくなる。けれど、いつま

でも、お前の心の中に生きているからね。」
「はい　分かりました」
私はそう言って、あわてて布団を被った。何故か涙が溢れて仕方がない。
「お父さん、分かりました。忘れないよ。忘れないよ。」
何度も何度も、自分自身に言い聞かせるように、心に誓った。

病気をすると、回りの人の心が優しくなるのだろうか。学校へ行くと、みんな心配して寄ってきてくれた。
「麻疹だったんだって？」
「吉野、麻疹かよ。おまえ、まだやってなかったのか」
「おれなんか、一年生の時やっちゃたぜー」
「辛かった？」
「大丈夫、もう治ったから」
幾分スースーする襟首と体の軽さに気を取られながら、精いっぱい笑顔で答えた。
教室は、卒業式が近づいてか、気忙しい雰囲気が漂っている。
「すっかり良くなりましたか？」
「はい」

先生も声をかけてくれた。体育館がない頃だったので、式はぶち抜き教室で行われる。
写真を撮ったり、文集に載せる作文を書いたり、時々、先生が忙しく授業が自習になることもよくあった。そんなある日、先生が風邪で休み、教頭先生が代行で入って来られた。話の後、国語の漢字練習になり、少しして職員室に戻って行かれた。たちまち、教室はおしゃべりが始まり勉強どころではない。席を離れてふざけ合う者もいる。
金子君が私の席へやって来た。照れ臭そうに、手に持っている何かを私の机の上に置き、
「やるよ」と言って戻って行ってしまった。
「えっ？」
あっけに取られ、机の上のハンカチのようなそれをよく見ると、何と、あの金子くんが刺した花の刺しゅうだ。こんなよく出来た作品を、本当にもらっていいんだろうか。心配になり、昼休み、私は金子君に訊いた。
「金子君、本当にもらっていいの？」
すると金子君はそっぽを向いてもう一度、
「やるよ」と、言った。
「ありがとう。大切にするね。」

机の下で、そっと広げると、始めて見た時と同じ感動が湧いてきた。
「きれい！」

その晩、床につく前に、私は金子くんからもらった刺しゅうを母に見せた。
「まぁ　上手だこと！」
「きれいでしょう！　金子君がくれたの」
「朝子ちゃんではないと思ったわ。」
「男の子よ！」
「本当によく出来ているわね。これは、何の花かしら？」
「分る？」
「うーん、撫子……秋明菊？……でもない、桜草！　そう桜草に一番近いかもしれないわね。」
「桜草？」
「野の花よ。可憐な花だわよ。」
「うん」
「そうだ！　お母さんがいいものをあげるわ。」
隣の部屋へ行った母は、白いレース模様の張り付いた、小ぶりの薄い箱を持って来た。
「ここに入れて置くといいわ。なくさないように。」
「きれいな箱！　どうもありがとう。」
私は金子君にもらった刺しゅうを、そぉっと二つ折にし、大事に箱の中に収めた。
「人様からいただいた真心は大切にね。」
今まで、見たことのない柔らかな表情をした母が言った。

いったい、この教室から何冊の本を借りて読んだことだろう。もうここへ来ることはないのだ。図書室のお掃除をしていると、言うに言えない懐かしさと寂しさが、こみ上げて来た。図書の貸し出しは、今日で終わりだ。雑巾を堅く堅く絞り、私は全ての本棚を拭いた。そうして読んだ本があると、そっと触れてみたりした。できることなら、一日中ここに居たいくらいだ。まだまだ読みたい本は、沢山あった。
「吉野―　鍵、閉めるぞー！」
学級委員が、バケツを持って入口にたっている。
「はーい」
せめて最後に、大好きな本の臭いを持って帰ろう。私は目をつむり、深い深い深呼吸を三回した。
「さようなら　ありがとう」

その日のことは、誰も知らなかった。

教壇に立った先生が、突然、

「金子君、ここ。」と、彼を呼び寄せた。金子君は静かに立ち上がり、礼儀正しく椅子を入れ、先生の横に立った。みんなポカンとしている。

「実は、金子君は一足先に卒業します。お家の都合で、引越しすることになりました。」

誰も何も言わず、前だけを見ている。

「一言お別れの挨拶をしたら?」

促されて、金子君は恥ずかしそうに少し間を置いてから、

「ありがとうございました。」と言い、頭を下げた。誰かが、

「金子、元気でなー」と大きな声で言った。金子君はニヤニヤしながら席に戻り、机の中の物をいつものかばんに入れ始めた。すぐに森君が手伝って、最後に忘れ物がないか机の中を覗いた。

そして、終わるといっしょに立って、みんなの方に向かって、今度は二人で一礼した。なんだか変な感じがして、みんな小さい声で笑った。森君は金子君の肩に手をかけ、先生と三人は、何事もなかったように教室をでていった。アッという間の出来事だった。

私はぼんやりして、何の感情も湧いて来ない。

けれど、しばらくして、

「もしかしたら、森君だけは、このことを知っていたのかも知れない。」

そう思った時、初めて寂しさが込み上げて来た。

（つづく）

さくらんぼが実ったら

いんば華子

小さい頃は　神様がいて……

久しぶりに聴くユーミンは、先ほど収穫したさくらんぼのような甘酸っぱさで私の中に広がった。プチンと口の中で赤い実が弾ける。柔らかな果肉が舌の上を滑る。

私の知っているさくらんぼの味は二つある。

一つは、私の高校時代を思い起こさせるユーミンの曲。

もう一つは、毎年初夏に私達の畑に実る赤い宝石たち。本物の、さくらんぼだ。

「何聞いているの？」

「ユーミン」

「へえ。ひこうき雲とか好きだな。寂しいけど、どこまでも行けそうな気がして」

「どこまでも、ねぇ。……行けるなら、行きたかったかな」

私は軽トラの助手席の少しだけ開いた窓から、青い空を見上げた。

「え～どこ？」

運転席からいたずらっぽく聞いてくる旦那に向いた。

「教えないよ」

イヤホンを外して、前に向き直る。収穫作業中に聞いていたのをそのままにしていたのだ。代わりにカーラジオをつける。明日の天

気も晴天。今年は、綺麗な佐藤錦が出荷できそうだ。

隣にいるのは、五年前に結婚した旦那だ。二十六の時、大学時代の友達の結婚式で知り合った。

彼は山形の田舎から、高校時代の友人代表としてこの日のために上京してきていた。二十代後半にもなって、右も左もわからないという様子で、披露宴会場に向かう道でも会場についてからも、一人場違いな空気に圧倒されていた。その姿はすぐに人目を引いて、どちらの親戚なのか、どちらの友人なのか、私は新婦の友人達と囁き合った。

やがて彼が新郎の伊藤君の高校時代の友人代表としてスピーチを行い、そこで彼の素性が明らかになった。他にも高校の友人を呼んでいれば、彼だけが寂しい思いをすることもなかっただろう。伊藤夫妻が招待した友人は、大学の学部やサークル、職場の人がほとんどだったのだ。

「真由美、ちょっとこっちに来て」

華やかに着飾った新婦に呼ばれて、私は新郎新婦、そして旦那になるとも知らない、朴訥とした田舎の青年に近づいた。

「こちら、川野真由美（かわのまゆみ）さん。俺達の大学のゼミで一緒だったんだ。川野さん、こいつ地元の友達で、磯山勇樹（いそやまゆうき）。山形でさくらんぼ農家やっているんだ」

「はぁ……」

私は軽く会釈をするも、何故二人が私を呼んでまで磯山勇樹という青年を紹介したのかわからなかった。学生時代、彼氏が欲しいと酔って叫んだ事はあるかもしれないが、いくらなんでももうそんな子どもではない。地元の埼玉県で何とか職を得たし、なんとか一人でやってきている。今の生活に不満があるだとか、この二人に漏らしたこともない。

一方、私よりも田舎の出の彼に関しては、私を見ようともしなかった。新郎の傍へ寄って、少しでも肩身の狭さや心寂しさを救って欲しいとばかりに、身体半分を隠そうとしていた。会釈の一つもしない同い年の人に、憐憫（れんびん）に近い感情が湧いた。彼はおそらく、田舎の山形をほとんど出ることなく育ったから、臆病に大人になってしまったのだ。彼は、彼を取り囲む世界のほんの一部だけで生きてきた人なのだ。

「ねえ、真由美はさくらんぼが好きでしょ？　一緒に山形へ行った時、もうすごい勢いで食べていたじゃない」

「え？　ああ、ゼミのメンバーで合宿行ったときね。確かさくらんぼ狩りで……」

私はハッとして口を噤んだ。
今の今まで、私は忘れてしまっていた。
彼に会うのは、二度目だったのだ。

私が一つ目のさくらんぼの味を知っていた時間は、他の子よりも長かった。その様に思う。
小さい頃は、神様がいて　不思議に夢を　叶えてくれた。
ユーミンの歌詞通り、私は昔、天の導きのようなものを感じていた。たとえ辛くとも難しい道を選ぶべきだと、心の中か天のような所から、それこそ声が降ってくるような気がしていた。導きは私に確信を与え、目の前の選択を行わせた。それが間違いだとか、失敗だとかになることはなかった。困難の先には、結果と達成感、やりきったという爽快感、ときどき賞状をもらったり学校を休んで表彰式に行ったり、ご褒美になるようなものもあった。
しかし、ある時にその声は聞こえなくなった。岐路を目の前にして、一歩が踏み出せない。声を待っている間に、選択のデッドラインは迫る。どんなに耳を澄ましてみても、こちらから空へ声を投げかけても、何も返って来なかった。
私は動揺した。今までこんなことはなかったのだから。
私は、私を導く声を失った。声の主は、きっと私の神様だったのだ。
神様はきっと気まぐれで、私を助けるのをやめたのだ。勝手も大概にしてほしい。こんなことになるのなら、はじめから神様なんていらなかった。欲しい物をくれるとか、そういう夢を叶えてくれたわけではない。けれども、それ以上に私の道しるべとなって安全な所から転落させないように、取り返しがつかないことにならないように、私の進むべき道を踏み固めていた。この子はもういいや、なんて思って、私から遠ざかっただなんて、そんな都合のいい解釈はない。
声が聞こえないと自覚したのは、高校二年生の十七歳の時だ。
哀れな私は、担任教師から配られた進路調査票を目の前にしてシャープペンシルの先をどこに向けていいのかさえ分からなくなっていた。昨年のように、枠を埋めるだけのために、大学、専門、就職……なんて書くことはできない。調査票は、その様な答え方をしないように、と、注意書きされている。それくらい切羽詰まったことなのだと、意識するよう促されているのだ。だからといって就きた

い職業を書けと言われても、具体的な名前が浮かんでこない。枠を埋めるために何かの職業を書くこともできただろう。ゴールができれば必然的に進路も決まる。けれども、どの職業も、一体どんな過程の後就くことができるのか、知識もなければ想像したこともない。私にとって、働くことでお金をもらい生計を立てることが、うまく自分の将来に繋がっていなかった。

目の前にあるのは、断絶。あるいは、大海の先にある未開の大陸の予感。

私は、頭の中が焼きつくような気がしてシャープペンシルを手放し、この難問に立ち向かうことをやめた。

私は、私の茫漠（ぼうばく）と広がる未来に、自ら待ったをかけたのだ。

十七歳の私に未来はひどく遠い事にも思われた。確かに遠いことだ。何をしているのか分からない十年後よりも、大量に出された英語の課題を本日中にやり遂げられるのか、そちらの方が問題だった。取り越し苦労をするより、今目の前にあることをどうやり過ごすかだ。

静かな教室に、紙の上をシャープペンシルの走る音、一画の書き始めに机の中で反響する音が、そこかしこから刺すように向かってくる。

私だけが、道の途中で立ち尽くしていた。

私だけが、沼の奥底に沈んだままで、他の皆が明るい水面の方へ向かってゆくのをただ見ているしかなかった。

「進路調査票なんて書いた？」

「かったりーよ」

「また白紙にしちゃった」

「一応、四大？　まだ何やりたいなんて分かんないよ」

「公務員受ける。大学行ってまでやりたい勉強も欲しい資格もないし。四年も勉強する気力もないし、だからって専門行く気もないし」

「そんなのどこも受からないよ。他の一般企業の就職とか考えないの？」

「地元になにがあるの？」

調査票が回収された後の休み時間、教室内は男女ともこんな会話が飛び交っていた。

そうだ。皆だってまだわからないんだ。

私は砂時計の底に、少しだけ安心の砂が積もった気がした。けれどもそれは私自身の焦りに蓋をして見えなくしただけで、私が進路を決められていないことに変わりはなかった。上に残った砂は、重力に引かれて、時間とともに小さな穴から零れ落ちる。

Time flies like an arrow.

気が付けば、教室内で飛び交う言葉達は、もうそこにはいなかった。

神様の声が聞こえた頃、私は目の前の課題に対してやり遂げる姿勢を貫いていた。そういう姿勢でいたと思っている。割と勉強は好きだったし、周りの子よりも真面目な方だったと思う。たとえ声の導く先に困難はあったとしても、いつかは乗り越えそれは自分の物となった。けれども声が聞こえなくなってからは、何もかも手ごたえをなくしてしまった。自分の選択だったのか、乗り越えることができたのか、成功だったのか、失敗だったのか、……その時のベストは尽くされたのか。

私の進路もきっと同じだ。声が聞こえていれば。私を導く声さえあれば。

声を失っただけで、見るものすべてが印象派の絵画のように輪郭の危ういおぼろげな物質に変わった。物事をうまく捉えきれない。水の中を泳ぐ実態のない魚を掴むようなそんな感覚に捕らわれた。

移動教室に向かおうと、次々とクラスメイトが席を立つ。私は後方を振り返って、数人の友達と目を合わせた。一緒に弁当を食べ、放課後を過ごす友達だ。目の前の問題から目をそらすと、そこには私と同じように進路調査票にほとほと困っている仲間がいる。その友人の中でも私と同じ列の最後尾に座っている亜澄（あすみ）には、特に心を許していた。

友達に優劣や好き嫌いを付けるような仲ではないし、私も贔屓（ひいき）することは好まない。けれども亜澄だけは私にとって特別だった。

彼女には、いつも満たされて幸せでいてほしいと願っていた。

当時の事を思い出すと、私には同性愛的傾向があったのかもしれない。高校生の時は、彼氏が欲しいとか強く思ったこともなかった。付き合っている彼氏が……という類の話を聞くと、その煩わしさにイライラとした。そのせいで、私の友達ほどんとが女性で占められていた。だから亜澄に対しての執着に近いほどの気持ちは、恋に近かったと思うのだ。神様の声は聞こえなくなるし独りでいられるほど強くはなかったから、依存対象はどうしても必要だったのだ。

大学の授業で、対人関係は、異性が深まる前に同性友人関係が深まり、それがいずれ異性関係を作ることへ向かうという講義を受けた記憶がある。それは、私にとって都合のいい理由となって、私の中に残っている。

私達が毎日のように顔を合わせていた時は、今となってははるか昔のことだ。現代の高校生となると、私達の頃と全く違う環境で。高

校生”をやっている。まるで、私達の高校時代なんてかき消してしまうように、彼女達は今を明るく笑っている。変わらないのは、いつも誰かと一緒にいることぐらいだ。柄の繋がったさくらんぼみたいにくっついたり離れたり、踊るように揺れている。

亜澄との連絡が途絶えたのは、結婚式で勇樹と再会する少し前だった。

彼女と連絡が取れないとわかったのは、高校の同窓会メールを転送しようとした時だ。私は連絡係で、名簿から各々のアドレスを選択して一斉配信した。もちろん連絡先が変わった人も多くいて、個人で広めてもらう手筈だ。私も仲のよかった友達に確認のメールをした。亜澄以外には連絡が届いたのに、彼女の連絡先だけはエラーで帰ってきてしまった。私が最後に会ったのはその二年前だった。学生時代に持っていたツイッターや他のＳＮＳのアカウントにも暫らくログインしていない。時々タイムラインに現れる報告で、亜澄の事を知っていたつもりでいた。全く知らないうちに、雲に隠れたように亜澄の存在が消えてしまった。就職後の引っ越し先の住所を知らされていなかった私達は、他に連絡手段がなかった。

今日まで亜澄を思い出さない日はなかった。亜澄と過ごした高校時代は霞むくらい昔に遠ざかり、生活も付き合う人も変わったというのに、あのさくらんぼのような味だけは、まだずっと残っている。

磯山勇樹に初めて会ったのは、山形の小さな直売所の隣にあるさくらんぼ農園だった。

教授の都合で夏季休暇中の合宿ができず、無理矢理六月にスケジュールを組んだのだ。さくらんぼ狩りは、合宿のイベントの一つになっていた。彼はその農園の息子だった。後で聞くと、お父さんが、お前と同じ年の子らが来ているから、挨拶でもしてこいと送りだしたのだ。

「大人一人千五百円です。時間は三十分。時間がきたら声をかけますのでマナーを守ってください」

やる気のない棒読みだった。さくらんぼ狩りの説明にマニュアルがあるのかないのかは知らないが、もう少し愛想よく言えないのか。相手は少なくとも私たちと同じくらいの年齢だ。大学生のアルバイトではなさそうなのに、六月の平日昼間に働いている。隣で大げさに頭を抱えるおじさん（もちろん、彼のお父さんだ）の姿から、ああ、跡取り息子かと想像がついた。

六人のゼミのメンバーは、さくらんぼ狩りが始まると同時に一気に農園の中へ散開した。農園の中には、私達の様な大学生ぐらいの若者か、孫を連れてきた老人夫婦が数組来ている。皆そろって脚立に乗ったり腕を高く伸ばしたりして、緑葉の中の赤い実を探った。私は少し出遅れて、すぐ近くにあった木に実ったさくらんぼを採った。艶があり、よく見るとルビーのように深みのある赤がある。みつめている時間が長かったせいか、磯山農園の息子が私のことをまじまじと見ていた。

「それ、食べないんですか？」

強張った顔のまま彼は尋ねた。

「……食べますけど」

私はパクリと口に含んだ。甘酸っぱい果汁が口の中に広がる。

「おいし～」

「先生、来年もここで合宿やりましょう」

遠くからゼミ生たちの声が聞こえる。彼らの声が途切れてから私は言った。

「美味しいですね」

私は他人行儀に感想を述べたが、心の中ではぴょんぴょんととび跳ねていた。大好きな好物のさくらんぼが目の前に輝いている。はじめてのさくらんぼ狩りに朝から興奮していたくらいだったのだ。

「よかったです」

勇樹の短い言葉は、どこか東北の訛りがあった。

「それ、俺の木なんです」

勇樹は農園の柔らかい土を踏みしめて、私に近づいた。長靴に作業服、麦わら帽子姿。農場の人はどの年齢でも同じような格好をしている。麦わら帽子の下から覗く勇樹の顔だけが彼の若さの象徴だ。やけた肌にピンとした張りがある。

「……磯山……さんの？」

私は、先ほど摘んだ木を見上げた。

「俺が生まれた年に植えて、その後俺が育てたんです。今では立派な一本の農園の木になりました」

勇樹はにこりと笑った。皮膚の薄そうな顔にえくぼが二つできた。

今度は私が彼を見つめる番だった。先ほどの態度とは大きな違いだ。人見知りや人前が苦手というようには見えない。しかし私がじっと見過ぎたのか、彼は視線をそらして麦わら帽子のつばの中に顔を隠してしまった。

「ありがとう。えっと、磯山さん。私、もっと奥の方へ行ってみます」

「ああ、はい。楽しんで」
最後にちらりと覗いた勇樹の顔は、また強張ったものに戻っていた。
私は結婚式で勇樹と再会するまで、この時のことを忘れていた。気まぐれな私達は、二度とゼミのメンバーで山形を訪れることはなかった。次の年の合宿は夏季休暇中に先生の好きな熱海で行われ、温泉を堪能して帰ってきた。
結婚式で会った彼は、スーツ姿のせいかすっかり落ち着いた青年になっていた。麦わら帽子を被っていた頃は、まだ子どもに近かった。あの時の少しだけの会話と、今日五年ぶりに姿を見ただけではわからないのも無理はない。
一人だけ新郎の地元から来た勇樹は、すぐに披露宴会場で孤立した。新郎新婦は司会者に促されて、次々とプログラムをこなした。ビデオ上映、新婦から新郎への手紙、出席できなかったゼミの先生からの祝電などだ。
勇樹は立食形式の会場で他にすることもないので、一人もそもそと料理を口に入れては流され続けるビデオを見ていた。先ほど私を紹介したのは、どうも相手をしていてほしいという二人からのお願いだろう。なんでこんなところに呼んだのか、彼の居心地の悪さは予想がつくだろうに。おまけに私以外、当時の合宿に同行したメンバーがいないのだ。
私は奇妙な責任感を覚え、サラダを取り分けた皿を持って近づいた。
「一人で来させるなんて、伊藤君少し意地悪じゃない？」
勇樹は口に入れようとしたから揚げを置いて笑った。
「なかなか東京は来る所じゃないし、代表で呼ばれたんだから嬉しいよ。スピーチは緊張したけどね」
彼の肌は黒くやけていた。日照時間の短い東北に住みながら、まるで山の中のサーファーだ。短髪は綺麗に整えられていて、彼の輪郭をはっきりと映している。
「六月はさくらんぼの収穫時期じゃないですか？」
「てんてこ舞いですよ。畑も少し広がりましたから。でもせっかくなんで親や親戚に頼んで抜けてきました」
二人で新郎新婦を見やる。披露宴最後のビンゴゲームの準備が始まった。伊藤君達の所属していたサークルのメンバーが中心になって運営している。ゼミで同じだったとはいえ、手持無沙汰なのは私も同じだった。
「伊藤みたいな進学組は、ほとんどが山形を離れて就職するから、

田舎は人口が減るばっかりですよ。人がいなけりゃ結婚相手もいない」
勇樹は深刻そうにつぶやいた。私はその様子が妙におかしくて、つい笑ってしまった。
「そんな大げさに考えなくても。私達まだ二十代じゃない。気楽に考えましょうよ」
「……じゃあ川野さん。山形に、嫁に来てくださいよ」
勇樹は真面目だった。冗談ではない。今言った言葉は本気だった。
「もう、……冗談はおしまい。ビンゴも始まるし」
私は必死で気まずさを誤魔化そうと、会場で手渡されていたカードを手に握った。
この人は少し変だ。初めて会った時も、今の会話も。でもそれもこの時間だけ。伊藤君の友人だから、大して知らないからといって鼻であしらうことはできない。とにかくこの時間が早く終わってほしいと、できるだけ視線を合わせず会話も受け流してやり過ごせればと願った。
「まだ二十代じゃないですか。川野さん、気楽に考えましょうよ」
勇樹は私の言葉を繰り返し、連絡先交換しましょうと、スマホを取り出した。

何がきっかけだったかは今ではよく分からない。披露宴そのものに参加したことがきっかけと言えば正しいが、私は、行き先の書かれていない列車に乗ったような気分だ。私達は連絡先を交換し、七月の連休に山形の農園を訪ねた。さくらんぼの旬は終わり、青々とした緑で占められる季節にだ。
往路の電車の中で私は彼が繰り返した言葉の意図を考えた。あてつけか皮肉か、ちょっとしたからかい文句だったのか。
彼の違和感はきっと、行動と発言のちぐはぐさからだ。友達の影に隠れるくせに、妙に言葉だけは大胆な時がある。勇樹は初めて会った時も披露宴の時も、少しずつ自分の世界を広げようとしているつかまり立ちの赤ちゃんみたいだ。たどたどしく、一歩出てみては反応を確かめて、一歩引き下がる。大人にもなってみっともない、恥ずかしいと思わないのだろうか？
三連休の残りの二日を使って山形に行ってしまう私を、もう一人の私が車窓の外から羞恥心の塊のように見ていた。後には引けない、彼のとは比較にならないほど大きな一歩を踏み出してしまった。そんな気がするのだ。
山形に着くと、勇樹が軽トラで迎えに来ていた。
「僕達は、これからこんな毎日を過ごすんですよ。二人で畑に行っ

て、日の沈むまで仕事をして、また二人で家に帰る。ご飯を食べる。どう？」

開口一番の言葉に、私は踵を返して東京行の電車に飛び乗りたくなった。背筋がぞくっとするという感覚をしっかり味わされた。

私には、磯山勇樹というどこの惑星から来たのかわからない人間も、山形でさくらんぼ農家をすることもわからなかった。さくらんぼはスーパーに並んでいるもので、木になっているものではない。今の私とは全く縁のない世界だ。

昔観たジブリの『おもひでぽろぽろ』は、山形の自然が美しくてとても好きだったけれど、今は絵に描かれたそれさえも嫌いになってきている気がした。

聞くに忍びない勇樹の言葉のシャワーに、面倒くさいだとか、その言葉かけ自体が常識を逸しているだとかの印象は持ったが、どれも心の水面を駆けてゆくだけで怒りにも諦めにもならなかった。

ガタゴトと軽トラに揺すられながら、私は、高校時代のよくあったような、その日だけだったような、懐かしい亜澄の記憶を辿った。

授業が終わった後、駅に直行するのは私と亜澄だけだった。

「真由美、マック寄って帰ろう。クーポンあるし」

教室の簡単な掃除が終わった後、帰り支度をする私の所に亜澄がやってきた。手にはケータイを持ち、メルマガを見せた。新商品の紹介とともに五十円割引の文字が液晶画面にあった。

「私も食べたい」

「じゃあ、決定」

私と亜澄は笑いあった。

「ええーずるいずるい」

あっという間にグループの女子が集まってきて、私たちは黒い塊になる。

箸が転がってもおかしい年頃だ。私達は楽しい時はもちろん、嫌な課題の話も、抜け駆けで遊びに行く友達に対しても、何もかもけらけら笑いながら話した。

「なんで二人で行くのー。よりによって英会話がある日」

「私達も連れてけよー」

部活や習い事のある面々は、口々に文句を並べた。

「そうだよー。私だって今週終われば放課後行けるのに」

「でも、クーポン今日までで……。期末テストが終わったら皆で出

かけようよ。二人の部活の休みの日にでもさ」
亜澄は寄ってきた三人を宥めた。
「可愛い亜澄が言うなら許す！」
「なにー私じゃ許してくれないのー」
私は友達の背中を突いて抗議した。
「許さーん！」
みんなは寄ってたかって、私の弱い脇腹を中心に擽ってきた。
五人で騒いでいても周りの目は気にならない。教室の至る所で女子生徒はグループで笑いあっているからだ。
「さあ、みんな帰った帰った。課題のある生徒は？　今日なら四時まで教室で受け付けるぞ」
担任の先生は教室中に聞こえるように声を張り上げる。英語の対話暗記課題のことを私は思い出した。英語の会話力向上を目指すとかで、授業や小テスト以外に、対話文のテキストが配られている。生徒はスキットを一つ暗記し、先生に指示された役のセリフを読むのだ。今週中に先生を捕まえて、聞いてもらわなければならない。
「亜澄、今日課題の練習もついでにしていこう」
課題のペアはクラスメイトならだれでもいいのだが、私は大抵亜澄と組んで練習していた。
「いいよ。あー全然覚えてないわ」
教室からは少しずつ生徒が減っていった。部活や委員会、学習塾へ向かう学生に交じって、私と亜澄も最寄り駅前にあるマックへと向かった。
私たちは、埼玉の都市部と山地の間にあるエリアに住んでいて、高校は駅から歩いて十五分の所にあった。東北地方に入るにもそこそこの距離で、都内に行くには少し遠かった。駅前には、ファストフード店や大きな駅ビルもあった。けれどもそれは駅前エリアだけで、車で五分も行けば一級河川があり、田畑の多い街を移動するには車やバスが必要だ。広くてもどこか窮屈な街だ。
夕方の店内は高校生やビジネスマンで犇(ひし)めき合っていて、やっとのことでカウンター席が二席空いている所を見つけた。
「今日結構混んでるね」
「今の時間はね」
人は多かったが、カウンター席の周りに学生は少なかった。大体がテーブル席を陣取り、気の済むまで話してゆくのだ。
学校帰りのよくある風景。何度も何度もコピーされた、すり減った原版のような。また明日も、この店は同じような風景を繰り返す。それは、私も亜澄も、学校も、日本も世界も同じだ。私の毎日は、

いつも何かでいっぱいではち切れそうだ。それでいて中身は空虚で、ドーナッツの穴から覗いたような、あほらしい風景に繋がっている。叫び声をあげたくなるほど味気ない毎日に、私たちはひたすら耐え忍んでいる。今ここで叫びだしたりしたら、その人は蔑まれ、今度は指を刺される。

「あんたの負けだ」

私は、そう言われたくないために、ひたすら黙りこくって日常が通り過ぎ、卒業やら人生の区切りが無理矢理押しだしてくれるのを待っている。

楽しいはずの放課後は、すぐにこんな思考で埋め尽くされてしまう。課題のスキットなんか、私の頭の中に入れる隙間などない。

隣を見ると、店内のざわつきや少し大きめにかかった有線に悩まされながら、眉間に皺を寄せる亜澄がいる。テキストを睨んでいるが、難しいトピックと構成にぶつかっているようだ。

「家帰って覚えてくる。明日の放課後までにはできるようにしておくから」

「家、最近は落ち着いているの？」

「まあ、それなりにね」

亜澄は煙草をふかすようにして、細長いポテトを噛んだ。私も同じように一本齧る。塩っ気と脂っぽさがじわっと口の中に広がった。

亜澄の家は、いわゆる事情を抱えている。本当の詳しい所は分からないが、お母さんは昔から病気がちで塞ぎこんでいることが多いらしい。病気の名前は、なんとなく怖くて聞いたことはない。中学生の弟は、十二歳にして無断外泊がしょっちゅうらしい。その分お父さんが色々頑張っているらしいけれど、お父さんの仕事は忙しくて一週間顔も合わせないこともあるらしい。

そんな家庭で育ったことのない私に、亜澄の家の生活がどんなものか、どれだけ大変で負担だと思うのか私にはわからなかった。とにかく、“亜澄が学校に来れなくなるようなことが起こる”心配だけはしていた。

人の家の事に踏み込み過ぎるのもよくないと思って、具体的な事は聞けなかった。聞いたときに亜澄がどんな反応をするのか考えると聞く勇気なんてなかった。そんな心配の仕方があるのか、これって心配している事になるのかわからない。後少しを踏み込まず、安全な所から一歩引いて眺めている。そっちの方が近い気がして苛まされることもあった。

いつも亜澄にくっついているのは、気が合って頼りになる友達だからというより、誰かといないと私が不安だから、本気で力になろ

うとしない事の罪悪感のごちゃ混ぜになったドロドロとした感情の方があっている。

一度だけ、亜澄の家に遊びに行ったことがある。私の使っている駅よりさらに一駅下った所にある。どこにでもありそうな集合住宅の一つに、亜澄は住んでいた。そんな場所に私が行っていいのだろうかと心の中がごろごろとして落ち着かないまま、亜澄について行った。

郊外の一駅の距離は、周囲の景色を一変させることがある。私と亜澄の住んでいる所は、同じ市内とは思えないくらいだ。私は比較的街に近く平坦な所に住んでいたが、亜澄の地区は山や丘もあり、団地の中にも高低差が多くあった。県境の山もここからの方がずっと大きく見える。

駅からバスに乗って、亜澄の団地のバス停に降りた。団地全体が山を一つ背負っていて、ごうっという音を立てて今にも覆いかぶさってきそうなほどだ。思わず、すごい所に住んでいるねと言いそうになった。

亜澄の家は、団地の入り口に程近い三階建てマンションだ。バス停から目指す所はすぐに分かった。

二人で並んで団地の区画の端を歩いた。時々車が隣を走ってゆくが、昼間の時間はとても静かだった。この日は行事の代休で、真昼の団地は生気がなく空っぽだった。

「ぱあん」

大きなポップコーンの弾けたような音が、周囲に響き渡った。連なる山や住宅にぶつかって、団地の中で反響音が二重三重に広がり見えない波紋を描いた。

「何の音？」

私は音源が思いつかず、亜澄に聞いた。

「イノシシの駆除じゃないかな？」

「え？　この辺出るの？」

「たまにね。山から下りて来たのを見たことはないけれど、この時期はよくこの音がするよ」

亜澄はふざけたように、ぱあんと言って鉄砲の真似をした。

勇樹の車は、いつの間にか深い山道を走っていた。高い建物が減り、道沿いに続いていた民家の数が減って、集落と集落の距離が広がってきた。アップダウンを繰り返し、軽トラのエンジンがギーギ

ーと唸っていた。ああ、ここには峠があるのだと、私はぼんやり考えていた。
木の枝や蔓で覆いかぶされた信号で止まると、遠くからぱあんという音がした。
「あ……」
私は思わず声に出してしまった。あの時よりもずっと近くにある。鉄砲の乾いた音だった。
「狩猟の時期には早いから、たぶん練習場の音だね。人も少なくなって、兼業か本業の合間にやる人が多いんですよ。ベテランは年老いるばかりで、若者は経験不足。今じゃ県外の人も募集かけて、狩りの時期に備えて練習するんです。ほら、ジビエとかマタギとか聞いたことあるでしょ？」
勇気が話している間にも、数発音が聞こえた。
「あ、でもマタギは狩猟民族だから、害獣駆除と狩猟とは違うか……。川野さん？　なんか顔色が悪いけど」
「……降ろして」
「……嫌だよ。無理だよ」
「いいから」
「ド田舎ですよ。動物も出るし土地勘もない人を置いて行くわけにいかないですよ」
勇樹は焦ったように言い張った。
「違う。気持ち悪いの」
信号は青に変わった。向かいにも、私達の後ろにも車はいない。軽トラはゆっくりと前に進み始めた。
「……く、車酔い」
「……え？　ああ……揺れるもんね」
勇樹はハッとして、申し訳なさそうに言った。気にしないでと言いたかったが、空嘔（からえずき）が限界だった。
勇樹はゆっくりと車を走らせ、側道に車を寄せた。
身体が揺れないように車から降り、そのまま杉の木と多様な広葉樹で覆われたくらい山の中へ入った。折り重なった落ち葉や小枝をパキパキ、ザクザクと踏みながら、光の届かない奥へと進む。
私は本当に気持ちが悪かった。頭も今と昔がごちゃごちゃに混ざり、車は揺れるし、勇樹とは話が通じなかった。
もう限界。すぐに家に帰って布団に入ってしまいたい。連休が終わればまた仕事が待っている。悠長に旅行に出たりしていらぬ疲れを溜めただけだ。
一歩一歩がとても重たかった。自分の身体ではない、誰か他の人

の身体を運んでいるようだった。夜の帳が下りたような、暗く静かな森の奥へ行きたい。その方が楽になれそうだった。

歩いてきた森の入口の方に背を向けて、ちょうどよさそうな所で座りこんだ。ジーンズを履いてきたから汚れは気にしなくて済む。耐えられなくても、ここでなら吐いてしまっても大丈夫だろう。土をかぶせておけば、いつか分解されてこの山の土になる。今は何も考えずにいて大丈夫だ。私は一生懸命言い聞かせたが、頭は空っぽにならなかった。

その隙間を見つけ出したように、高校の物理の授業の一場面が浮かんできた。

「エントロピーは閉じた空間では増大する。エントロピーとは、どれだけ分子が乱雑な状態であるかってことだ」

白衣を着た先生が説明を続ける。文系だった私は、理系科目にはちっとも歯が立たなかった。この授業も、わからなかったことだけは覚えている。気だるい午後の授業で、黄色い防火カーテンの色に教室中が染まっていた。西日が強い、秋の季節だった。

「宇宙のビッグバンは閉じた系で起きた出来事である。だからエントロピーは増大し続ける」

「先生、それじゃあ増大し続けたあとはどうなるんですか？」

生徒の一人が質問した。

「秩序のあるものは、それが崩壊し混沌としたものになる方向にしか進まないというエントロピー増大の法則がある。つまりは、宇宙の死だ。我々人間も同じ。いつかは、崩壊して終わりが来る」

先生は滔々（とうとう）と答えると、黒板に数式を書き始めた。授業はそんな調子で、意味のわからない言葉で埋め尽くされていった。

“閉じた系”の君達には、終わりが来る。

先生にそう言われたような気がした。私が理解したのはそれだけだ。閉じている私は、私の中で色んな感情や考えが渦巻いている。ぐるぐる回って混沌としていつか完全に混ざってしまったらどうなるのだろう。

森の中にいる私も、同じ状態だ。

過去と現在が、時間も感情も関係なく混ざって、閉じた系から吐きだされる出口を見つけ出そうとしている。車酔いで気持ち悪いのか、頭の中が混乱しているのか、どちらか判別がつかなくなっている。

吐きたいのだろうと思って、身体を屈めた。胸を撫でて嘔吐を促そうとするが、うまくいかない。頭がぼんやりとしてきて、視界が歪む。茶色と緑のごちゃごちゃとした模様で、悪心（おしん）だけが増してく

る。もう限界だ。私は、何かが増大しきってしまっていて、出てゆく先がなくて、もう、終わりなのだ。

私の隣で、何かがはじけ飛んだ。

頭がぼんやりとして、夢でも見ているようだ。気持ち悪さが、一瞬遠ざかった。

歪む視界の中、何が吹き飛んだのか私はしっかり見ようとした。

さくらんぼだった。ぱあんとはじけて、小さな実がぐちゃりと潰れている。中からは、種がむき出している。森の中にはあるはずのない物だ。けれどもそれは目の前にあった。なににも支えられず、私の目の前の空間に浮かんでいる。瞬きをすると、そのさくらんぼは元の形に戻っていた。次の瞬間には、またもう一度はじけ飛んだ。

さっきのは見ていなかっただろう？　とでも言いたげな行為だった。

そのさくらんぼが、高校生の時の亜澄と重なった。

亜澄はどの道、こんなふうに消えて、淘汰（とうた）されることを知っていた。彼女は外からも破壊されていたし、このさくらんぼのように内側からも自分を殺しにかかっていた。

閉じた系の亜澄は、私よりもずっと早く限界を迎えていたのだ。今更それをわかっても手遅れだ。

この歳になって分かった。私の死んでゆく音。もう先はないんだって、目の前の道が途切れるより先に耳に届く音。終焉のラッパの響く音。ぱあんという乾いた音。さくらんぼのはじける音。

四つん這いの状態から立ち上がると、そこは山形の森の中ではなかった。

辺りに木は一本も生えていなかった。川の上流の方の景色に似ていて、大きな頑丈そうな岩が窮屈そうに身体をくっつけ合っている。けれどもここに水はなかった。ずっと先まで、同じような岩場が続いている。空は白くて全体が明るい。けれども、広い空に太陽は見えなかった。

ここは、果ての果ての場所だ。さくらんぼがはじけた先にある場所だ。たった今、高温の熱風が渦を巻きながら、私と一緒に辺り一面頬を焼いていったのだ。

その風が過ぎ去った所に私は、一人で佇んでいる。

眼前に広がる大きな岩には、かつて緑のふわふわとしたコケが生えていただろう。しゃがんで地面に触ると、染みわたった水でひやりとしただろう。それが今はなびく草木もなく、残った岩や乾いた砂で埋められた荒野だ。

目を凝らした先に、人影があった。それはすぐに近くの岩陰に消

えた。
一瞬でもすぐに分かった。私と同じ高校の制服を着た、一人の少女だった。
「待って！」
すぐに自分の声とはわからなかった。大声で叫んだのは、私だった。
「そっちは違うの。違うの。行っちゃだめだって。ねえ、聞こえるでしょ。まだそこにいるんでしょ！　戻ってきて。こっちに来て！」
声が跳ね返る大きな山も建物もない。私の声は、ただ辺りに広がってゆくだけだった。必死に手を伸ばして、足を動かそうとしても、私はその場から寸分も動けなかった。
呼び続けても、少女は二度と姿を見せなかった。
咽喉（のど）が焼けたように熱い。先ほどの熱風のせいだと気づき、私は後ろを向いた。後ろ側には、まだ地衣類の残った岩肌がある。その先は、柔らかい風がそよぐ緑の野原だった。
野原の方に一歩を踏み出すと、また頬がちりちりとした。緑のじゅうたんに足を降ろすと、もうそこは熱くはなかった。
私は、一瞬のうちにこの世界を焼いた熱風を越えたのだ。
何とかして後ろの岩場に向いてやろうと思ったが、私の足は歩みを止めなかった。決して後ろを見ようとしなかった。もう少しゆっくり歩きたいと思っていても、ズンズンとしっかり、決まった早さで、続く野原を踏みしめていった。

「ずっとここで待っていたの？」
胃の中の物を出してしまうと、車を降ろしてもらった時よりだいぶましになった。勇樹は私と一緒に車を降りて、こちらをずっと見ていたようだ。
私には、後を追いかけて、堪えきれなかった吐しゃ物をみて無遠慮に「うわ吐いた」と、言いながらドンドンと背中を叩く人のように思っていたから、少しは常識があるのかと考え直した。
「背中擦った方がよかった？　ごめん。気が利かなくって」
「……それでいいです」
まだ胸のあたりのつっかえが取れず、出発は少し待ってもらった。
「結婚式で発表できるネタがまた一つ増えたね」
どうして結婚が前提で、しかも八割方する方向で彼の頭が成りたっているのかどうしてもわからない。ツッコミしようもなく、毒を

追い出すように新鮮な空気で肺を満たす。
「……返事がないと、さすがに不安になるんだけど。今日会ってから二時間近くなるのに、会話らしい会話できてない」
だんだんと回復してきて、既にたまった今日一日分の反論をしてやろうと息を吸った。あまりに大きく吸い過ぎて、吸い込む音が漏れた。
「あ、また吐きそう？」
勇樹は慌てて私の背中を森の方へ押した。
「だからさぁ！」
私たちはそれから、道の駅で休憩をはさみながらもすったもんだを繰り返し、やっと磯山農園に到着した。
その頃には、長く電車に揺られた後の車酔いと、どうしても噛み合わない私達にどっと疲れ切っていた。
農園の敷地に車を止めると、勇樹はドアを開けようとせず、膝に手を置いた。農園が背負っている大きな山の方から、一つ鉄砲の音がした。
「ねえ、あの音、何の音に聞こえる？」
「……終わる音よ。どこかのおじいちゃんがタヌキを打って、毛皮を獲る。害獣駆除になった鹿やイノシシは、ジビエにして食べるんだわ。鉄砲の後に悲しい叫び声が聞こえる」
私は再び、私達を奪った音に睨みをきかせた。
あんな簡単そうな音一つで、はじけ飛んでしまうのだ。日常は静かな戦場で、所々で銃の音が響いていた。ここも、私のいた所と少しも変わらない。
「僕もあの音を聞いて育ってきたんだ。終わる音、確かにそう。あれは、命が終わる音。でも違うんだ。いつからか、終わる音じゃないんだ」
勇樹は私に身体を向けた。
「あれは始まる音。よーいドンの雷管と同じ、ひとつの合図だよ。ぱあんとなる前に聞こえない？　宇宙のビッグバンの前と同じ現象が起こっているんだ。インフレーションという、ビッグバンになる前の宇宙の膨張……知ってなさそうだね」
私の表情をみて、勇樹は話すのをやめた。
「博識なのね」
私は皮肉を込めて言った。
「どうも」
私の皮肉をどう受け取ったのか、顔からは分からなかった。
「だからもう、なんて言うか、いくつも色んなものが始まっている

んだよ。本当に始まるほんの少し前から、もう動き始めているんだ。だから……」

「私は、来ただけ。あなたに誘われて、さくらんぼが食べたくて来ただけよ。もうほとんどないし、スーパーに行くしかないけど、ここに来たのは」

「ここに来たのは」

声が重なり、驚いて口を噤んだ。私がここに来たのは、無残なさくらんぼを見るためじゃない。

続きを言ったのは勇樹だった。

「少なくとも、川野さんはもう選んでいるってことだ。僕と同じ船に乗る人生を選んでいるってことだ」

「バカ言わないで」

一気に頭に血が上った。

私は、あなたなんか選んでいない。たった数回会っただけで、今日だって特別何かに期待していたわけでもない。

私はきっと、混乱しているのだ。車酔いはするし、仕事に疲れているのだ。うまくコミュニケーションが取れない相手に、調子を狂わされているのだ。

僕と同じ船。勇樹の乗っている船は、親の作った頼りない泥船だ。自分ばかりは大海を越えて行ける丈夫な船と思いこんでいる。たとえ水面に浮かべることができたとしても誰も乗りたがらないだろう。船は端からボロボロと崩れ、おまけに船頭の誘い文句はへたくそだ。

私に選択肢なんてない。どんなに一生懸命になっても、どうせそこそこで終わる。

「終わる為にいるのよ。一部の人達が、何かになる為になれない人が必要なの」

勇樹は、それさえも知らない。一方で亜澄は、高校生の時にその音を聞いていたのだ。

「終わる音よ」

亜澄の家に行った時、そう言って、彼女は寂しそうな顔をした。凛として美しく、儚かった。終わりを意識した彼女は、生き生きと笑っている時よりも素晴らしくて、私は好きだった。

勇樹の言葉と、亜澄の言葉が交錯する。私は、勇樹の言葉は信じたいと思った。けれども、今まで信じてきた亜澄の言葉が遠のくことはなく、今も色鮮やかに残っているのだ。勇樹は戦いにさえ参加しなかったから、悠長なことを言っているように聞こえるのだ。

「川野さんはあの音が命の終わる音だって知っているんだ。それなら聞こえるようになる。今度は、また始まる音がね。僕はね、負け

犬でもないし、少しも惨めじゃない。いつでも、もう一度始められるってだけなんだ。そうしたら、……僕は山形から出ることもなかったし、何か、大きなことを選ぶこともなかったってだけなんだ」

「……ごめんなさい」

勇樹は、私が勇樹のことを世間知らずだとか田舎くさいとか思っていたことを感じとっていたのだろう。偏見ばかりの私をすっかり見透かされていたのだ。

「ねえ、キスをしてもいい？」

「ひっ！」

とっさのことで、私は近寄って来た日焼けした顔を両手で抑えつけた。

「なんでだよ～」

「私は何も許してないじゃない。だいったいパーソナルスペースをもっと考えないと……」

残りは溜息になってしまった。この人に、いわゆる常識は通用しない。おまけに、「ねえ」と言って何度も自分の方を振り向かせようとする。私は、この人をこの人の生き方を少し理解できたなら、面白いかもしれないと、ほんの少しだけ、ほんの少しだけ思ってしまったのだ。それに私の両手の圧力でくしゃっとした顔は、今まで見たどんな人の顔より悔しそうだったのだ。

「車から降りようか。農園を案内するよ」

勇樹は仕切り直すように言った。

「農園って言っても家は畑もあるからいろいろ仕事はあるんだけど……基本的には種をまいて、育てて、実を収穫する。そしてまた、種をまくんだ」

二人でクシャクシャ、ザクザクと地面を踏んで歩く。ざわざわと風に揺らされるさくらんぼの枝は、私が来たことに驚いているようだ。

私は両手を広げて目をつむった。ここの樹や山や土や、ここの人々は、私が来たことをどう思うのだろうか？

ここにいるのは私でいいのだろうか？　むしろここに相応しいのは、私でなくて、亜澄の方なんじゃないだろうか。彼女の方が、私よりもずっと始まる音が聞きたいはずだ。

後少しでここまで聞こえてきそうな答えを待っていたのに、勇樹が私の手を取ってぐいっと引いた。

「あ、磯山さん。そこの空いている所に全部並べちゃっていいから。先にやっててください」

直売所へ納品に行くと、いつもの担当者はすぐにバックヤードへ下がってしまった。とても忙しそうだ。開店時刻は過ぎたから、明日以降の納品関係だろう。

磯山農園のさくらんぼを置いている直売所は、農園の近辺に三か所ある。ここはその中で一番街中にあり、広く人気も上々という場所だ。うちの畑のさくらんぼを気にいってくれる人も多い。この季節になると、磯山農園さんは売り切れですか？　と問い合わせも入るという。ここで味を知って、次の年から箱詰めで地方から注文が入ることもある。大変ありがたいことだ。

私は担当者に言われたとおり、スペースの空いた商品棚にさくらんぼのパックを並べ始めた。今日持ってきたのは五十パック。昨年から売りはじめた、新しいブランド名のさくらんぼだ。磯山の両親と一緒に、我が農園をアピールするために作りだした。

広々と空いていた商品棚は、あっという間に赤い艶々と煌めくさくらんぼで埋め尽くされた。手前みそとわかりながらも、やはり我が子は可愛い。他の農園のさくらんぼや、知り合いの農家さんの野菜たちよりも売り場の中で目を引いている様な気がする。直売所の窓を通って入る太陽光が、さくらんぼをさらに赤く染める。

「あら、素敵なさくらんぼ」

声をかけられて振り向くと、腰の曲がったお婆さんが、カートを引いて隣に立っていた。

「ありがとうございます。美味しいですよ。どうぞ、買ってがっしゃい」

私は少し膝を曲げて、お婆さんに視線を合わせる。お婆さんの丸い瞳が、さくらんぼの粒のように光る。

売り場には、少しずつお客さんが増えてきていた。他の人の邪魔にならないよう、私は詰め込んできた段ボールをたたみ、お婆さんと一緒に棚へくっつくように立った。出荷に来た生産者が、売り場に立つことはほとんどないのだが、売り場担当者も戻って来ない。

私は、試食用に用意していたパックを一つ開いた。

「もらってええんだべか？」

「どうぞ」

お婆さんは小さな手を出した。私は、二連になったさくらんぼを小さな紙皿に載せて手渡した。お婆さんは大事そうにさくらんぼを摘まんで、一粒口に入れた。

「うーん。んめなぁ」

満面に広がる笑みに、私もつられて笑った。
「ありがとうございます」
二粒目もぽくっと平らげ、紙皿には柄が二本と種が二粒残された。
「孫に送ってやろうがな」
お婆さんは、二十粒入りのパックと、箱詰めで別置きしたものを比べていた。
「お孫さんもご家族でお住まいでしたら、箱詰めがいいかもしれないですね。たくさん食べられますよ」
お婆さんは、ふとパックに書かれた文字を見た。お婆さんは山形のさくらんぼを送ることができればよいのだろう。特にどこの農園だとか、品種とかは気にしていないようだった。
「このさくらんぼ、素敵な名前」
お婆さんは『乙女たちの祈り』と書かれた商品名を見ていた。
「昨年から販売しているさくらんぼの名前です。ピアノの曲名で作曲者が……」
「バダジェフスカね。若い頃にピアノば習っていて、その曲がお気に入りだっけのな」
お婆さんは目を細めた。昔の女学生時代を思い起こしていたのだろう。私のよりもずっと向こうにある乙女たちの時代だ。
「どうして曲名通り乙女の祈りにしねがったの？」
「旦那は乙女の祈りにしようとしたんです。でも私が反対しました。今思うと……不思議なことですね。私が学生だった頃、私は、決して一人ではなかったんです。私の隣には、いつも一緒に乙女がいたんです」
「……そうね。わだすも、一人でなかったわ。乙女の祈りは、いっつも乙女たちの祈りだっけ」
お婆さんは赤い実を見詰めてほほ笑んだ。段ボールに入った四パック入り一箱と、仏壇にお供えするわと言って一パックをカートに入れた。
お婆さんの小さな背中が、野菜の並ぶ商品棚の間をぬって、ゆっくりと遠くなる。
私は二粒の種の残った紙皿を握りしめた。確かに手の中にある種のそれぞれの感触が、ここで生きてゆく覚悟と希望のような気がした。
亜澄の手の中にも、同じものがあるといい。ふと、そんな考えが浮かんだ。
私は、彼女の生活を想像する。架空の、私の頭の中にしか存在しない街に亜澄は住んでいる。そこは開発途中の街で、田畑の多く残

った里山と、商業施設や住宅建設が続く都市部とに二分されている。近隣の市と繋がるニュータウンの一帯を大きな国道が貫いている。生活に必要な物は市内に揃った、コンパクトに暮らせる街だ。都市部は窮屈さを感じさせるような、高層ビルで埋まった空はなく、解放感に溢れ澄んだ空気で満たされた所だ。

彼女が寂しくないようにたくさんの人がこの街で生活している。彼女はその中の一人で、あの時みたいに、ぱあんとはじけ飛びそうな不安に、時々駆られてしまう。ああ、そこの、人通りのない道の途中で蹲（うずくま）っているのが、亜澄だ。そのうち、誰か一人が彼女に駆け寄ってくる。いつも彼女の傍にいる人だ。亜澄を支える、大切な人だ。そんなことまで、私は想像できるのだ。

場所は違っても、彼女の住む街もここと同じだ。いつだって、もう一度始められる場所であってほしい。

「ねえ、家に着いたよ。空箱、小屋の所に父さんがいるからそっちに……。ねえ、寝ているの？　少し休憩にしようか？」

直売所の出荷から戻り、勇樹は庭の入口に軽トラを止めた。勇樹は運転席で大きく伸びをする。

「うん。畑に行くのはもう少し後でも大丈夫そうだしね」

「ねえ、またここにいなかったんじゃないの？」

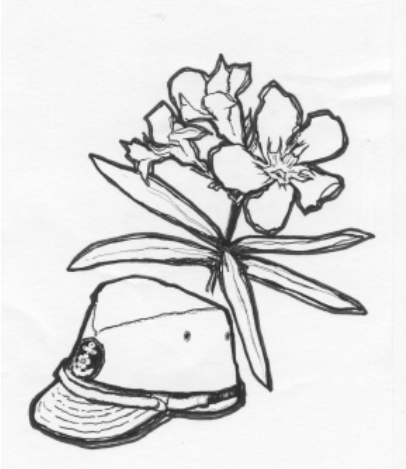
少しだけ考えて、こう答えた。

「少し遠くまでね。さくらんぼを届けに行ってきたのよ」

〈了〉

・・・私見「ミッドウェー海戦」・・・

畑中康郎



一．戦争と日本人

冒頭、日本人の戦争への関わり方から述べてみたい。日本人は戦争が下手で、その国民性は戦争に適していないということから始める。

何故なら、武士道が日本人の精神的バックボーンになっているからだ。即ち、弱った戦意喪失の相手を徹底的に叩くことをその道に背くものであり、また敵の作戦を盗む見ることも卑怯であると考えているからである。正々堂々と対等な立場で戦うことが武士道であると考えていた。これが、正に日本軍をして近代戦に勝利する可能性を大きく損なわせた、といっていい。

例えば、昭和十六年十二月八日の真珠湾奇襲作戦。停泊していた米太平洋艦隊の戦艦、アリゾナ、ネバダ、ウェストバージニア、オクラホマ、カリフォルニアを撃沈し、さらにペンシルバニア、テネシー、メリーランド、ローリー、ヘレナを破壊した。また、航空機五百機を飛行不能にし、戦闘員二千四百名を死に至らしめた。一方、日本の損害は航空機三十機、戦死者はわずか六十四人であった。圧倒的な勝利であった。

ところが大変な問題があった。肝心の空母三隻を取り逃がしたのである。その背景には、司令官をして次の思いがあった。ここまで撃滅

したのだから、これ以上は武士の情けである。弱っている敵をこれ以上叩く必要はないというものだった。実はこの恬淡さが太平洋戦争において、後に致命的な結果を招いたのである。そのとき空母エンタープライズはほんの近くにいたから、難なく沈めることができたはずだった。

さらには、無力化した敵基地の重油タンク、ドックなど軍事施設を攻撃していたらどうなっていただろうか。勝利がより完全なものになっていたはずだ。しかしこれを実行しなかった。もしも破壊していたなら、米軍の反撃が一年、あるいはそれ以上遅れることになり、ミッドウェー海戦における大敗北はなかったし、全体の戦局は大いに違っていた。それでも米国が降伏するとは考えられないから、結局は長期戦となって負ける、とは思う。

この真珠湾攻撃で機動部隊を率いたのが、南雲忠一中将であり、第二撃を加えないよう進言したのが、草鹿龍之介少将であった。

因みに、この草鹿少将は剣道の達人。武士道を信奉していた。そしてこの二人こそ、その後のミッドウェー海戦でも大失策を演じた、司令官および参謀長本人であった。

さらにもう一例を挙げる。

ガダルカナル島をめぐる第一次ソロモン海戦、そこで三川軍一中将の率いる巡洋艦隊が、米艦隊に完全勝利をおさめたときのことだ。

三川は勝利に酔ってしまい、詰めを誤った。そのときまだガダルカナル島のルンガ基地には輸送船団が数多く残っていたのであるが、これを故意に見逃したのである。護衛部隊が存在しないうえに、戦闘能力のない船団を襲えば武士のメンツに関わるとでも思ったのであろう。

だがもしもこれを叩いていたなら、補給物資を失った米国が不利になったことは言うまでもなく、その後の戦局にどれだけ有利に働いたか測り知れない。それは武士の情けなどという高尚なものではない。拙劣な戦術といった方がいい。戦争はリセット可能なゲームではなく、勝つか負けるか、死ぬか生きるかの戦いなのである。

司令官およびそれを支える参謀は、数多くの兵士の命を預かっている。さらにその一人ひとりの兵士には、無事な生還を祈る何人もの家族がいたことを忘れてはならなかった。

武士道に浸りきっている日本人には、敵を完膚なきまでにやっつけるという、そもそもの発想がない。何をやるにしても日本軍は中途半端。美学に酔う日本人は、徹底した勝利を目指すことができず、結局多くの敗北を招いた。

二．ミッドウェー海戦の目的

昭和十七年四月十八日、米軍による東京空襲があった。長距離を飛べるB二十五爆撃機によるものだった。このときB二十五は、遠方の空母から飛び立ち、東京上空を過ぎ中国大陸の蒋介石の飛行場に降り立った。これには日本人の全てが驚いた。大変な危機感を持ったのである。そもそも自国領土の上空を飛ぶ敵爆撃機を許せるはずもない。

余談だが、このB二十五は陸軍所属、空母は勿論海軍所属である。つまり陸軍と海軍が手を握ったということだ。実利主義（プラグマティズム）の米国はこういうことができる。リアリズムと言った方がいいか。もともとは米軍においても陸海軍はお互いに仲が悪かった。しかし大きな目的の前には手を握れる。これが実利主義米国の真骨頂だろう。日本軍にはこういうことができない。最後まで意地を張り合い、軍事予算の分捕り合戦、縄張り争いから抜けきれなかった。功を自らのものとし、非を互いに擦り付けた。日本を守る使命を持った、同じ日本軍とは到底思えない。

さて、日本の軍部、とくに海軍は当初ミッドウェー島にある米軍基地の存在を軽く見ていた。ところが東京上空を飛んだB二十五を見て危機感を抱き、その重要性に気づいた。ここを撃滅しておかないと大変なことになる。ミッドウェー作戦はここから始まった。

しかもミッドウェー基地を攻撃すれば、真珠湾攻撃のときに取り逃がした空母三隻をハワイから誘き出せる。空母はそのとき、ミッドウェー島から南東千八百キロに位置するハワイにいたが、これを奇襲し撃沈しようと考えたのである。

三．図上演習

海軍では決戦に臨むとき、必ず図上演習を実施した。日米を二手に分け、図上で戦わせるのだ。双方の戦力比較をベースに様々な可能性を検討しつつ、海戦の行方をシミュレーションするのである。

ミッドウェー海戦についても図上演習をした。だがそのときシミュレーションで想定外のことが起きた。

赤城、蒼龍、飛龍、加賀の空母四隻のうち、赤城と加賀が沈没、一隻大破というとんでもない結果が出てしまった。もしもこれが実戦であったなら大変な事態である。したがって、シミュレーションに従えば、戦力を増強するか、戦略を変えるか、ともかくもこのままの作戦遂行は断念すべきであった。

ところが、審判役を司る連合艦隊参謀長の宇垣纏が声を上げた。ルールを無視するような指示を出したのである。演習をやり直させたの

である。そして日本側に都合よく所与の条件を変更した。後ろで見ていた連合艦隊司令長官山本五十六もそれを黙認した。

再度の演習では、結局、加賀沈没、赤城小破ということで収まり、条件変更後の演習では日本が米軍空母を沈没させる結果になった。しかしこれは実に馬鹿げたものだ。勝てる条件を日本に付与しているのだから、有利な結果が出るのは当然なのだ。

現実に立てていた作戦は、まずミッドウェー島の基地を空襲し上陸占領する。その後ハワイ近郊にいる空母三隻を誘き出し、これを撃滅。そういうシナリオであった。だから味方空母が敵空母に奇襲撃破されてはならないのである。そのための基地爆撃隊も占領部隊もすでに準備は完了していた。当然、準備を初めからやり直すことなど到底できない。すでに時間はなくなっていたのである。

山本は焦っていた。かつてハーヴァード大学に留学し、米国の国力を知りすぎるほどに知っている。自動車工場を見ていたし、大油田も見学していた。日米の国力が大きく隔たっていることを明確に認識していた。だから、日本が勝つためには短期決戦しかない、と山本は考えた。そのうえ昭和十七年六月という時期は、米国が総力を挙げて日本に立ち向かおうとしていた時期に当たる。大西洋に向けていた空母も太平洋に向けてくるに違いなかった。ミッドウェー海戦によって、先手を打って米国の太平洋空母を叩いておかないと日本に勝利はない。

山本を始め連合艦隊司令部が抱いた、その悲愴な思いがミッドウェー作戦を中止に向かわせない理由だった。こうして、この海戦は戦端開始わずか半年という早い段階で行なわれたのである。見切り発車ともいえる拙速さであり、すでに時間に追い詰められていたと思われる。昭和十七年六月四日、海軍挙げての総力戦であった。

海軍軍令部など、山本のいうなりだった。彼が進言すれば、ほとんど通らないものはなかった。頼りは彼しかいなかったのである。だからこそ、山本が開戦反対をもっと強硬に訴えていたなら、歴史はどう変わっていたかわからない。確かに、開戦前、戦争突入は無謀だと彼は反対した。暗殺を覚悟して反対した。しかし、それはどこか弱い。どこか妥協の臭いがないとはいえなかった。私には、そういう気がする。

想像するのに、山本も自分の力を試してみたかったのではないか。戦略に優れた人物ほど、肝心なときに陰に隠れたさらに重要なものを見失う気がする。山本こそ、米国を最もよく知る一人ではなかったか。

それに加えて、何とかなる、神がついてくれているという訳のわからない思い込みが日本にはあった。日本は神国であり、いざとなれば神風が吹いてくれるというものだ。鎌倉時代、北条時宗が第八代執権

のとき、弘安の役で台風が蒙古を海に沈めてくれた経験が下手な神話になっていた。実際には、台風のお蔭もあったが、時宗の立てた戦略が功を奏したのだ。勝てるはずのない日露戦争にも勝った。こうしたことが神話となり、かつての日本には、科学性合理性を欠く部分が出来上がっていた。

四．暗号解読

日本の戦法は作戦重視、情報軽視であった。確かに、情報が重要であることは軍部にもわかっていた。当然日本にもスパイと呼べるような人間もいたし、諜報機関もあった。しかし情報は、作戦が上官に通りやすくするための補完材料として使用されたように思える。情報によって作戦を立てるのではなく、初めから作戦ありきなのである。それに対し、米国は違っていた。徹底的に情報重視であり、情報に基づいて作戦を立案するのである。

その一方で、日本海軍の暗号は完全に解読されていた。このことはすでに、この海戦に先立つ『珊瑚海海戦』で経験済みのはずだった。それにも拘わらず暗号は作り直されることなく、そのまま使用されてしまった。これを無謀、杜撰、失態といわずに何と言おう。あるいは解読されていたことさえ、気づかなかったということか。あるいはそうかもしれない。失敗の原因を総括しない日本軍らしいと言えばいえることだ。

日本軍という組織は反省しない。常に自信過剰、常に自分が正しいと考えている。

こうも言える。暗号を作った海軍はその出来栄えに酔っていた。日本語は難しい言語で、それをさらに暗号化したものが米軍如きに解読されるはずがない。全くの過小評価である。

ところが、この暗号は日本の陸軍によってもすでに解読されていた。そこで、陸軍は危ういことを海軍に一応は忠告した。が、自信過剰の海軍には危険感がなく暗号を見直さなかった。これを能天気といわずに何と言おうか。

一般に暗号などというものは、時間と労力さえかければ必ず解読できるものだ。このとき米軍はすでに百五十人を投入し、二十四時間、解読作業を進めていたのである。

さらに日本海軍の人の好さを示すエピソードを付け加えたい。ミッドウェー作戦について、米軍はその日取りと作戦を暗号解読によってほぼ把握していたが、ひとつだけわからないことがあった。それは、どの島を襲うのかということだった。暗号の中で、島をＡＦと呼んで

いたためだ。ＡＦとはミッドウェーなのか、それともさらに南方のジョンストン島なのか。そこで米軍は、日本軍をひっかけようと暗号化されていない生の文章のまま、こう打電した。『ミッドウェーには真水が少ない』。

すると日本軍から例の暗号無線で、『ＡＦは真水が少ないそうだ』と上層部に報告がなされた。これでＡＦとはミッドウェーのことだ、とわかってしまった。どうして日本人はこうも人が好いのか、どうして生電文を疑わないのか。どうしてすぐ反応してしまうのか。疑う力がなければ、戦争に勝つことはできない。戦争とは騙し合いの側面もある。日本人が戦争に適性がないことのもうひとつの証明である。

かくしてすべての暗号は解読され、裸にされた状態で南雲艦隊はミッドウェーに進出したのであった。

五．判断ミス

空母赤城に搭乗した南雲中将率いる連合艦隊機動部隊は、前述のとおり、ミッドウェー島を急襲し、これを占領。次いでハワイにいる空母三隻を誘き出し、これを撃滅するという綿密な作戦を立てた。

この作戦は後世の歴史家も証言しているように緻密な作戦だったと言えないこともない。ところがこれがすべて敵に洩れていたのだから如何ともし難い。空母三隻はすでにミッドウェー島北東に待ち伏せしていたのである。しかも日本海軍にとって運の悪いことに、偵察機による索敵で空母の姿を捉えることができなかった。そのとき偵察機は厚い雲の上を飛んでいたのである。もともと日本軍は偵察に重きを置かないところがあり、偵察機の数が少なかったことも災いした。

日本軍はまず爆撃機で島を攻撃した。ところが、敵基地は完全な準備をしてこれを待ち受けていた。地上から猛烈な勢いで高射砲を撃って来たのだ。とても当初予定の爆撃機の数では不足することがわかった。当然、飛行部隊はさらに多くの爆撃機を要請してきたが、これは南雲司令官にとって全くの予想外であった。

空母に搭載していた残存の爆撃機には、敵空母を攻撃するために魚雷を積んでいたのだ。魚雷では敵の基地を攻撃できない。そのため、急遽、空爆用の兵器に装備を変えなければならなくなった。兵装転換である。だがこれは簡単な作業ではなく、九十分を要してしまった。

これが致命的な結果を生む。

何故なら、この後に敵空母の奇襲が開始されたからである。そのときの海軍にとっては突然敵空母が出現したような印象だった。すべて予想外である。ところが、これは図上演習でも起きた事態であった。

だから、もしもいい加減な条件変更をせずに演習を突き詰めていたなら、違う対応ができたに違いない。

敵空母の奇襲に対し、すぐにでも爆撃機を空母攻撃に向かわせなければならない。しかし、搭載兵器は魚雷ではなかった。確かに地上用爆弾でも空母を攻撃できるが、その効果は大きく減殺される。

そこで南雲はまた考えた。出した結論は、再び魚雷を搭載し直すことだった。これが二つ目の判断ミスである。地上用爆弾でもよかったのだ。すぐにでも敵空母を攻撃すべきだったが、再びの兵装転換に時間を取られ、爆撃機は空母を飛び立つことさえできなかった。また九十分を要することになったからである。

その間、敵空母から急降下爆撃機ドートレス三十機が味方空母の上空に迫ってきた。零戦が空母を守っていたのだが、ミッドウェー基地から飛来した敵戦闘機と、そのとき低空で空中戦を演じていた。

零戦は大変優秀な戦闘機であり、そのときも殆ど無傷に近い形で敵戦闘機を撃ち落していた。だがそれは上空百メートル乃至二百メートルという低空であったためドートレスには応戦できなかった。ドートレスは上空三千メートル乃至四千メートルから急降下してくるのである。零戦からの射撃が命中するはずもなかった。

空母赤城、蒼龍、飛龍、加賀の甲板上には、多数の魚雷やら爆弾があった。正に散乱という状態だった。これがドートレスの爆撃によって爆発炎上したのである。結果、飛龍以外の三隻の空母が大破撃沈されるという惨憺たる状況になった。残った飛龍は果敢にも空母ヨークタウンを撃沈したが、その後やはり大破して沈没した。

目を覆うような惨状であった。特別会計予算の七割を要して建造された空母が、全艦、海の藻屑と消えたのである。こうなっては、海軍のその後の戦争に勝算があるはずもない。短期決戦は不可能になり、結局、その後の海戦で殆ど勝利することはなかった。いわば、この敗戦が戦局を完全に転換させる分水嶺となったのである。

南雲に実戦の経験はなかった。大切な兵士たちの命と莫大な予算をかけた貴重な空母、爆撃機等の重みが彼の肩にはかかっていた。それにも拘わらず、海軍軍令部は実戦経験のない南雲に重職を託したのである。言ってみれば、兵学校の成績と年次だけで彼を機動部隊司令長官に任命したのである。

勿論、南雲の失策を弁護する論調は、現在の歴史家にもある。なにしろ、空母対空母の戦いはその時点では、一ヶ月前の『珊瑚海海戦』以外、まだ殆ど誰も経験していなかったからだ。学ぶべき前例がまだなかったと言えないこともない。

だから、私も、南雲に気の毒な面があったと思いたい。だが、わず

か一ヶ月前の経験であっても、それを即刻分析し戦略化すれば違う結果もあったのではないか。時間の問題ではなかった。大変な額の国家予算と非常に多くの将兵の命がかかっていたのだ。失敗を生かさなかったことは、山本や南雲を始めとする海軍の犯罪である、と私は思う。

六．責任を取らされることのない人事

ミッドウェー海戦で壊滅的な敗北を招いた、空母機動部隊（第一航空艦隊）司令長官の南雲忠一中将はそのとき空母赤城に搭乗していた。海上に投げ出された南雲は、後方の戦艦大和になんとか救助された。大和には海戦全体の動きを総括していた連合艦隊司令長官の山本五十六がいた。

南雲は、参謀長の草鹿龍之介少将をして、次のように山本に復命し謝罪させた。自らは、山本の前に立つ気力もなかったのだ。

『大失策を演じ、おめおめ生きて帰れる身ではなかったのですが、ただただ復讐の念に駆られ生還してきました。どうか復讐できるよう取り計らって頂きたい』

これに対し、山本は一言、『承知した』と言った。たったそれだけだった。結局、山本は、大敗北の責任者である南雲と草鹿を咎めることはなかった。また、その山本も海軍軍令部から何の咎めも受けなかった。一般人には腹の立つ処遇だが、こうしたことは日本では一般的である。

だが米軍ではあり得ない。

例を挙げるなら、真珠湾で大敗北を喫したそのときの太平洋艦隊司令長官キンメル大将は即刻更迭。代わってニミッツが就任した。

また、珊瑚海海戦では立派に戦ったフレッチャー少将を、ガタルカナル戦では戦意が欠けていたとして一方的に更迭した。

だから山本も南雲も米国海軍にいたなら、更迭は免れなかったであろう。

その後、南雲は第三航空艦隊司令長官に座り続け、二年後の昭和十九年サイパンで戦死した。山本は周知のように昭和十八年、無線を傍受されブーゲンビル島上空で撃墜され行方不明となった。

確かに当時海軍兵学校の卒業者は少なく、そのため海軍の要職に就くべき人の数は限られていた。しかしだからといって、責任を取らないというのは士気に影響しないはずがない。失敗が少しも重くならないのだから肝心なところで無責任になる。緊張感がなくなるのは当然のことだ。

したがって、兵学校の卒業者でなくても、実戦で鍛えられた将校を

要職に就かせてもよかったのではないか。叩き上げであっても、日本は将校をもっと多く養成し、しかるべきポストに据えることで活性化を図る必要があったのではないか。

余談だが、現代の高級官僚もまったく同じである。異性問題等によるスキャンダルや収賄等の不正で更迭、左遷はあっても、政策の失敗では何ら責任を取らされることがない。出身、学歴、経歴そして年功序列に重きが置かれ、エリートは責任を問われることがない。日本はそういう不可思議な国であり、反省や総括のできない国なのである。

ここでまた米国の話で恐縮であるが、米国では無謀な政策で失敗し、例えば、国に多額の損失をもたらした場合、身柄を収監され裁判にもかけられる。それだけ託された職務が重いということだ。

七．敗戦の隠蔽

ミッドウェー海戦の大敗北は、太平洋戦争の方向を大きく変えることになった。このときにこそ、この事実をオープンにし詳細な形で国民に報告すべきだった。ところが、あろうことか事実は隠蔽された。

事実は陸海軍上層部だけに知らされ、一般国民のみならず、驚くべきことに天皇にも知らされなかった。天皇に知らせると、戦争中止の動きにつながっていく。それを恐れたのであろう。

因みに、戦闘に加わり助かった兵士は帰国しても隔離され、一般の人の目には触れさせなかった。

新聞には『ミッドウェー海戦に勝利。敵空母ホーネット、エンタープライズを撃沈』と書かれた。確かにヨークタウンを撃沈、さらには零戦が撃ち落した敵爆撃機もかなりの数に上った。だが日本軍が被った損害はその比ではなかった。空母四隻のすべてが大破撃沈、爆撃機三百機が墜落破壊、戦死した将兵は三千人以上という惨憺たるものだった。さすがに陸軍はこの敗北を重く受け止め、後の海戦では勝つことはできないと考えた。ここで戦線の規模を縮小せざるを得ない。これが正常な判断。これがある意味、戦争終結に向けての大きなチャンスであった。そのためには勇気が必要だった。世論を納得させなければならないのである。それまでの半年間、あまりに華々しい戦果を上げ、破竹の勢いであった戦線を、いまさら縮小などと当の軍部から言えるはずもなかった。

しかし、ここが最も肝心なところであるが、軍部は大恥を掻いてでも、メンツを失ってでも戦争を終結させるべきであった。だが、できなかった。結果的に、軍部のそのメンツがどれほど多くの命をさらに奪い、不幸の種をさらに蒔いたことか。そもそも日本という国は止ま

ることができないのである。

そして、その後始まる連戦連敗の報はすべて隠蔽され、逆に勝利の文字だけが新聞紙上に躍った。誇大な虚偽が大本営発表と同意義となったほどの虚報の連続であった。

日本国民の大いなる犠牲のうえに戦争は継続され、沖縄戦、東京大空襲、それに続く原爆投下へと悲劇は拡大していったのである。

〈了〉

『印旛文学の会』会員と連絡先

いんば 華子（はなこ） 印西市
bulldog_dolla_mon@hotmail.com

香取（かとり） 淳（じゅん） 印西市
katorijun27@gmail.com

唐瀬（からせ） 光（こう） 船橋市
effect_fact_mouth_karase@yahoo.co.jp

中川（なかがわ） とら 印西市
nakagawatora1@gmail.com

畑中（はたなか） 康郎（やすろう） 印西市
ktakasug@am.em-net.ne.jp

土方（ひじかた） 杳（よう） 市原市
nykkmgs@apricot.ocn.ne.jp

高橋（たかはし） より（イラスト） 印西市
junko328p@softbank.ne.jp

【編集後記】

■文芸『草の丘』は、web同人誌として四年前に産声をあげて以来、年に二回のペースを守りながら詩と小説を掲載してきた。今回は、詩と小説に加えて、評論『私見 ミッドウェー海戦』を畑中康郎が書き、よりバラエティに富んだ内容となった。さらに随筆や書評などが加われば、本誌の幅と奥行きが広がるので、新たな投稿を歓迎したい。

■第八号の発刊に当たっては、編集のあり方について考えさせられることが多かった。言うまでもなく詩や小説は、文字を用いて作者の意思や感情、感動などを表現するものであり、作者の個性が最大限に生かされることが望ましい。一方、発表された文章は、文字媒体を通して読者に伝えられるものであり、その文字や文章は読者に伝わりやすく理解しやすいものであることが求められる。

文芸作品に用いられる文字と文章は、それ自体が芸術表現であると同時に伝達媒体でもある……という二面性を持つため、前者を重視し過ぎると、後者の役割が減弱してしまう。逆に後者を重視し過ぎると、前者の独自性がそがれていく。

筆者はこれまで、責任校正（編集者に一任）に近いスタンスで編集に当ってきた。ところが、「校正をすればするほど、自分のものではなくなってしまう」という作者の悲痛な声に接し、やはり作者の個性は最大限に尊重されるべきである、と強く感じた。そこで今回は、「作者の文章を最大限に尊重した編集」に心掛けることにした。が、しかしそのやり方では時間と手間が嫌というほど掛かってしまう。「言うは易く行うは難し」を地で行くことになった。

幸いなことに『メール』という文明の利器が、この問題の解決に大いに役立った。かつては時間がないため、あとは責任校正に……というようなケースでも、メール添付の原稿に朱書、あるいはコメントすることで、作者の意思を尊重した校正は格段にやりやすくなった。

ＩＴを活用したweb同人誌は色々な意味で『モノを書きたい人』の創作活動をサポートしてくれると思う。こころざしのある方の加入を心より歓迎したい。

〈香取 記〉

草の丘　第八号

発　行　二〇一五年六月二十日

編集兼発行人　印旛文学の会　香取　淳

連絡先メール katorijun27@gmail.com

携帯　so3_higu1@ezweb.ne.jp

ＵＲＬ http://bungeikusano-oka.raindrop.jp